真・恋姫†無双～外史～異国の剣士

なべにゃ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真・恋姫†無双～外史～異国の剣士

【Ｎコード】
Ｎ４６０８Ｑ

【作者名】
なべにゃ

【あらすじ】
不思議体験をした男に降りかかる更なる不思議。
恋姫的な世界に紛れ込んだ剣士が織り成す戦国絵巻。
天下統一？三国平定？いや、オレそんな暇ないから！
オレの目的はそんなことじゃねぇ！

1話

・・・・・・・・・・

男は旅をしていた。
ある目的の為に。
それは、切実な願いでもあり、祈りかもしれなかった。

時に聞こえる『あきらめろ』という言葉。
だが、男はその言葉に従うわけにはいかなかった。
例え、それが自身が引き起こしたことであったとしても、諦める訳にはいかなかったのである。

どれくらいの月日を遡(さかのぼ)らねばならないだろうか・・・。

とある酒場で、酒を呑んでいた時のこと。
夜も更け、店主が看板を下げても、男はまだ呑み続けていた。
店主とは既知故、いつも気が済むまで呑ませてくれるのであるが、この日に限っては、店主が急用ができたと言って、男を残し早々に出かけてしまった。
悪いとは思いつつも、朝までここで過すか・・・そんな気持ちもあり、安易に留守番を買って出たのであるが。

丑三つ時に差し掛かり、いい具合に酔いが廻ってきた頃、店の戸板をドンドンっと叩く音がした。

（店主が帰宅か?朝まで戻れないと言っていたはずだが・・・）

立ち上がり、店の入り口を開けると、そこには白い着物姿の妙齢の女が立っていたのだった。
男は、ハテ?と思いながらも、店主は不在故、日を改めてもらいたいと伝えた・・・伝えたのだが、女はするりと店内に入り、時間が無い為、無理を承知で御酒を分けてもらいたいと言うのだった。

一応留守番とはいえ、勝手知ったる酒場である。
面倒くさいと思いながらも、こんな夜更けに来る女だ、何か訳ありなのであろうと勝手に解釈し、女から受け取った瓢箪に酒を詰めると、『ほらよ』と手渡すのであった。
女は何度も頭を下げ、助かっただの、ありがとうだのと口にすると、そのまま出口へと足を向けた。
男は待てよ?と思い、酒代を請求すると、女は、貨幣を持ち合わせておらぬと言い出す始末。
店主とは顔なじみかと聞けば、そうではないと答えが帰ってくる。
それでは掛け売りもできぬし、困ったことだと思っていると、女は代わりに・・・と懐から小さな紙包みを取り出した。

「これはなんだね」

男は訝しげに尋ねると、仙人からもらった妙薬であり、万病に効く大変ご利益のあるものだ・・というのであった。
ふむ、仙人というのは眉唾であるが、どこかの医者から手に入れたものであろうと、また勝手に解釈をし、仕方が無い・・・と珍しく慈悲心をだした。
納得はしてはいないが、金がないなら仕方がない、これを酒代として貰っとくぜと女に言うと、女はまた頭を下げ、そしてそのまま店を出て行った。

なんとも珍しいこともあるものだと思いながら、戸板を閉めようと出口から外を見ると、先ほど出て行った女の姿が見えない。
外は暗いが、あの白い着物だ、すぐに見えなくなるとも思えない。
こりゃ、狐か狸の仕業かね・・・とも考えたが、ま、過ぎたことだな・・・そう呟くと、呑み直すために座り直したのであった。

そんな酒場での出来事を忘れかけた頃、男は風邪をこじらせた。
布団の中で、うんうん唸るものの、熱は下がってくれそうに無い。
男は天涯孤独の身の上故、看病する者もおらず、また、医者に行くのも面倒がった結果がこれだった。
何時間寝ていたのか、それすらわからぬ程時間が過ぎた後、ふと思い出した。

「そういやぁ・・・この辺に・・・おお、あったあった」

不思議な女にもらった薬を、律儀に引き出しに仕舞ってあったことを思い出し、何も飲まぬよりはマシであろうと・・・万病に効くと言っていた言葉を頼りに、水と共に飲み込んだ。
飲んだはいいが、その後、熱が急激に高まり、あまりの高熱に気を失ったのであった。

差し込む朝日の眩しさで目が覚めると、男は己を蝕んでいたモノがいなくなり、すこぶる気分が良いことを自覚した。

（　万病に効くとは偽りではなかったか　）

本当かどうかはわからぬが、風邪は治ったようなので問題ないと考えた。

だが、男がもう少し注意を払っていれば、また、紙包みに書いてあった文字を理解していれば、このあと起きる悲劇は回避できたかもしれなかった。

『是一種致命的毒藥藥水，一個有趣的副作用的影響』（妙薬であり猛毒、面白い副作用あり）

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「今日も雨か」

男のぼやきは、降りしきる雨の音に消え誰の耳にも届かない。
男は雨が嫌いであった、故に雨の日は外出を控える。

「はぁぁ・・・」

溜息が漏れるが、それを咎めるものもいない。
途絶えることのない雨を、見つめることしか今はできないでいた。

あの日・・・あの薬を飲んで以来、薬学に触れてきた。
己が飲んだ薬がどんなものであったのかを知ることで、薬の副作用を打ち消す方法を見つけようとしたのだ。
だが、この時代、医学というものは敷居が高く、また、難解な学問であった。

ただ男が幸運であったのは、己が勤める因幡藩のお抱え医師と飲み仲間であったことだ。
そこで、休日になると、医師の元に通う。
医学書や薬学書を読ませてもらい、また、診療所の手伝いもこなしながら、己の秘密に迫ろうとしていたのだが、知れば知るほど、聞けば聞くほど、己が持つ症状が、医学ではなく、呪術や仙術の類ではないかという思いを強く持つようになっていくのだった。

そして男は、旅に出ることにした。

己を病と称し、その治療のためと届出をし、国を出た。
霊水が湧き出る話を聞けば、そちらに。
高名な祈祷師がいると聞けば、あちらに。
神社仏閣、霊場、聖地・・・兎に角、巡り巡ったことは間違いない。

だが、どこもハズレ。

男の症状は、良くも悪くもならなかったのである。
だが、己が背負う責務を果すためにも、諦めることはできなかったのだ。
家を守り、国を守る・・・それが背負うべきもの。
剣士には守るべきものが必要だ、そうでなくては戦えなくなる。

男は剣士の家系に生まれ、初代から数えで十代目にあたる。
先代から皆伝と共に、家督と家宝である刀を受け継ぎ、藩の指南役を務めてきた。
当然、次代への継承が己の責務であるが、未だに嫁もいなければ子もいなかった。
一人身であることは不自由でもあるが、気楽な生活でもある。
あんなことがなければ・・・であるが。

そんな男は、今日、名も無き社に祭られているという御神体を拝みにいくところであった。
雨が止んだ頃は・・・すでに月がでていたが、神主は夜でも構わないと言っていた。
急ぐ必要も無いが、のんびりする必要も無い。
また降るのでは？と雨を警戒しつつ、大き目の番傘を肩に背負いながら、ふらりふらりと歩いていた。

社につくと神主が、待っていたとばかりに中へと誘う。
大きくも無い拝殿に上がると、目の前に少し古びた大き目の鏡が目に入った。
聞くと、鏡は大変古く貴重なもので、五百年前のモノとも、千年前のモノとも言われているそうだった。
それが本当かどうかは兎も角、確かに何かしらの力を秘めているようにも感じられた。

神主の承諾を得て、その鏡を手にした・・・そのとき、窓から差し込む月の光が鏡に映ったのである。
眩しい・・・そう思った瞬間、男は奇妙奇天烈なことに鏡に吸い込まれるように、その場から姿を消したのであった。

男の名は、銀閣（ぎんかく）。
当代随一の居合い抜きの達人と名高い、宇練流抜刀術十代目当主・・・宇練銀閣（うねりぎんかく）といった。

1話（後書き）

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ついつい書きたくて書いちゃいました。

自己満足で終わらぬよう、頑張りたいと思います。

楽しんでいただけると嬉しいです。

2話

・・・・・・・・・・

差し込む朝日の眩しさで目を覚ました銀閣は、身体を起こすと、自分の体と腰の刀を確認する。

「ん・・・・よくわかんねぇが、既に不思議を知っている身だ、さらに追加があっても驚くことも無い・・・か」

鏡に吸い込まれた。
そのこと自体は憶えている。
しかし、ココがどこなのかはわからない。
まぁ何にせよ、移動しなければなるまい・・・雨が降る前に、屋根がある場所へ入らねばと思うのだった。

銀閣は、倒れていた場所から少し移動すると、足跡を発見した。
人に踏みつけられた草の跡があることから、ここが、人の生息する場所であることがわかった。
ただ、それだけのことだが、少し安堵した。
無人島や、人も動物も生息しないような場所であったらどうしようかと、密かに心配だったのだ。
何にせよ、この跡を辿れば、人がいる場所へと出るやもしれぬし、村や町に続いているのかもしれない。
そんな期待を持ちながら、歩く・・・歩く・・・歩く。
太陽が真上に見える頃、林を抜けた銀閣の目には、朽ちた砦のようなモノが見えた。

「なんか……悪い予感しか…しねぇな……」

朽ちかけてはいるが、砦か・・・しかし、このような様式は見たことが無い・・・が、自分が知らぬだけかもしれねぇなと、考えながらそれへと近づいていくのだが、悪い予感は、だいたいからして当たるものだ。

「おい！兄ちゃん！聞いてんのか！命が惜しけりゃ有り金全部置いていきな！」

「それと、その奇妙な服もな！」

清潔とはいえない身なりの男達が、それぞれ剣や槍や棒などの武器を持ちながら、銀閣を取り囲むように現れた。

この状態は……いわゆる山賊に囲まれていると、言い換えてもいいかもしれない。

数にものをいわせ、余裕の表情を崩さない山賊たちを一瞥し、銀閣はアクビと共に漏らす。

「ふわぁぁ……めんどうだな……」

そんな銀閣の仕草に、山賊達は殺気を高め、さらに凄む・・・

「おい！聞いてんのか！

「覚悟決めろや！」

「生きて帰れると思うなよ！」

殺し文句とでもいうのか、肝の小さい者であれば、その言葉を聞いただけで尻込みしそうな雰囲気なのだが、銀閣は自然体だ。

「おいおい・・・何言ってるんだ?そんな小さな声じゃ聞こえずらくてかなわねぇな。もう少し近づいてくれよ、オレは耳が遠いんだよ」

耳に手を添え、さも聞こえずらそうな表情を見せる。
その仕草に、山賊達は馬鹿にした表情やニヤニヤした笑みで銀閣に近づいてしまう。
そこに引かれた境界線に気づきもしないで。

1歩、2歩、3歩・・・

シャリン!

繰り出されるのは、宇練流奥義と言われる究極の居合い抜き。
柄に手を伸ばしたのと同時に『しゃりん!』という鍔なりの音が生じるほどの想像を絶する速度に、傍目には刀の柄をつかんだだけの動作に見えてしまう。
抜かれた刃の、きらめきすら見せぬこの速度から『零閃』と呼ばれ、抜刀術の最終形とも称される。

「抜刀術　零閃(ゼロセン)・・・また、つまらぬものを切ってしまった・・・なんてな」

そして、当然のように先頭を歩いていた山賊の上半身が…ズルリと

胴から滑るようにズレていく。
斬られたことに気づかない・・・いや、気づいた瞬間死んでいる。

「な!?」

シャリン!シャリン!シャリン!シャリン!シャリン!

その言葉を誰が口にしたかはわからないし、詮索も無意味だ。
何故なら、その疑問に応える必要がないから。

「 零閃編隊五機! 」

銀閣が繰り出す居合い抜き五連撃・・・鍔なりの音が止んだそのとき、そこに立っていたのは銀閣ただ一人きりであった。

斬り捨てた山賊達の懐を探ると、わずかばかり……本当にわずかな貨幣が出てきた。
しげしげと見つめ、触り、噛んでみる。
銅なのか真鍮なのかわからないが、銀閣が持っているモノとは全く違う種類であった。

「ふわぁぁ……めんどうだな……」

アクビをしながらも、山賊達の風貌、服装、そして貨幣・・・それらをまとめて考えるに、ここが自分の国ではなく、他国であること

は理解できた。
もしかすると、聞くところの明や琉球といった外国なのかもしれねぇな・・・と勝手に解釈するのであった。
とにかく、因幡へ帰る手だてを探さねば成るまい。
その前に、ここが何処であるかを詳しく知る必要があるのであるが、それは追々わかるであろうと銀閣は軽く考えていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

孤立無援……と誰が言ったのか覚えていないが、銀閣は砦の中で己の状況を嘆く。
山賊達を斬った後、とにかく話を聞こう…と爽やかな感じの友好的な笑顔（銀閣的には）で砦の中に入っていったのであるが、こちらの言葉に対して帰ってくるのは暴言と暴力のみ。

（おいおい、言葉通じてるのか？）

そんな疑問を持つほど、山賊達は銀閣に襲いかかり、結果……三途の川を全員が渡るハメとなった。
銀閣は知らなかった……己の笑顔が醸し出す死神（しにがみ）的なオーラを。
その笑顔とオーラが、『　死ぬ？もしくは、死ね！』と受け止められ、問答無用の残劇となってしまった。
山賊からしてみれば、こんな山奥に1人でやってくる奇妙な服装をした黒銀色した長髪の男が『まとも』な訳がないと考えたであろう。
物の怪か仙人、もしくは自分たちを討伐しにきた官軍だと思っても仕方がないところである。
もう少し大きな心で銀閣と接していれば、もう少し長生きできたかもしれないが……それも今となっては過ぎたことである。

「さてさて、どうしたもんかな…」

1人ぼやいてみても、何の手だても思いつかなかった。
取り敢えず山賊達の懐から集めた貨幣を巾着にしまうと、他に何かめぼしいモノがないか…と砦の中を歩き始めたのである。

腹も減ったし、何かないものかと思いながら、食料庫らしき場所から食べられそうな物を探し出したが、生で嚙(かじ)るのも憚(はばか)られる。
火を通せば大丈夫だろうと思い、鍋になるような物を探し、また物色を始めた。
台所のような場所で、陶器でできた壺を見つけたが重くて両手で持たねばならぬほどであった。
見渡すが、お目当てのものは無く、仕方がないので壺を持ち上げる。

「なっ！」

2…3歩歩いたところで、朽ちていた床に足を取られ壺ごと倒れ込む…が、持ち前の反射神経でバランスを持ち直す…と思いきや、結局は転倒してしまった。

ガシャーン！

手に持った壺を庇ったせいであるが、その拍子に床にあった大きな瓶(かめ)を割ってしまう。
壺は守ったものの、銀閣は割れた瓶(かめ)から溢れる水でずぶ濡れになり、
『しまった！』といった表情の銀閣に容赦なく襲いかかる己を蝕む副作用効果……呪いともいえる体質があらわになるのであった。

「こいつは…しくじったぜ」

2話（後書き）

・・・・・・・・・・

どこかしら他の作家さんと被る部分もあるのでしょうね・・・

できるだけ自分らしさを出せれば・・・と思ってます。

楽しんでいただけると嬉しいです。

3話

・・・・・・・・・・

やれやれ…そう思い、惚けていても仕方がないので、起きあがり衣服を直す。
いつもなら、着替えるところであるが生憎と今は持ち合わせていない。
濡れた衣類は気持ち悪いこともあり、袴を脱ぐ。
ぶかぶかになった長襦袢の裾をまくり、羽織も脱ぎ、何処に干すか…と考えた時、外からの異音に気が付いた。

「ん？生きていた者か……いや、違うな」

砦の中は、ほぼ歩き回ったはず。
そして、生存者はいなかったことは確認済みであるから、音がしたならばそれは侵入者だと考えられる。
山賊の残党が戻ってきたのか…とも思い、物陰から気配を消し去り、音のする方を盗み見る。

「星（せい）さん、気をつけて下さい！まだ、どこかに潜んでいるかも……」

「そうだな、この状況から見るに直前まで行われていたと考えて間違い在るまい」

「何人いるか～わからないですしね～」

まずいな……瞬時にそう考えた銀閣であったが、今のこの状況では何ともし難いのも事実。
ただ、目に映るのは槍を構えた少女とキョロキョロと辺りを伺うメガネの少女、そして、頭になにか…よく判らないものを乗せている少女。
まったくもって統一感のない服装…だが、山賊の仲間であることはないだろうと感じた。
しかし、こんな所に少女達がやってくること自体に疑問が湧くが、ここが山賊のアジトであるならば、近くに村か街があり、そこから派遣された討伐隊の斥候であるに違いないと…また勝手に解釈をした。

ならば情報を得るためにも、彼女たちと話をすることが得策である。
しかし、今の状態ではなにかと不都合が生じるが…どうしたものかと考えていると。

「そこか！」

気配が漏れたのか、少女が敏感だったのか、銀閣がいる場所へと槍を持った少女が駆け寄ってきた！
ダンッ！と踏み込む脚と共に槍による突撃で入り口にあった戸板が吹き飛ばされる。
とっさに避けた銀閣であるが、その踏み込みは鋭かった…故に、いつも通りにすることにした。

（詐術：泣き真似）

「うわぁぁぁぁぁぁぁん」

何故に泣き真似？と思うかも知れないが、今の銀閣の姿は、８才前後の少年姿！

そう、銀閣に降りかかった呪いというか薬の副作用とは、少年化。

水で身体が在る一定量以上濡れると……身体が瞬時に縮み、少年姿になってしまうのである。

身体は子供、でも頭脳は大人。

どこかで聞いたようなフレーズであるが、実際、自分がこうなると……へこむ。

初めてこの姿になったときに、銀閣は狂気狂乱したものだ。

だが、その対処方法もその場でわかった為、その秘密が他人へ露呈することはなかったが、それでも二日ほど寝込んだものだ。

そんな銀閣であるが、突然の事態を何度も経験する内に、この難儀な身体とのつき合い方も理解できていた。

そして、子供状態での上手な対処方法や活かし方も身につけていったのであった。

子供に成りきり、子供の利点を大いに活用する……詐術と名付け…

自分を納得させ、プライドとの折衷をし、涙と諦めと割り切りの結果…今日に至るという訳である。

更に厄介なのは、意識せずに話すと、何故か少年になるとしゃべり方が丁寧になってしまうのだ。

大人な銀閣をしている者がいたならば、皆、声を揃えていうだろう

『気持ち悪い』と。

運命の悪戯か、神の采配か、この身体が元に戻る……その日まで……銀閣の旅に終わりは無いのだった。

さて、回想は終了し、銀閣の前には、槍を構えたままの少女が驚愕の表情で硬直していた。

「星さん！今、子供の泣き声が！」

「だめですよ～星ちゃん～子供を泣かしたりしちゃぁ～」

そう言いながら、先ほどの少女達が近づいてきたところで、銀閣はさらに術を発動させていく。

（詐術：泣き怯え）

「うえぇぇぇぇぇん……恐いよぉ…恐いよぉ……」

自分の膝を抱え、顔を伏せ、ひたすら怯えるようにガタガタ震えながら泣く………。

演技なんだ…術なんだ…オレのプライドはこんなことでは折れないんだ…と心の奥のさらに奥で叫んでいたが、それは誰の耳にも届かない。

ただ、そこにいるは、突然現れた暴力的な女の所業に怯え咽び泣く少年の痛ましい姿であった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「よしよし…もう泣くな…大丈夫、私…いや、私たちは恐くないぞ」

「星ちゃん、驚かせた本人が言っても効果は薄いですよぉ～」

「そう言うな風…これでも少し凹んでいるのだからな」

「あれ？凛ちゃん…どうかしましたか？」

銀閣をあやす自分たちのそばで、周りへの警戒を怠らない凛と呼ばれた少女は風という名らしい少女に自分の考えを口にする。

「あ、いえ、おかしい…というか、奇妙過ぎると思いませんか風…こんな所で、この現状…村長に言われたおよその数と同数の遺体…そして、生き残りはこの子だけなんて…」

凛はそう言うと眼鏡を指で押し上げつつ、銀閣をじっと見る。
その視線に気が付いた銀閣は、『そりゃそうだろうな』と思いつつも、そんなことは決して悟らせない。
そして、風の背中に隠れ、恐る恐るといった感じで上目使いに顔を覗かせる。

「おねえちゃん…恐い人？」

その言葉を聞き、何故か…ガビィーン！とショックを受けた凛は、両手を地面につけ、ぶつぶつ…と呟いている。
耳が良い者には聞こえたであろう、『おねえちゃん…恐い人…おねえちゃん…恐い人……』と。

「大丈夫ですよぉ～このお姉さんは恐くないですよ～いや、凛ちゃんの妄想力は在る意味恐いかもしれませんねぇ～」

「風！」

フォローなのか、フォローでないのかわからないことをいっているが、その言葉に凛は復活したようだ。

「とにかく、村に戻りましょう。報告もしなければならないし……この子も…ね」

凛の言葉に従い、少女達は村に戻る算段のようだ。

銀閣は、願ってもないことだが…と考えつつも、成るようにしかならねえか…と深く考えないことにした。

村へと向かう道中、少女達は銀閣に質問をするが、そこは上手く嘘と本当を織り交ぜ、誤魔化しながら、受け答えをしていく。

風の背中に隠れるようにトボトボと歩きながら、腰には身長と同じくらいになってしまった刀を差し、手には衣類その他を詰めた適当な袋を持ち、少女らに同行するのであった。

「なぁ君…名前は、なんていうのかな」

「あっ、ぼ、ぼく、宇練と言います。」

「宇練？聞いたことのない氏族だな」

「え？あ、ぼく、因幡ってところからきたんですけど……」

（ほら、知っているのか知らないのか教えろって）

「因幡？……聞いたこと無い地名だな…凛は知っているか？」

（そうだろうなぁ～なんせ海の向こうだからな……たぶん）

「いえ、私も聞いたことがありませんね。いったいどんな遠方なのでしょうか…」

（今度はこっちから聞いてみるか…）

「おねえさん達は、なんていうの？」

「おお、これは失礼した。私は、趙雲、字は子龍。子龍おねえちゃん…と呼んでくれると嬉しいのだが？」

少し照れながらも、先ほど驚かせた（と信じている）お詫びに、字を呼ぶようにお願いする様子は、趙雲を知るものにとっては驚くべきことであった。

当然、二人の少女は趙雲を別の生き物を見るかのように、じぃ…っと見ていたが。

「まあいいでしょう…私は、戯志才……いえ、郭嘉といいます。その、そうですね、私のことは、郭嘉おねえさんと呼んでも…いいんですよ」

色々と残念なポジションに立たされることの多い少女であるのだが、その知謀と個性は誰にも劣っていないと思いたい。

「……そして、郭嘉おねえさんと呼ばせた稟ちゃんは、いたいけな少年の服を一枚、また一枚と剥いでいき、露わになったその身体

の先にある禁断の場所へ手を・・・」

ぶしゅうううううう……

突然、凄い勢いで鼻血を吹き出した郭嘉(かくか)の姿を、驚きの余り呆然と見続ける銀閣だが、その横で、『はぁい、トントンしましょうね～』と普通に接している少女にも、在る意味驚いているのであるが。

「郭嘉(かくか)おねえさん…大丈夫なの…そんなに鼻血を吹き出して……」

（あの勢い、そして量…普通に死ねると思うんだが……）

そんな疑問は、『体質です』の一言で終わってしまうのであるが……

「少女には秘密がいっぱいなのですよ～そして、その秘密を少年に教えるべく、凜(りん)ちゃんはさらに……」

ぶしゅうううううう……

「はぁい、凜(りん)ちゃんトントンしましょうね～」

その様子を見ながら、成り行きとはいえ、ついてきたことを少し後悔し始めた銀閣であった。

3話（後書き）

・・・・・・・・・・

書けるかな～と思いながら始めたですが、やっぱり、難しいですね。

でも、頑張ろう・・・と自分に言い聞かせながら。

あはは（＾－＾

4話

・・・・・・・・・・

「は～い、凜(りん)ちゃん、お鼻かみましょうね～はい、チーン」

郭嘉(かくか)の鼻血が治まったので、最後は私ですね～と、自己紹介をし始めた。

「風(ふう)の事は、程立(ていりつ)おねえさんと呼んでくださいね～そして、こいつが・・・・・」

自分のことを程立(ていりつ)と名乗った少女は、自分の頭に乗ってる妖しい人形？を指し示し・・・

「オレは宝慧(ほうけい)ってんだ、よろしくたのむぜ坊主！」

腹話術なのであろう裏声であるが、そのやり取りに確かな親しみと、気遣いを感じられるような気がしたのであった。

しかし、変と言えば変な三人組である。

銀閣が、なんのかんのと質問し、彼女たちの情報を聞き出したのであるが、彼女たちは旅の途中にて立ち寄った村で、山賊に悩まされているという話を聞き、路銀も稼ぎたいということも相まって、山賊退治を請け負ったというのだ。

見た感じ、三人の内、郭嘉(かくか)と程立(ていりつ)に闘う力があるとは思えず、また、趙雲(ちょううん)1人であの人数と相手にできるとは思えない……何故なら、彼女たちはまだ、少女といえる年頃であると見受けられるからなのだ

が……。

「それで、宇練君は…どうしてあそこにいたのかな？」

趙雲の質問に、ビクッとさせた（やや怯えた振り）銀閣は、俯きながら躊躇いガチに話し出すのだった。

ヘタなことは話せねぇしなぁ…と、のらりくらりと応えていくのであるが……。

（詐術・憐憫）

「あ、あんまり覚えてないんですけど…気がつくとあそこにいて…外で、争うような音があっちこっちから聞こえたから…その…恐くて…隠れていたんですけど…（まぁ、百％嘘じゃねえよな）」

「ふむ…（どこからか攫われてきたと考えるべきか…身なりからして庶子とは思えぬし）」

「えっと、宇練君は、その因幡…でしたね、そこからどうやってここまで？」

郭嘉の問いかけに、ギュッと手にした袋を抱きしめる仕草で、さらに俯く。

「父上と…薬を探す旅をしてて…そ、それで…（半分は嘘だけど）」

「なるほど…それで、その君の父上は今どこに？」

「ち、父上は…父上は…（人生という名の）旅の途中に…（老衰と

いう）病気で……父上…父上…」

荷物に顔を押しつけ、泣くのを我慢している（振り）少年の姿に、『しまった』と、聞いてはいけないことを聞いてしまったとばかりに、郭嘉は顔を背けるのであった。

銀閣は、自分の演技力の効果に、自分自身が恐ろしいな…とブルブルっと震えたが、三人の娘たちは違った印象を受けたようだ。

「あ～稟（りん）ちゃんたら、また、泣かしちゃいましたね～悪いおねんさんですね～」

場を明るくしようとの考えであろうか…茶化すように郭嘉に突っ込みをいれる程立であるが、それでも持ち前の明るさは少し下がり気味のようだった。

「坊主、強く生きろよ。オレも応援してやるからな」

宝慧も言葉をかけるが、いつもの?毒が感じられなかった。

「だ、大丈夫です。僕は男ですから、父上がいなくても…いなくても……」

そう言葉を続けようとした銀閣を、趙雲はガバッと抱き寄せた。

そして、やさしくギュッと包み込むようにしながら、温かい眼差しで銀黒の頭を見つめる。

「我慢することも大事だが、時に吐き出すこと大切なのだぞ……」

暗に泣いて良いのだぞ、と言われているのであるが銀閣は、余りの

事態にやや冷静さを欠くと同時に、なんとも言い難い罪悪感を感じていたのだった。

（ありゃりゃ、まったね…こりゃ）

そんなこんなで話しこんでいると、目的の村に到着したようである。村の入り口から、ズンズンと村長の家へ一直線に向う三人の娘とオマケな銀閣。

小さな村であるが、明らかに文明の香は皆無で、銀閣は、どんな田舎なんだここは?という印象を受けながら、キョロキョロと周囲に目を走らせていた。

三人を出迎えた村長に、詳細を報告し、あの砦に住み着いていた山賊はもう来ないだろうと結論つけ、しばらくは安心であるものの、警戒は怠らないようにと伝え依頼は終了となったのであった。

今日はここに泊まっていって下され…という村長に甘え、案内された部屋で三人＋銀閣は宿泊をすることになったのであるが…。

銀閣は、この先どうするか…とにかく、この姿だけでも何とかしないとな…と考えていた。

ここが何処かもわからない内は、ヘタに移動するのも危険であるが、この少女達は優しすぎる…というかお人好しのようにも感じられる。情がが湧く前に別れないと、また変なことに巻き込まれるかもしれない。

「皆…少し聞いてくれ」

おもいおもいにくつろいでいたところで、趙雲が皆の顔を見渡しながら声を掛けた。

「どうしたんですか星?」

「あ、いや、私に1つ話があるのだが…」

「えっと、風も聞いて欲しいことがあるのですが~星ちゃんからでいいですよ~」

「そうか、悪いな風。それで、話というのは、私のことを“子龍おねえちゃん”と慕ってくれている少年…宇練君のことなのだが」

なんだか…凄く嫌な予感しかしない銀閣がそこにいた。

「私たちの旅に、連れて行ってはどうかと思うのだが、どうだろうか」

「あっ、それなら風も同じコトを言おうとしていたので~風は賛成ですよ~」

「えっ?星も風も…って、私だって考えていたんですからね!」

銀閣は思う、オレの悪い予感ってヤツは……なんでこうも当たりやすいのか…と。

呆然としていると、三人は銀閣を見つめ『どうだろうか?』といった表情になっている。

ここで断るのも不自然といえば不自然なのであるが…このままでは、窮屈であることは間違いない。

「あ、あの、お申し出は大変嬉しいのですが…その、旅はお金がか

かりますし…僕がいては足手まとい…（気軽な一人旅がしてぇんだが…）」

その言葉を遮るかのように、ずいっと銀閣の真ん前に身を乗り出した趙雲は、真摯な瞳に真面目なことをいう。

「独り身の少年など、この大陸には沢山いるだろう。しかし、宇練君！私は君と“縁”を持ってしまった、ここで君を捨てていくことなど私にはできない。心配するな、この美しい姉は、かわいい弟の為ならば、どんな手を使ってでも路銀をかせいでみせるさ」

（旅は道連れ、世は情け…か）

結局こうなっちまったか…と思いはするものの、悪い気はしなかった。

独り身生活も長かった銀閣である、人の優しさは素直に有り難かったのだ。

「星ちゃんも偶にいいこといいますね～宇練君には、この薄幸の美少女…程立おねえさんがついているのです～だから、心配しなくても大丈夫ですよ～必ず稟ちゃんの魔の手から守ってあげますからね～」

「ちょっと風！どういう意味よ…魔の手…私の手が、宇練君の…」

ぶしゅうううううう

「おい！稟！」

「今日は良く吹き出しますね～はーい凛ちゃんトントンしましょう

ね～」

情報収集も兼ねて世話になることもやぶさかでないか…なんにせよ、右も左もわからないような土地だ、暫く様子をみるしかないななどと考えをまとめた。

（急ぐ旅でもねぇし、今を楽しむとするか）

三人のやりとりをにこやかに、楽しそうに眺めている銀閣の旅は、まだまだ続きそうである。

4話（後書き）

・・・・・・・・・・・・・・・・

三国志も恋姫も、今更ながら、キャラの多さに難しさを痛感。
偏ったキャラのみ光が当たって行くと思いますが、ご容赦ください。

5話

・・・・・・・・・・

結局三人に旅に同行……という名の拉致に近いものがあったようにも感じたがそれはさておき。
村を出てから、徒歩でテクテクと旅する中で銀閣は衝撃の事実を聞かされ、思考の海へと泳ぎ出す。

驚き其の一、今、踏みしめている大地は『 漢 』という国であるということ。
それは銀閣の知識から推測するのも莫迦らしいほどの昔ということになる。
聞いたときには、『はぁ？』となってしまったが、冷静に頭の中で計算するのであるが、大きな誤差があったとしても、確実に千年以上も昔の国の名前である。
異国に来たとは思っていたが、まさかこんなにも時間を遡っていたとは想像の枠の遙か外である。

こりゃぁ、もう戻れないかもしれないな…とも思ったが、来たからには帰る手段もあるとも考えられる。
諦めるのはまだ早計だと思い直した。

驚き其の二、漢は漢でも、今は後漢である。
過去に来たということが本当であったとしたら、この国を治めている皇帝の名から推測すると、ここは後漢であると推測される……いわゆる戦国時代である。

自分の記憶が正しいかどうかはわからないが、読んだことのある歴史書の中では、群を抜いて興味を持っていたのは間違いないので、思い出せる範疇であるといえる。
なんとも厄介な時代に来たもんだ…が、それが自分の知る歴史と合致するかはわからない。
ここが自分の居た時代の過去かどうか確かめようがないからである。

驚き其の三、なんとこの国では、男よりも女の方が優秀であり、武将や行政官などは殆どが女で占められているというのだ。
なんとも住みにくい国のような気がするな…と思ったところで、ハッとする。

『自分の知っている大陸での歴史に、そのようなことが明記してあったであろうか?』

そこで更に思考の海に深く潜る…潜る…潜る…そして……。

「あぁぁぁぁぁぁぁぁ!」

突然大声を上げる銀閣に、三人の娘達は何事かと声の主をマジマジと見た。
『どうしたんだ?』と膝を曲げて目を合わせてきた“子龍おねえさん”を見つめ返し、趙雲…趙雲ってあの趙雲!?と更に思いが至ったのである。
なるほど、女が優秀であるわけだ、自分の知っている歴史では趙雲は男であったはずであるから、このことからも『ここは自分の知っている歴史』とは大きく違うと言えるだろう。
記憶の引き出しを開け、中の知識を引っ張り出す…そして、今自分の周りにいる三人の存在を思い出した。

趙雲…蜀の将軍、確か『　非常に勇猛かつ義に篤い、また冷静沈着な武芸の達人　』と記述してあったと思い出す。

（なるほど、なればあの砦に挑むも無謀ではなかったということか…）

郭嘉…魏の軍師、『　物事に深く通じていて、的確な見通しで、曹操を助けた天才的な洞察力を持つ軍師　』と記述してあったと思い出す。

（早死にしたと記憶しているが…あの鼻血が原因だな…きっと）

程立…軍事・政治両面に長けた名参謀、『　気骨のある立派な人物で、大胆不敵な知謀の士　』と記述してあった……ような。

（……あの頭の人形といい、居眠り癖といい、大胆不敵であるのは間違いないな……）

記憶と目の前にある事実?を飲み込み、ここはそう言う世界なんだ…と銀閣は自分を納得…させた。

そこでもう一度考える、これから自分はどうするべきなのか…と。

過去の世界を見て回りたいとか、違う歴史の探究に興味をそそられるとか、その他色々と考えてみたが、結局のところ、この身体を治す手立てと元の世界に戻ることを目的とし行動することにした。

今は、情報を集めるべきであるし、生きる為の手立て（主に金（カネ））も考えなくてはならない。

「突然叫んでごめんなさい…そういえば、どこに向かっているのか聞いてないなぁと思って…」

そういえばそうですね…そんな感じで話し始めたのは、“郭嘉おねえさん”。

「白き衣を纏いし天の御使い、流星と共に降り立ち、この大陸に戦禍と安寧と笑顔をもたらす」

「管輅という予言者…いや占い師なのか…そのものが言うには、天の御使いなる人物が世界を救ってくれるらしいのだ、そしてその人物が、なんと最近、現れたらしいのだ」

やや興奮しながら郭嘉の言葉を引き継いだ趙雲が、ギュッと槍を握る手に力を込めているのが銀閣にはわかった。

（なるほど、希望の星ってわけかい……ますますオレの居た世界とは違うと思い知らされるな）

「それで、風達は、一目その方を見てみようと噂を頼りに移動しているんですよ～」

天の御使いとやらが、己の全てを掛けて良いほどの人物であるならば、その方にこの槍を捧げたい（仕えたい）と趙雲は思っているらしく、もし、そうでなければ、元々の旅の目的に戻ると教えてくれた。

元々の目的とは？と問うと、彼女たちは、己が使えるべき主を探すために旅を続けているという。
趙雲は、己の武を捧げるべき相手を。
郭嘉と程立は、己の知謀を使いこなしてくれる相手を。

「私はな、私の武を遺憾なく発揮できる主を捜しておるのだ。しかし、ただ発揮するだけではない、私が輝ける舞台を作り出してくれる者こそ、我が主に相応しいと思っているのだ」

「私は、私が持つ知謀を必要とし、使いこなしてくれる方を主としてお仕えしたいと考えているのです。そこで、噂に上る名士や領主を訪ねてまわっているのですが、なかなか理想の方には巡り会えないものですね」

「といいながら、稟ちゃんには、お目当ての人がいるんですよね～」

「もう！風ったら……そうですね、噂に名高い陳留の曹操殿には、期待していますけどね。それも、天の御使い様を一度見てから決めようと思っているのです」

趙雲と郭嘉のことはわかったが、予想不可能な行動を醸し出す“程立おねえさん”も同じように考えているのだろうか…そんな気持ちで程立に目を向けると、ニヤリっと笑う顔の主と目が合った。

「おねえさんの秘密を…こうも容易く聞き出すとは、宇練君…将来が心配になりますね～狼的な意味で」

「おねえさんの秘密……宇練君が狼……」

ぶしゅうううううう

またも絶大なる妄想力を発揮した郭嘉が、盛大に鼻血を吹き出すのであった。

もう見慣れてしまった風景であるが、早死にの原因は、絶対にこれだ！と確信したのは言うまでもない。

「は～い、凛ちゃんトントンしましょうね～まぁ、それはさておき、風は時々夢をみるんですよ～大きな太陽の夢なんですけどね～きっとその太陽こそが風の運命に係わることではないかと思うんですね～」

風は、いつもより目を輝かせてそのことを語った。

皆の話を聞き、銀閣は、夢があり、それを叶えるための旅をしている三人を羨ましい…と素直に思ったのであった。

「それで、坊主は何のために旅をしてるんだい。もしかして、嫁さん探しかい？」

風の腹話術人形宝慧が、銀閣に話しかけると、三人とも聞きたかったのであろう…目を銀閣へと一斉に向けた。

「そうですね、こんなに良くして下さる皆さんに隠し事をするのは…正直どうかと思っていたところなんです。本当は、他の人には言えないことなんですけど、実は……僕、奇怪な病にかかっていまして…それを治すための薬や治療を求めて彷徨っている…というわけなんです」

少し恥ずかしそうする銀閣の、その言葉を聞いた三人は、同時に衝撃を受けた。

健常そうに見えるこの少年が、病に苦しんでおり（一言もいっていない）、そして父を亡くしながら（そう思いこんでいる）も、治療の為に1人で旅を続けるという苦行を照れるように話す…そのこと自体が、彼女たちの心の奥、『乙女』な部分をいたく刺激したのだ。

ズキュンという何処かに、何かが刺さるような音が、聞こえたとか聞こえなかったとか……。

5話（後書き）

・・・・・・・・・・・・・

頑張ります。

楽しく読んで頂けると嬉しいです。

6話

・・・・・・・・・・

銀閣は思う……これがヒモってヤツのだろうと。

村を出発してから、数日後、少し大きな街に入った。
見上げるような外壁に囲まれた街、城壁都市というには大げさであるが、立ち並ぶ店とそこを行き交う人達は、異国情緒たっぷりで銀閣にとっては、興味津々さを隠そうとしないでキョロキョロしっぱなしでった。

「ほら、宇練君！よそ見ばかりしてると…はぐれちゃう…といけないから、おねえちゃんが手つないであげる」

と郭嘉は銀閣の手を握り、その横を歩く。
すると、『風(ふう)も、つないであげますよ～』と反対側の手を握られる。
まさに、某国で捕まったエイリアンのように……とまではいかないが、銀閣としては恥ずかしいことこの上ない。
そして、困ったことに銀閣には、手という部位が二つしかないのだ。
両手の自由を奪われていることですら難儀なこと……だと思っているのに、自分の手をつなげなかったという現状に、やや不機嫌な空気をだしている人が……約一名。

「凛(りん)、風(ふう)、ずる…ではない、ここは先陣をきる私が手をつなぐべきであろう」

などと言っているが、銀閣を拘束（といっても過言ではない）して

いる二人が手を離す素振りは1?たりとも感じられなかった。
おかしい……どうしてコウなってしまったのであろうか、謎は深まるばかりであった。

そんなこんなで、宿を取った一行であるが、大きな街での滞在となれば、それなりにお金がかかるものである。
当然のことながら、働かなければお金は稼げない。
つまり、宿代＋滞在費＋路銀を稼ぎ出すべく、日雇いや半月雇いの職を探さなければならないのであるが、そこで問題…というか、事件が勃発する。

銀閣は、今こんな姿をしているが、中身は大人である。

当然、自分も何かしらの稼ぎを探すべきだという思いが強いわけだが、何故か“姉を主張する”三人に反対をされてしまう。

曰く、子龍おねえちゃんが、“弟”である宇練君の分を稼ぐのは当然である、故に宿でゆっくりしているといい。

曰く、郭嘉おねえさんは、頭が良いので、可愛い弟の分など軽く稼げるから、昼間はゆっくり自分捜し物に時間を使いなさい。

曰く、程立おねえさんは、余り働きたくはないが、星ちゃんと凛ちゃんがやる気をだしているのに、自分だけ怠けられない。

などという理由から、趙雲は食堂で配膳係、郭嘉と程立は本屋で写本のバイトなどをすることに決め、次の日から労働に汗をかいていた。
そして、夕方になると宿に帰ってくるが、今日は誰がいくら稼いだという競争（日別）で一喜一憂する三人娘を横目で見ながら、案外

平和だな…と心の中で呟いていた。

だが、銀閣の受難はこれからで、その日に稼いだ額が一番多かった者が…いつのまにか銀閣と一緒の布団で寝るという取り決めになっており、そこに銀閣の意志は挟まれない。

なんにせよ、自分は1銭たりとも稼いでいないワケであるから、一応受け入れている。

生きる抱きまくらとして、ある種拷問のような夜を過ごすわけだが、そのうち慣れてきたのか気にならなくなっていた。

そんなある日のこと、いつも通り街をぶらつき、知的好奇心を満たして歩く銀閣の前で、1人の老人が倒れた。

銀閣が駆け寄ると、蹲いて転んだようであるが、手をついた拍子に折ったのか手首を押さえ痛みをこらえていた。

「おじいさん大丈夫?ちょっと見せて……」

そういうと、押さえている部分をチョンチョンと触れていく。

触れた拍子の痛み具合と箇所から、手首の捻挫であると診断。

それなりにある医学の知識から、添え木になるものを探し、手ぬぐいできつく巻き固定する。

「これで一応大丈夫だけど、痛みが治まるまでその木は取らないほうがいいよ」

そういって立ち去ろうとしたのであるが、老人は、お礼がしたいというので、夕方までに帰れるならいいか……と、その後ろをついていった。

老人の家…いや、邸宅という表現が正しいと思われる大きな屋敷に到着すると、客間に通された。
暫くして、着替えた老人が痛めた右腕をつりながら、一人の娘を引き連れてきた。
老人はこの街で唯一の医者で、この家は治療院を兼ねているという、そして、後ろの娘は助手であり、親族の孫であると紹介したのであった。

「徐庶(じょしょ)と申します。老師が大変だったところを助けて頂き、誠に感謝いたしております。この世知辛い気質の昨今において、誠に、義に溢れた振る舞い！私(わたくし)感激いたしました」

さらに娘は、老師を治療した腕前から何かしら医学の心得があると思い、老師の腕が治るまで力をかしては貰えないだろうかと言い出す始末。もちろん、それに見合った報酬は出すとも。

（めんどくさいな……）

そう思いもしたが、いつまでもプラプラしているのも如何なものか、と思い始めていたところである。
コレもまた“縁”だろうとそう考え、ごにょごにょと給金の交渉をした後、また明日来ると約束を交わし、宿へと帰っていくのであった。

次の日から、銀閣は、“姉ズ”達には内緒で、診療の手伝いをしながら、この治療院にある薬や学術書などを見ては徐庶や老師に教えを請うていた。
自分の知識と、こちらの知識の摺り合わせといった色が濃かったが、

それでも確実に銀閣の知識は深まっていくのであった。

（さすが中国四千年……いや、三千年の歴史！）

と感嘆したかどうかは定かではないが、医学と食卓に関しては、頭を下げるしかないと感じていた。

奥深い漢方医学は大層銀閣の指摘好奇心を満足させていたのだ。

だが、ここにも自分を治療する手がかりは見つからず、人知れず落胆したのは言うまでもない。

しかしながら、老師が言うには、漢中に先進医学を信仰する集団があり、もしかすると、そこへ行けば何らかの手がかりが得られるかもしれない…と教えを受けていた。

銀閣は、感謝すると共に、目的地は漢中だな…と狙いを定めるのであった。

朝、“姉ズ”を見送った後、いそいそと老師の元に向かうのが日課になっていた銀閣。

彼は気付かなかった、使命感に燃える乙女の気配に。

彼は気付けなかった、敵を嗅ぎ分ける乙女の直感を。

「ねえ風。最近…宇練君やけに疲れてる感じがしない？」

「あ、凛ちゃんも感じたですか？風も何か感じるところがあるんですよ～」

そんな会話が成されていたとは知らない銀閣の後方を、まるで忍者のように尾行する二人組。

……たまたまバイトが休日な凛と風は、兼ねてからの作戦通り目標を追尾する。
そして、彼女たちは見てしまった、飛びきりの笑顔で彼を向かい入れる女性の姿を。
そして、彼女たちは見てしまった、嬉しそうに家の中へはいっていく彼の姿を。

『　ゴォォォォォォォ　』

突然吹き出す激情のオーラが彼女達を包み込む。
ジーッと睨むような、探るような目で、彼らが入っていった家を観察する。
そして、掲げられた看板に目が留まった、そこにはこう描いてあった…『徐診療所』
この街で唯一の診療所にして、この州でも優秀と名高い徐老師の診療所であった。

ささっと、その場から離れ、二人は、趙雲が勤める茶屋の隅に陣取ると、得た情報から現状を分析しはじめる。

「凛ちゃん、風は冷静に考えたのですが…宇練君の病に関係していると思うのですよ～」

「風、でもあの女の笑顔は…そうまるで、彼氏を迎え入れる女のようだったわ！」

『ぴしっ！』っと郭嘉が握る湯飲み茶碗に…ヒビが入った。

「あれあれ、凛ちゃん、湯飲みが可哀想なことになってますよ～」

「風は何とも思わないの、私の宇練君が！あんな女に！」

そう、それは例えるなら、旦那の浮気現場を目撃してしまった嫁のような…そんな表現がピッタリくる口ぶりと怒りであった。

「凛ちゃんは勘違いをしているのです、宇練君は凛ちゃんのモノじゃないのですよ～まぁ、それはさておき、あの治療院は風も聞いたことがあるのですよ、名士としての名は低いですが、漢方薬学者としてはとても有名らしいですよ？」

「わかったわ風、確かに宇練君は自分のこと病だと言っていた、だからあの診療所に行ったことは理解できるけど…でも、そこに女が関係する必要性がないわ！」

「ねえちゃん、わかってねえな、疲れて帰ってくる坊主と女…もうヤルことは一つしかねえよ」

「これこれ宝慧、まだ情報戦は始まったばかり、結論を出すのは早いですよ」

「……疲れ、女、ヤル？！」

ぶしゅうううううう

「やれやれ、はーい、凛ちゃん、トントンしましょうね～」

楽しそうに郭嘉を介抱する程立であるが、趙雲が近づいてきたため、

意識をそちらへ向ける。

「また、こんなに鼻血…風、凛をからかうのも程々にしておけ」

「ごめんなさいです星ちゃん、でも、風たちは、今それどころではないんです～」

「せっかくの休みにここへ来るなんてどうしたんだ、何かあったのか？というか、休みなんだから宇練君も連れてきたらよいではないのか？」

何か事件でも起きたのかとも思ったが、さほど急いでいる様子もない二人に趙雲は、なんなんだ？…と思いながら…ピンッと来た。

「なるほど、宇練君がらみ…というわけだな」

「流石星さんですね、そう、実は……」

郭嘉がそう喋りだした時、店の入り口に…鴨が葱を背負ってやってきたのであった。

6話（後書き）

・・・・・・・・・・

頑張ります。

楽しく読んで頂けると嬉しいです。

7話

・・・・・・・・・・

（オレは…無実だ）

老師の腕も順調に回復し、快気祝いと感謝の意をかねて、ちょっとした昼食会をしよう…となり、老師いきつけの茶屋へと脚を運んだ。
少し早い目の昼食であるが、美味しいことで評判のお店らしく既に何組かのお客が舌鼓をうっている様子が見て取れた。
胃袋を刺激する香りに、銀閣の顔も少し綻んでいた…脳内では、『本格飲茶！』が連呼され、何が出てくるのだろうという良い意味での期待感に胸躍らせていたが……

「いらっしゃいませ～」

と笑顔でやってきたのは、店員姿の趙雲と言う名の美少女で、しかも笑顔であるはずなのに、目が笑っていないという…離れ業。

（しまった…ここ、子龍おねえさんの店だったのか！）

そう思っても後の祭り、額にビキビキと井形が見えたような気がしたが、銀閣は気付かないふりをして、案内された席へとついた。
正面に老師が座り、銀閣の横には、張り付くように徐庶が座る。
そんなに窮屈な席ではない、どちらかといえば6人掛けの余裕がある卓である…が、何故か徐庶はピッタリと寄り添う。

「そんなにくっつかないでも、ここは広い……」

後に、銀閣は語る…この世界に来て、初めて命の危険を感じた……と。

見なければよかった、気付かなければよかった……だが、見てしまった、気付いてしまった。

通路の向こう側に座り、獲物を狙う狩人のような眼差しでコチラを伺っている1組の美少女達に。

『何しとるんじゃワレェ！』

とは聞こえないが、随分とお怒りな様子だけは感じられた。

何に怒っているのかは…不明であるが、怒りを隠そうとしない鋭い眼光の郭嘉と、じとぉぉぉぉと眼を細めている程立。

しかし、銀閣は勘違いしていた、彼女たちの矛先は、彼ではなく、その横で腕を絡めている徐庶に向けられていたことに。

料理も運ばれ、食事も進む…がハッキリ言って“料理の味がしない”…いや、するのだが、その旨さを堪能している余裕がない。

（オレが何したってんだ…）

食事も終わろうかとしたその時、真摯な眼差した徐庶がやや緊張したように話し始め……

「宇練様、今までのお礼は、また別に用意させていただきますが…

これからは、私(わたくし)の事を“雫(しずく)”と、呼んでいただけませんでしょうか」

徐庶の発言に、銀閣もぶっと茶を吹いた。

「え？いや、それって“真名”じゃないの？」

「はい、そうです。是非、宇練様に私(わたくし)の真名を預かって頂きたいのです」

銀閣は、この地に来る途中、趙雲達にこの地の決まりや慣習などを聞いた際、“真名”というものにも触れていたから、その大切さは知っているつもりだった。

あの時、郭嘉は言っていたではないか、字もそうだが、更に“真名”というものは、本人が心を許した証として呼ぶことを許した名前であり、本人の許可無く“真名”で呼びかけることは、問答無用で斬られても文句は言えないほどの失礼に当たる…と。

銀閣は考えた、さほど大したこともしておらず、また、ほんの数週間のつき合いである自分に“真名”を預けようとする真意がどこにあるのか…を。

しかし、預けたいという気持ちを無碍にすることもまた失礼に当たるのではないか…とも思うわけだが、結局、保留ということにして貰った。

「すみません徐庶さん、別に嫌なわけではありません、寧ろ喜ぶべきなのでしょうが、今の僕には問題がありますので、このことは保留ということにして頂きたいのです」

「そうですか、そうですね…無理に押しつけるモノではありませんし、何か事情がおありのようですし…」

と徐庶の視線は、ずっとコチラを伺うようにしている郭嘉と程立、そして、趙雲へと向けられる。

視線が合わさった瞬間、火花が散ったようにも感じたが、目の錯覚だと思われる。

聞き耳を立てていた三人からレーザービームのように刺さり続ける『受け取るな』的な眼差しに屈したワケではない…だろう、たぶん。

（べ、別に“姉ズ”の視線が恐かったワケではない…ワケではないのだ！）

しかし、本当の地獄はここからだった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

診療所での最後の勤めを終えた銀閣が宿へと帰り着くと、そこには、逃げたくなるような爽やかな笑顔を浮かべた三人が出迎えてくれていた。

「おかえり、宇練君」
「おかえりなさい、宇練君」
「宇練君、おかえりなさいなのですよ～」

（うっ、なんだこのプレッシャーは！）

「ささ、疲れただろう、こっちへ来て座ると良い」

いつもの席へと促された所には、既に食事が並べられており、とても美味しそうに見える……そう、それが、昼に食べた飲茶と全く同じモノでなければ。

「さて、いただきましょうか、ほら風もこっちへ来なさいよ」

「はいはい、お待たせなのです～」

「では、いただくとするか」

第三者から見れば、その空気は修羅場そのものであるのだが、修羅張る経験のない銀閣にとって未知の空間となっていた。
笑顔の奥から感じられるギスギスした、心が抉られるような空気、精神的なダメージが蓄積していく……。

（逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ……）

「そういえば、風は、今日は珍しいものを見たのですよ～」

「へぇ～、一体何を見たの風？」

銀閣に眼を合わせないように…というか、その存在を空気のように話を進める三人。
無意識にいやぁ～な汗が背中を伝う。

「可愛い女の人に抱きつかれながら～嬉しそうにしている少年を見たんですよ～」

「へぇ～でも、別にそれは何処にでもいる感じだと思うけど？」

「いやいや凛ちゃん、その少年は何と、食事をしている最中も女の人を侍らし、しかも、『ア～ン』とか言われてご飯を食べさせて貰っていたり、口元についたご飯粒を、パクってされたりと、見ているこちらが恥ずかしくなるくらいのイチャこいだったのですよ～」

「なんと！それは、羨ま…いや、なんとも傍迷惑な者だな」

「お星ちゃんもそう思いますか～いやはや、風は自分の目を疑ったのですよ～だって……」

「そうですよね、風の言う通り私も眼を疑いました。だって、その少年が余りにも…宇練君にそっくりだったので」

「ほぉ～そんなにそっくりだったのか……」

そこまで話しきると、三人は一斉に銀閣を笑顔で見つめ（睨み）直す。
だが、その背中に見える夜叉の如きオーラに逃げたくなる……しかし逃げられない。

「坊主、観念したらどうだい」

宝慧の言葉を皮切りに、あれは誰だの、何していたかだの、どういう関係なのかだのと、とにかく三人がおもいおもいに疑問を投げつけるので、銀閣はどうしたらいいのだ…と途方に暮れた。

（オレ…なんで責められてるんだ…わけわからん）

だが、持ち前の冷静さを取り戻し、クールだ、クールに逝こうぜと心で念じ、一計を案じたのだった。

（詐術：涙目）

「おねんちゃんたち……なんで怒ってるの……」

涙を溜めた上目遣いな瞳で三人を見る銀閣。
その破壊力に、怒り（嫉妬）の業火をあげていた心が一瞬で静まりかえる。

『う、泣かせてしまったか』
『そ、そんな目で見ないで』
『あ、やりすぎたですね～』

そうなのだ、今の銀閣は八才前後の少年姿。
子供と言っても差し支えない年齢の彼に、この仕打ちは如何なものか。
といっても、中身は大人なので効果は十分にあったといえるのだが

……。

冷静になった三人は、そのことを思い返し、そして、何故に辿り着く。

趙雲は……

『わ、私は姉としてだな、弟の行動に責任を持たねばならないわけで、決して…その、嫉妬心ではない…いや、少しはあったが、いや待て、これでは、恋人の浮気を責める女みたいではないか！ち、ちがう、私は、そんなつもりではなくてだな……』

郭嘉は……

『私は、べ、別に、そういうつもりではなくて、いや、そういうつもりってなによ、でも、宇練君が他の女の人と仲良くしてるのが嫌じゃないわけじゃなくて、いや、嫌なんだけど、その、ちょっと、冷静さにかけていたわね、でも、宇練君も悪いと思うのよね、だって、私に内緒事をつくっていたんだから、って別に、いいんだけど、でも、相談して欲しかったというか、だって私は、おねえちゃんなんだから……」

程立は……

『凛(りん)ちゃんや星(せい)ちゃんに便乗して調子に乗りすぎましたですね～でも、風(ふう)だって、少しイラっとしたのは本当なのですよ、でも、まぁ、自分の病に関係しているということで内緒にしていたんだと予想はつきますけど、少しくらいはお話して欲しかったですね～』

などと、やや紅い顔で、自分たちが出した解答に、あたふたするのであった。

7話（後書き）

・・・・・・・・・・・・・・・

面白いと感じていただけると嬉しいです。

8話

・・・・・・・・・

途方もない精神的な疲労感を感じながらも、仕方がないので、事のあらましを説明する銀閣であった。
老師との出会いから、徐庶の依頼や、治療院での出来事、自分の薬学に関しての知識や、知的好奇心を満たしたかったこと、そんなことを一通り話したところで、一区切りつけた。

「そんなわけで、そのお礼の一部として御馳走になっていたんだよ」

と説明（弁明）をし、これでわかって貰えたかな…と思っていたが

「その割には、随分と、その徐庶さんとやらは、甲斐甲斐しかったが？」

趙雲の開いた眼孔は、やや鋭いなにかを含んでいたので、仕方なく銀閣は更に説明（弁明）し続けていく。
徐庶とは、お互いの知的好奇心を深める関係で、それ以上のことはなく、ただ、治療院の助手として働いていただけである…と。

「だが、真名を預けようとするぐらいなのだ、なにか、こう、その、接近するようなことは…」

少し紅くなりながら問いつめる趙雲であるが、銀閣は『なにいってんだ?』的な表情で、その疑問に答えるしかない。

「ないない、僕だってわかないんだから…真名って大切なモノでしょ?こんな短期間で僕の何を見たんだか……」

そんな感じで逆に思考の中へと入り込もうとする銀閣を、程立が引き上げる。

「まぁ、宇練君にはわからなくても、風には少しわかる気がするのですが~それは、まぁ、置いておいて、風は、宇練君に真名を預けようと思うのですよ」

「はぁ?!」

突然、真名を預けると言い出した程立に、本人を除く三人が視線を集中させる。

「いえ、別に今思い至ったわけではなくてですね~前々から思っていたのですが、言い出す機会がなかったものですからね~今日成し遂げて見せようかと。そういうワケなので、宇練君、今日から、風のことは、風ねえさんと呼んで下さいね~」

「えっ、あっ、はい」

言われるがままに承諾してしまった銀閣であるが、それを聞いた趙雲と郭嘉は“しまった”とばかりに銀閣へと顔を近づける。

「私も、真名を預けようと思っていたのだ、これからは星ねえさんと呼ぶように！」
「私だって、思ってたんです。だから、凛おねえちゃんと…よろしくね」

その勢いに押されるように承諾する銀閣であるが、何にせよ悪い気はしないわけで、少し互いの距離が近づいたような気がした。
そして、ここで悩む、ここで逢ったのも何かの縁と共に旅をし、世話になりっぱなしで在ることにある種の罪悪感を感じていたところに、“真名”まで預けられた。
だが、受けた恩に対して、返すものがない…いや、あるにはあるのだ。
それは、自分の家名ではなく“継名”を教えることと、自分の身体の秘密を話すこと。

「風ねえさん、星ねえさん、凛ねえさん、真名を預けてくれてありがとう。僕は、真名というものを持っていません、ですから代わりに…銀閣と呼んでくれると嬉しいです。」

ここまでの“縁”ができてしまったのだ、“継名”を教えることも構わないだろうと思ったのだ。宇練家では、当主となったものは、“銀閣”の名を襲名する。
それは、初代の名が金閣であることにも由来するが、かの初代、宇練金閣が成し得た偉業を代々語り継ぐ為のものであるとされていた。
“銀閣”を襲名したれば、幼名は捨て、その日より、宇練銀閣として家名を背負うのが宇練家のしきたりなのである。

「では、改めまして、僕は、宇練家十代目当主、宇練銀閣と申します。どうぞよろしくお願い仕ります」

正座をし、頭を垂れる銀閣の颯爽とした動作には、ある種の気品と王威を感じ、彼女たちも意識せずとも頭を垂れていた。
かしこまりすぎて、少しぎこちない空気が流れたのであるが、程立の『早く食べないと冷めてしまいますよ〜』の言葉に、皆は再起動を果たしたのであった。

始まりが在れば、終わりがある。
出会いがあれば、別れがある。

そのことを理解しながらも、この楽しい時間を楽しむことも、まだ良いだろうと心に思った銀閣であった。

そしてその頃、陳留郡に舞い降りたとされる天の御使いは、曹操孟徳という人物が保護したという噂が流れ、時に内政に、時に一軍を率いて活躍し始めているとのことだった。
活気づいた陳留周辺では、夜盗や山賊などが鳴りを潜め、治安が向上したとの噂もあがっていた。
だが、その余波が、銀閣達を巻き込むことになろうとは、その時は想像すらできなかったことである。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

そろそろ、予定した路銀も貯まり、次の街へ移動しようと準備をしていた“銀閣と姉ズ”一行。
次は一気に、天の御使い様がいるとされる街まで行こうと予定を立て、食料や薬などをまとめ買いし、明日には出立しようと話していたところで、時代の流れに巻き込まれる。

「おい、稟(りん)！風(ふう)！今、聞いたのだがな、どうやらこの街に黄巾賊が向かっているらしい！」

急いで駆けつけたのであろう、荒い息を整えながら…それだけ言い切ると程立に渡された水を一気に飲み干した。
賊が来る…しかも、その数は１，０００を越えるというのだ。
この街は小規模ながらも石を積み上げた外壁を構え、守備隊も常駐する比較的整った環境ではあるが、それでも千人単位の賊を迎え撃つだけの戦力はない。
すでに、太守がいる街への伝令は走っているとは思われるが、援軍が間に合うかどうか……。

「どちらから来るか…それもわからぬ以上、無闇にこの街を出ても被害に遭うだけだが…ここにいても助かる保証はない…一か八かに掛けて脱出するか、ここの守備隊と共に闘うか…凛(りん)、風(ふう)お前達はどう考える？」

「もっと正確な情報が欲しいところですが、ここを脱出できたとしても、無事次の街までたどり着けるかどうか……。ならば、星(せい)さんの“武力”と私と風(ふう)の“知謀”でなんとかできれば、と考えます」

「そうですね～凜(りん)ちゃんの言うことも一理あるのです。情報はもう少しすれば、もっと集まるでしょうから、ここはこの街の責任者か守備隊の隊長と協議することが先決だと風(ふう)は考えるのですよ～」

三人は同時に頷くと、急ぎ守備隊の詰め所へと走っていった。
残された銀閣は、なんとも焦臭(きなくさ)い状況に対し、どうするべきかを思案する。
打開すべき策…がないわけではない。
賊を全て斬り捨てるという選択肢もあるが…そうすれば、この賑やかな旅も岐路に立たされるであろう。
何とも甘いことであるが、銀閣は今のこの環境を歓迎すべきモノとして受け入れているのであるから、その関係を壊してしまうであろう行動に躊躇するのだった。
しかし、そのことによって命に危機が訪れては本末転倒である、暫し様子を伺うことにし、今は、ゆっくりと茶を飲むのであった。

待つこと数刻、高ぶった気配を感じると、趙雲、郭嘉、程立……そして、徐庶が、銀閣の居る食堂の一角に集まっていた。
守備隊との打ち合わせも一通り終わり、腹ごしらえといったところなのだろう。

「おお、銀閣！ココにいたのか、宿にいなかったから心配したぞ」

趙雲は、あれから銀閣のことを宇練君から、“銀閣”と呼ぶようになり、やや姉指数が上がった気がする。
三人の“姉ズ”からは、完全に保護対象と見られており、銀閣としては、悩ましい日々であった。

そして、今も銀閣の横へと席を取る。

「あっ星さん！そこは私の席……まぁいいです、こっちに座りますから…」

そういって銀閣の向かいに座る郭嘉、その横に座る徐庶、そして、程立は……

「もう、風の座るべき場所がなくなってますね～仕方がありません、よいしょっと……」

さも仕方がないといった表情で、座ったのは銀閣の膝の上。

だが、今の銀閣は程立とほぼ同身長であるからして、そこに座ると、銀閣には程立の背中しか見えない。

（前が見えないんだが…まぁ、飯は食い終わった後だからかまわねぇけどよ……）

「おい坊主、まさか重い…なんて思ってないだろうな」

「これこれ宝慧、銀閣君は、風のお尻の感触を喜んでいるはずです…あぁ、銀閣君、背中に熱い息をかけないで欲しいのですが～」

「銀閣君の…風のお尻が…背中に息を……」

ぶしゅうううううう

勝手に妄想した郭嘉がまた鼻血を放出し、血の海の沈んだ……。

「おい風、余り稟を刺激するな。これからの事もあるんだからな」

「はいはい星さん、そんな羨ましそうな顔で話しかけられても、この場所は譲りませんからね～」

「なっ、いや、私は、そんなことないぞ、羨ましいなんて、思ってなんか……って、話を聞け！」

「皆さん、なんだかんだいって、結構余裕がおありのようですね」

徐庶の落ち着いた突っ込みにも動じることなく、三人は三者三様に食事を楽しんでいた。

心に余裕を持つことは大切である、しかも、それが戦の前ならば尚のこと。

そして、皿が空になり、これからの行動予定について話が進んでいく。

この街の守備隊は、籠城案を選択し外壁の上からの攻撃に専念することとした。

数としては５０に満たないが故に、打って出ることなど到底無理であるから。

そして、街の住民で戦う意志の在るモノを募り、自警団として男女合わせて２００の人達が集まった。

その自警団のリーダーとして、水鏡女学院出身者の徐庶が勤めることとなり、趙雲、郭嘉、程立達もこの自警団に参加する。

守備隊は、外壁上から矢を射る場所の確保、自警団は、外門前に簡

易な足止め用の組木を打ちこみ、突撃に備える。
出来る限り外門に近づかせないようにし、掃射によって数を減らし、援軍が来るまでの時間稼ぎをすることが作戦の概要だ。
残りの住民は、矢の製作や、戦う者達への個々の準備を手伝ったりすることとした。

そんな準備が進む中、賊が来たことを知らせる砂埃が遠くに確認されたのだ。
この街の、そして、銀閣達の運命は如何に。

8話（後書き）

・・・・・・・・・・

何処かしら他の作家様との類似点があうとは思いますが、ご容赦下さいませ。

話の流れって似てくるんですよね…。

9話

・・・・・・・・・・

1，０００を越えると見られる黄巾賊は、ジリジリと街の外壁へと進軍していた。
障害物に邪魔され、頭上から矢で射られるが、守備側の圧倒的な人数不足により、その進軍を止めることは叶わない。
だが、守備隊や素人である自警団が正面から挑んだところで、鎧袖一触（がいしゅういっしょく）、数の力に押し負けることは明白である。
かといって、このまま指をくわえているわけのもいかず、打てるならば、逆転の一手を打つしかない。

「徐庶さん、星（せい）、やはり、予想通りの展開かと」

「そうですね、準備はすでに終えています。後は上手に時間差をつけること……ですが、もう少し正面に引きつけたい、でないと気づかれてしまいます」

「だが、これ以上は外門が保たない、無理を承知で行くしかないであろう」

彼女たちは、数での不利をひっくり返す為に、正面からの力押しで優位に立っている黄巾賊の側面から精鋭による一撃で、敵の司令官を一気に葬り去ろうとしているのだ。
司令塔を失えば、賊は元々農民や山賊といった烏合の衆、無理な戦闘は諦め逃げ出すであろう…というのがここに集まった知謀の士達

の作戦であり切り札であった。

「では、私(わたくし)が先陣を切りますので、趙雲さんはその後ろをお願い致します。」

徐庶のその言葉を、いやいやと首を横に振る。

「それがしは、正面にて賊を引きつけることに致す。出来る限り時間を稼ぐつもりだ、であるから、徐庶殿はできるだけ後方からの突撃を敢行していただきたい」

「だが、それは危険すぎる！一人で正面を守るなど、どう考えても無茶ですよ！」

「徐庶殿こそ、一撃で決められなければ、その身がどうなるかぐらいは予測しておられよう？なれば、どちらにしても、誰かがやり遂げなくてはならないと私は思うのだ」

「そうですね星(せい)、自警団は徐庶殿でなければ率いることができない。そして、正面への引きつけこそがこの策の肝。役割分担としては妥当というものでしょう」

「稟(りん)ちゃんの言う通りなのです。星(せい)の“武”は、ただの賊に屈するようなものではないのです～ですから、徐庶さんこそ、しっかりお願いしたいのですよ～風達(ふう)の生き死には、まさに徐庶さんに掛かっているのですから～」

『風達(ふう)には、守らなければならないものがありますから』

納得できない徐庶であるが、彼女たちの言い分も理解できるのだ。
その必要性も、優位性も。
どちらにしても一蓮托生、ここを乗り切らねば互いに生き残れないのである。

「ならば、この街を頼みます、私も必ず成功させますから」

そういうと、彼女は街の裏門へと足を向けたのであった。
徐庶の背中を見送り、三人は『必ず生き残りましょう』と掛け声を合図に、各々の持ち場へと散っていったのだった。

「耳の在る者はしかと聞け！目のある奴は特と見よ！我こそは、常山の登り龍、趙雲子龍！何人たりとも此処は通ることまかりならん！命の惜しくない者から掛かってまいられよ！！」

大音声で名乗りをあげた趙雲は、外壁上から飛び降りると、槍を構え、門に近づく賊達を次々と葬っていく。
五、十、十五、二十……
趙雲の目の前には、死体が量産されていき、また、興奮しきった賊たちも負けてなるものか襲いかかる。

「くっ、やはり数が多すぎる……か」

縦横無尽に槍を振り回し、時に突き、時に殴り、時になぎ払う。
それぞれが持つ武器の違いもあるのであるが、その間合いに入った者を、容赦なく下していく。
突撃してくる敵の勢いもやや弱まってきたものの、それでも数に任

せた勢いは止まりようがなかった。

そして、趙雲子龍、武人といえど人間である、人一人が全力で活動できる時間など、そう長くはないだろう。

少しずつ息があがっていく身体を意識しながらも、気力を振り絞り、また一人、また一人を葬っていくのだが……

「しまった…」

彼女がそう呟いたとき、突き出した槍の穂先が折れた。身体よりも先に、武器の限界が来てしまったのだ。

手にした槍を地に捨て、倒した敵から武器を拾おうとしたところで、疲労の溜まった足が蹈鞴を踏んだ。

倒れまいとするその意志とは裏腹に、死体に足を引っかけ転倒してしまう。

当然、その隙を見逃す者達は此処にはいない。

好機とばかりに、十を超える男達が、倒れた趙雲へと襲いかかる。

『すまぬ凛、風、銀閣……』

避けきれぬ刃の閃きに、自分の最後を感じた趙雲は、不甲斐ない自分を呪うと共に、守れなかった者たちの名を口にした。

「はぁはぁはぁ、凛ちゃんも星ちゃんも頑張っていますが、ここは難しいです。せめて、銀閣君だけでも逃がして……」

街の中をテケテケと走りながら、程立は銀閣のいる宿へと急いでい

た。

嫌な予感がするのだ、何か大切な者を失う予感が、だから程立は、銀閣を逃がすべく馬を準備した。

星(せい)が耐えきれば、徐庶が仕留めれば、心に沸き上がる心配などは杞憂だったと笑い飛ばせるのだが、今の程立には、それの結果を待つのが恐かった、不安が拭いきれないのだ。

ならば、手遅れになる前に手を打つのも軍師を志す者の務めではないのだろうか。

駿馬とはいえないが、少年一人を乗せて走る分には、なんとか逃げ切れると思われた。

皆には悪いが、今の自分に出来ることはコレが限界だ、死んだらあの世で、謝ろう…そう思っていたのであるが……

程立は、隠れるようにと言いつけておいた場所に銀閣を見つけることができず、少し呆然とした。

聡明な彼のことだ、どこかで誰かを助けようしているのかもしれない。

しかし、寄りによってこんな時に……産まれて初めて感じる焦燥感に、冷静になれない自分と、冷静でいられない理由を強く自覚してしまうのだった。

とにかく見つけなければ…そう思い街の中を探し回るところで、見知った後ろ姿を発見する。

やっと見つけた…その姿の横には、郭嘉の姿が。

「稟(りん)ちゃん、銀閣君、こんなところで何してるのですか～」

“見つかってしまった”そう思われても仕方がないほどの驚きを表

した郭嘉は、観念したかのように程立に向き合う。
そして、バツが悪そうに、やや下向き加減で話すのだった。

「星や徐庶さん達を信じていないわけじゃないのよ、でも、万が一ってこともあるから、だから、せめて銀閣君だけでもって……ごめんね風……私ったら何してるんでしょうね」

親友の申し開きとその思いが、自分のものと同じだと理解すると共に、同じ事を考えた郭嘉に、嬉しさが湧き起こっていた。

「稟ちゃん～酷いですよ～抜け駆けは無しって決めてたじゃないですか～」

「えっ、だって、いえ、そ、それは、うんと、その、でも、そう言う風は、何故ここにいるの？」

「それは～乙女の秘密なのですよ～」

「そうだぜお嬢ちゃん、別に姉さんは早い者勝ちだなんて考えちゃいないぜ」

「これこれ宝慧、それは言ってはいけないと教えていたでしょう」

謀が露呈したことで、少し気が楽になったのか軽口を叩く程立であったが、根本的な問題は全く解決していないことを思い出す。
だが、こうなってしまっては、もはや、どうすることもできず、ただただ、策の成就を祈るしかないと思った。

「稟ねえさん、風ねえさん」

おもむろに名を呼ばれた二人は、どうしたのかと銀閣を見やったが、俯いていたためその表情は読みとれない。
だが、何か思い詰めたような感じであることは、察することができたのだが…。

「街が危ない。星(せい)ねえさんも。だから、二人は僕の所に来てくれたんでしょ？」

二人は何も言わず、ただ銀閣を見つめ続けるのみ。
その無言を肯定だと理解した銀閣は、楽しき日々の終焉が来たと自分に言い聞かせた。

「今までありがとうございました。本当に、ねえさん達には感謝しているんです。だから、今度は僕が、借りを返す番です」

そう言うと、近くの食堂へと入っていく。
突然、思いがけないことを言い出す銀閣に驚きながら、その後を急ぎついて行くのだが……。

「銀閣君、いったい何を言っているの？それに、なんだか別れの言葉みたいに……」

「そうです、凛(りん)ちゃんの言うと通りなのです、一体どうしたと……」

だが、二人の言葉はそこで止まる、何故なら、厨房へと入り込んだ銀閣が、釜にかけてあった鍋を傾け、中で湧いていた熱湯を頭から被ったからだ。

「あちちちぃぃぃぃ」

熱湯の熱さに、飛び跳ねた銀閣であるが、その身体は異様な変化を遂げていた。

そう、もとの身体、大人の銀閣へと変貌していたのだから。

銀閣の呪い…というか体質…あの日以来、あの薬を飲んで以来、水を被れば少年に。お湯を被れば青年に、と変化変化をしてしまう身体になってしまった男がそこにいた。

9話（後書き）

・・・・・・・・・・

楽しく読んでいただけると嬉しいです。

10話

・・・・・・・・・・

「えっとぉ～風は幻覚をみているのでしょうか～銀閣君が大人になってしまったようにみえるのですが～」

「あれ？私にもそう見えるけど、え？何？どういうことなの？」

突如、大人に変化した銀閣に驚きと戸惑いを覚えながら、いったい何事かと思う二人であるが。

だが、一刻の猶予もない予感がしている銀閣は、詳しい説明は後で…と腰に差し直した刀と共に、門がある場所へと駆けだしていくのであった。

残された程立と郭嘉は、大人に成長した銀閣の勇姿と、思いの外…逞しかったその胸元に心を奪われ、ほわぁぁぁ～と立ちつくしていた。

シャリンシャリンシャリンシャリン…

「悪いが、そのねえさんを斬られるワケにはいかねぇんだ」

目を瞑っていた趙雲がその声を聞いた後、そこには、金属の摺れる音と何かが倒れる音だけが残っていた。

再び目を開けた趙雲の前には、黒い着流しを着た男の背中がそこにあった。

繰り出される居合い斬り　宇練流抜刀術『零閃（ゼロセン）』
抜かれた刃の、きらめきすら見せぬこの技が繰り出され、金属の擦れるような音がする度に、周りを取り囲む賊たちがまとめて斬られていく。

シャリンシャリンシャリンシャリン…

武器ごと、鎧ごと、盾ごと…賊達が身を守るために向ける全てのものが、その存在ごと斬られていく。
そして、その音が止んだとき、男を囲む空間には趙雲を除いて、誰一人息をしていなかったのだった。

「零閃は、いつでも出撃可能……斬れば斬る程…早さは増すぜ」

どこかで聞いたような声だが、少し違うような気もする。
そんな考えが頭を過ぎるが、その背中はとても大きく見えた。
長く伸びた銀黒の髪が、止まった思考を揺り動かす…だが、いや、ありえない…。

「ねえさん、立てるかい？」

趙雲を助けた男が振り返る……その顔は自分がよく知る少年に似ている……似ているが。

「お前、もしかして…」

「詳しいことは後だ、今は、こいつらを片づける…ねえさんは、後

ろにさがってな」

男は再び趙雲に背を向けると、刀の柄を握り一歩、一歩と進んでいく。

そして、進むたびに賊の命は、悉く斬られていくのだった。

その背中には、視界に入る瞬間、命を散らしていく賊達を、ただ、ぼーっと見ていることしかできない趙雲がそこにいた。

シャリンシャリンシャリンシャリン…

「お前さんたちには恨みはねえが」

シャリンシャリンシャリンシャリン…

「オレにも引けねえ理由があんだよ」

シャリンシャリンシャリンシャリン…

「これで終(しま)いだ……限定奥義　零閃乱舞！！」

シャリンシャリンシャリンシャリンシャリンシャリンシャリンシャリンシャリン…

いつのまにか賊の数は大幅に減り、代わりに、大地を埋め尽くすかのような死体の数は比例して増えていった。

その同時刻……

「趙雲殿もお強いでしょうが……これ以上は……よし、皆！突撃です！我々の街を守るのです！」

徐庶の掛け声で、自警団の精鋭１００人は一心不乱に突撃していく。側面というよりは、やや後方よりの襲撃を受けた黄巾賊は、大いに混乱し、足並みを乱しに乱していく。

「二人一組で賊を倒すんです！必ず止め刺してください！立ち止まっては囲まれます、一直線に突撃です！」

檄を飛ばしながらじっと集団の先のほうを睨む、賊の中心で混乱する兵を纏め様とあたふたしている男に狙いを定め、徐庶は己の剣戟に力を込め、突撃の速度を上げる。

「こら、馬鹿共！慌てるな！数はこちらが勝っているのだ！こら、聞け！俺の言うことを聞けぇ！」

だが、所詮は農民や山賊達が利の為に群がっている集団なのだ、一度乱れてしまえば、統率を取り直すのは至難といえる。

そして、その混乱に乗じて繰り出された剣撃を男はかわすことなく……その身に受ける。

「指揮官の首は、この徐庶元直が討ち取ったぞぉぉぉぉぉ！」

その宣言を聞いた黄巾賊は、崩壊し、我も我もと逃走し始め、ついには、街を攻め入ろうとする者はいなくなったのであった。

指揮官と失った賊の典型的な引き方であった。

徐庶達は当然追撃などは行わず、その勝利を勝ちどきあげたことにより、街の皆に戦（いくさ）が終了したことを知らせたのであった。

徐庶率いる精鋭は、その役目を遂げ、短くも長い防衛戦が終了した。

戦いが終わり、街は喧噪に包まれる。

勝利を喜び、生きていることを喜び、街全体が宴会場となっていた。

事後処理は山のようにあるが、それよりも、今を生きている喜びを皆で祝いたかったのであろう。

戦に関った者達、特に守備隊や警備隊の者達は、英雄だの勇者だのと持ち上げられ、若い娘達の羨望の的となっていた。

なかでも、自警団を率い、自ら黄巾賊の司令官を討ち取った徐庶は、そのクールな美貌も合わさって、祝福と感謝の嵐で、もみくちゃにされていた。

もちろん、門を守りきった趙雲や、策と共にあれやこれやと準備の手伝いをした郭嘉と程立も同様に輪の中心から離れられなかった。

「この趙雲子龍、まだまだ負けませんぞ！」
「わ、私は、もう、呑めません～」
「風（ふう）は何かと一流ですからぁ～」

だが、その宴の中に、銀閣の姿は……見あたらなかった。

その頃銀閣は、老師の治療院で、傷ついた守備隊の兵士や自衛団の者たちの手当に勤しんでいたのだ。
この街で世話になった借りは返さなけりゃな、と銀閣なりの筋の通し方……気位というやつだ。
どちらにしても、秘密が露呈した今、取り繕っても仕方がない。
過去、この身体の変化を、化け物や物の怪…そんな扱いや目で見られたこともあった。
もちろん、全ての人がそういうわけではないのだが、それでも少なからず居るのだ。
だから、銀閣は、この秘密が発覚したら…ただちにその場を離れ、噂が停滞しないように、広がらぬようにしてきた。
人は、時に残酷だ……自分と違うモノを認めない生き物であることも銀閣は、短くはない人生経験の中で学んでいたのだった。

ここの老師には、一応この秘密は、話してある。
短い間ではあったが、医師と患者、師と弟子のような関係。
黙って差し出された酒瓶を黙って受け取り、銀閣はその場を後にした。

「月は語らぬ、姿は変えども、また、輝く為に・・・か」

一目を避け、喧騒とは離れた外壁の上にて、クイっと酒を煽る。
また、独り・・・慣れていたはずだが、この世界に来てから色々ありすぎた・・・そう思う銀閣は、また酒を一口。
戦闘の跡が痛々しいが故、ここには誰もこないであろう、そして、明朝までココを抜け出せば……。
そう思う銀閣の背後に……知った気配を感じるが、銀閣は振り向かない。

「こんな所にいたのか……銀閣……殿」

酔っているのだろう、桜色に染まった肌には火照りが感じられ、足下も少しぎこちない。
随分呑まされた筈であるが、それでもここまで登ってこれるだけの気力は残っていたようだ。

「殿……か。ま、それも当然だな……オレはこんな姿(なり)だし……な」

趙雲の言葉は、銀閣の耳に届き、そして、夜空を見上げたまま……誰に聞かせる出もない、自分自身に言い聞かせるように呟いた。

「ち、違うぞ！か、勘違いするな！私は別に、お前がどんな姿だろうと気になどするものか！この趙雲子龍を侮(あなど)るでない！」

「いや、いいんだ、“こういうこと”には慣れているからな。これでも一応人間なんだぜ……信じられないとは思うけどな。心配するな、明日にはいなくなる、だから……それで許せ」

月の輝きは二人を照らし、趙雲にはその背中しか見えない。
だが、広くピンっと伸びた背筋は、何処か哀愁を感じさせるのだっ

た。
そして、一方的な銀閣の言葉は、趙雲の心の奥底に火をつけた。

「ば、莫迦にするのも大概にしろ！　私は！　私はな！あの時、お前に助けられる寸前、諦めたんだ、諦めてしまったんだよ！門を守ると、街を守ると……お前達を守ると、そう言い切った私は、あの時、これで終わりかと…皆…すまんと、諦めたんだよ！そんな私を……助けたお前が！何故いなくならなければならない。何故そんなことを言うのだ！そんなことを言うな……いなくなるなんて言わないでくれ……」

その言葉を銀閣の背中へとぶつける姿は、“武”を誇る一騎闘千の趙雲子龍ではなく、ただ思うがまま、ありのままを吐き出す乙女であった。
高ぶり震える声は、銀閣を振り向かせる。
光を遮るように趙雲を見る……その表情は読みとれないが、銀閣の目に映っているのはただ一人だ。

「だがな……ねえさん、オレはこういう生き方しかできねぇんだ……だから……いや、未練だな。気にするな、寧ろオレのことは忘れてくれ、その方がお互い……楽だろう？」

宇練銀閣という存在自体を否定する目の前の男に、自分の気持ちに正直になった…趙雲の動きは、まさに疾風の如しであった。
殴られるにせよ、蹴られるにせよ、受け入れるつもりの銀閣は微動だにせず立ったまま。
そして、その胸元に抱きついた趙雲は、そのまま両手で顔を掴むと、おもむろに唇を奪う。
五秒…十秒…二十秒…合わさった唇から割り込ませた舌で、趙雲は口内を攻め立てる、為されるがままの銀閣の思考はいつの間にか真

っ白になっていた。

「わ、私は売られた喧嘩は買いたたく主義なのだ！忘れたいと言うので在れば……忘れることができぬようにするまでだ」

唇を離し、胸に抱きついたまま趙雲は、真っ赤になりながらそう小さな声で言い放った。

酒の勢いもあったであろう、徐々に冷静になっていくと自分の行動が、いかに直情的で大胆であったかを思い返してしまう。

だが、これはこれでよかったのだと自分に言い聞かせたのだった。

「あっやはり此処にいましたか……って星！何をしてるのです！」

「あぁ～星ちゃんが抜け駆けしてるです～」

階段を上ってきた郭嘉と程立は、抱き合う？二人を目の前にし、盛大に文句を言うのだった。

そして、テケテケと銀閣のそばに行くと、その腕を抱きしめ、各々が想いを口にする。

「べ、別に私は気にしてないですから……銀閣……が何者でも、私はもう、真名と預けているんですからね、それを忘れないで…だから、勝手にどっか行っちゃうのは……無しにしてくださいね」

「風の人を見る目は確かなのです。だから、銀閣君が、大きくても小さくても、全然へいきなんですよ～それに、風は銀閣君の事……気に入ってますから、逃がさないですから～」

「モテモテだな坊主、いや今は兄ちゃんか、一粒で二度美味しいとは、このことだな」

「これこれ宝慧、それは秘密だと言っておいたでしょうに」

「風(ふう)が、銀閣を……美味しく……」

ぶしゅうううううう

（なんともお人好しな連中だな……ま、わかっていたことだが）

三人の言葉が、胸に響く……いつの間にか、囚われていたのは自分自身だったことに改めて気付く銀閣なのだった。

１０話（後書き）

・・・・・・・・・・

11話

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

黄巾賊からの防衛戦の傷跡は至る所にあるものの、あれから二日の時間が経ち、街もある程度正常に動き始めていた。

少しずつ、日常が戻ってきた……そのような気持ちを皆が持ちは始めた頃、かの援軍要請に応えた太守の軍勢が街に到着していた。何故二日後？と銀閣自身も疑問を持ったが、壊走した黄巾賊を出くわし、殲滅戦をしていた為とのことだった。

どちらにしても、今更感が拭えないが、太守自らのお出ましともなれば無碍な対応はできない、街の長老達はこぞって、忙しそうに対応していた。

大通り沿いの茶屋で、少年姿（厄介ごとに巻き込まれるのを防ぐために仕方なく）の銀閣と徐庶は陽の当たる特等席で団子をほおばっていた。

ポカポカした陽気と団子の美味さに銀閣はご機嫌であった。

そして、その横にくっつくように……いや、くっついている徐庶もまた至福の表情で団子を口に入れていた。

あの喧噪の後、なんだかんだとあり、結局、徐庶の真名を預かったときに言われた『これからも末永く宜しくお願い致します！』という言葉が凄く恐く感じたのは、気のせいであろう……そう思わずはおれなかった銀閣であった。

「ねぇ、雫（しずく）さんは、見に行かなくていいの？」

おもむろに問いかけるが、徐庶は興味がないとばかりに首を振り、かわりに女将に追加の団子を頼んだ。

「別に、私(わたくし)は。それに、直接会えるワケでもありませんし、それよりは……」

（確かに気にならないと言えば嘘となりますが、銀閣様と二人っきりになれるチャンス！これを逃す手はありませんもの！）

「……こうして、のんびりしているほうがいいですわ」

太守と共にやってきた天の御使いを一目見ようと、趙雲・郭嘉・程立の“姉ズ”は、話しを聞きつけた途端出かけていった。

そして、銀閣の護衛を買って出た徐庶は、その恩恵を満喫しているということなのであるが。

銀閣は勘違いしていた、自分という存在が周りにどんな影響を与えているのか、そして、徐庶はすでに……在る意味手遅れであるということに。

「ごめんね、僕のお守りがなければ雫(しずく)さんも見に行けたのに……」

すまなさそうに俯く銀閣の表情に、徐庶は鼻に手を当て込み上げてくる真っ赤な液体を我慢していた。

銀閣は気付かない、『この表情だけで……ご飯三杯はいけますわ～』と隣の女性が感極まっていたことなど。

銀閣が無頓着であるのだが、その容姿は、少しでもその属性を持っている女子であれば、『いただきます』と言われてしまいそうな、母性本能を擽(くすぐ)られるような、もしくは、ショタ心を刺激されるよう

なそんな姿なのだ。
当然のように“姉ズ”はこれ以上……敵…じゃなく銀閣を煩わせる者が現れぬよう注意を払っていた為、銀閣1人にさせることを是とせず、仕方なく徐庶に護衛を任せたのであるが……銀閣はそのことに露ほども気付かない。

「そんなことは気になさらずに、ささ…ア～ン」

「えっ、いや、あの1人で食べられ……」

「ア～ン」

「あの、だから……」

「ア～ン」

「はい……あ～ん」

周りから見たら仲の良い姉弟のような、年の離れたカップルのような空気を醸し出していた二人であるのだが、その仕草を遠目から見ていた一組の男女が存在していた。

「どうした北郷。何か気になるものでもあったのか？」

キラキラとした白い服が目立つ北郷と呼んだ青年に、鎧を着込んだ女性が問いかけていた。
そう、彼こそ噂の中心、天の国から舞い降りたとされる天の御使いと呼ばれる男であった。

そして、その横に立つのは、陳留の太守である曹操の守り刀が1人
夏侯惇。

「え、ああ、春蘭(しゅんらん)あそこ……ほら、茶屋の軒先にいる二人だよ」

指を指しながら、自分が気になった二人組を夏侯惇（春蘭(しゅんらん)と呼ぶは
真名であろう）に教えるのだが、教えられた彼女は『それがどうか
したのか？』と首をかしげている。

「あの服装だよ、あんなの見たこと無いだろう？」

「ああ、そう言われてみればそうかもしれぬなぁ、阿蘇阿蘇でも見
たことがない…いや、あったような…なかったような……いや、あ
ったかな……いや、なかったかもしれぬ……まぁいいか……それが
どうかしたのか？」

「あの少年が着ている服さ……俺が居た国の物に良く似てるんだ、
着流しって言うんだけどさ」

「ほお、それで？」

「いや、だからさ、もしかすると、あの少年も俺の知ってる国から
来たのかも知れないと思ってさ」

「なに！あの少年も天から来たというのか！」

「いや、そうかもしれないってだけで、まぁ、聞いてみたらわかる
んだろうけどな」

「なら、聞いてみたら良いではないか！ほら、行って聞いてこい！」

蹴飛ばすように送り出された男は、『春蘭（しゅんらん）は乱暴だなぁ』とぼやきつつも、銀閣達の元へ歩き出す。
近づいてくる男の気配を察した銀閣であったが、気付かぬ振りで団子をほおばり続けた。

「なぁ、君！ちょっといいかい？」

そう言って近づいた北郷であったが、銀閣の腰にある物が目に入った途端、冷静さを失った。
掴みかかるような勢いで興奮しながら話し出す目の前の男に、銀閣はなんだか嫌な予感をヒシヒシと感じたのだった。

「なぁ！君！その腰にあるのは、刀だよな！日本刀だよな！君は、日本から来たのか？いつの時代から来たんだ！いつからこの時代に来たんだ！なぁ、おい、教えてくれよ！」

そして、銀閣の護衛である徐庶にとっては、名も名乗らず、しかも興奮しながら銀閣に歩み寄る男は当然……“敵”以外の何者でもなかった。

「この無礼者！邪（よこしま）な気持ちで銀閣様に近づくなど言語道断！これ以上の狼藉は許しませんよ！」

その剣撃は岩をも両断すると自負する徐庶である、身に纏う闘気は半端ではない。
銀閣を庇うように立ちふさがるその姿と、鋭い眼光は。北郷を射抜く。
その気に当てられたのか、恐れをなしたのか、少しばかり下がるがその興奮は冷めることはなかった。

「おい、あんた邪魔しないでくれよ！俺は、そこの子に聞きたいだけなんだって！」

言い訳とも恫喝とも取れる北郷の振るまいは、当然のように周りの興味を促し、何だ何だ…と街民が集まりだした。
そして、その中心にいるのが、噂に名高い“天の御使い様”と街を守った女傑“徐庶”であれば、その騒ぎは大きくなるに決まっていた。
対峙する二人を余所に、聞き耳を立てていた者達のこぼれ話が、尾ひれをつけ、あっという間に人々の耳へと入っていくのであった。

曰く、天の御使い様は、少年に一目惚れをした。
曰く、天の御使い様は、少年の衣類を剥ぎ取ろうとした。
曰く、天の御使い様は、少年の全てを欲しがった……などなど。

睨み合う二人の手が、それぞれの武器に手が行きそうになる……その時、大音声が響き、二人は勿論、周りを取り囲む皆の動きが止まる。

「なんの騒ぎであるのか！」

人の群れが二つに別れ、そして、できたその場所をズンズンと歩む1人の少女。
彼女こそ、陳留の太守　曹操孟徳…本人であった。

「騒ぎがあると聞き来てみれば、一刀（かずと）……あなたいったい何をしているの？」

曹操の怒りを纏った詰問に、ウッとしながらも、一刀（かずと）と呼ばれた天

の御使いは、言い訳をするのであるが……。

「一刀言ったわよね、春蘭と街を一回りしたら、真っ直ぐに私の所へ来なさいってね！なのに、いつまで待っても来ないから、どうしたのかと思っていたら……春蘭！あなたが付いていながらどういうことなの！」

「申し訳ありません華琳様！」

いきなり主君の怒りを浴びた夏侯惇は、びくっとし直立不動の体勢をとり、ひたすら謝り続けた。

状況を知りたいが、周りの目もある、ここは自分の立場や、天の御使いである北郷の立場を考えれば速やかに引くことが得策であろう…そう考えるに至る。

「まぁ、詳しい話は後で聞くわ。そこの貴方達、私の部下が失礼したようね、後で改めて謝罪させるから、ここは許して貰えるかしら？」

片や太守、片や庶子である。

ここで言い募ったところで得することはないだろう…そう考えた徐庶は、それで構わない旨を伝え、早々に銀閣を庇うように茶屋を去るのであった。

去っていく……その背中を射るように見続ける、北郷の視線を無視しながら。

11話（後書き）

・・・・・・・・・

そろそろ分岐ルートを悩み出したりして。

う～む。

12話

・・・・・・・・・・

「で、一刀……ちゃんと聞かせてくれるかしら？」

「華琳様、聞くまでもありません！こいつは少年に欲情した、ただの獣です！女だけじゃなく男にも欲情するなんて、とんだ種馬もいたもんだわね！ああ汚らわしい、こんな男と一緒の部屋にいるというだけで……うえぇ、気持ち悪くなってきたわ…」

「おい、桂花勘違いするなって！俺が男に欲情するわけないだろう！」

「どうだかね！あんたみたいな超絶種馬男の性癖なんて聞きたくないし、知りたくもないわ！ああ、誰でも良いからこの全身精液まみれ種馬を埋めてくれないかしら！」

「桂花……黙りなさい。貴方の発言を許可した覚えはないわ、それと一刀、早く説明しなさい！」

「華琳様、すみません！お許し下さい！」

「すまない、華琳、わかったよ。」

曹操（真名は華琳というらしい）の静かなる怒りに気付いた二人…北郷と荀？（真名は桂花というらしい）は、急ぎ謝るのだった。

この部屋は、この街の庁舎にある客室。

滞在中の曹操とその一行に割り当てられた…執務室のような場所である。

そして、この場にいるのは、曹操、北郷、荀?、夏侯惇の四人。
官軍としてこの街に来た軍勢の君主であり、指揮官達であった。

「それで、一刀(かずと)貴方いったい…その少年と何があったというの?」

街で耳にした先ほどの噂は置いておいて、なにより、この天の御使いである青年が取り乱す事が気になったのだ。
少年ではなく、そばにいた美女の取り合いをしていたのだったら…この男のアレを切ってしまおうかしら…そんな恐ろしい思考も存在していた…だが、それは決して悟らせることはなかった。

「あの少年が着ていた服が、俺の国にあったものと似ていたんだ。それで、よく見ようと近づいてみたんだが、あの子が腰に持っていた武器が…その、日本刀っていって、俺の国の…武器…いや、剣そのものに見えたんだよ。それで、ちょっと興奮しちまって……」

「それで、横にいた者に止められていたというわけね……まぁ、だいたいはわかったけど、そんなに驚くべきことなのかしら?」

「ああ、それは、そのあり得ないんだ、この時代に日本刀なんて在るはずがない。在るはずがないんだ!なのにそこに存在したということは……よくわからないけど、気になるだろう?だから詳しいことを聞きたかったんだが……まぁ、こんなことになったってことさ」

北郷の話を聞き、曹操の思考は高速で回転する。
さっきの本郷の言葉……『この時代にあるはずがない』……つまり、本郷とは別の天から来た者なのか、その剣だけが飛来したものなのか…どちらにしても、他の者に知られる前に、調べておく必要がありそうだと考える。

「それで…桂花(けいふぁ)、その者達が何者か調べはついたの？」

「はい！華琳(かりん)様。少年のほうは宇練(うねり)という名で、どうも旅の途中にこの街に来たようです。そして、女の方は、この街の徐治療院の助手で、徐庶。徐老師の親族ということです。さらに、先日の黄巾賊を撃退いた…自警団の指揮官を務めたということです。」

淡々と荀？が報告書を読み上げるが、その中にでてきた名前に北郷は、強く反応するのだった。

「徐庶だって！？」

「あんた…その女知ってるの？」

醒めた目つきで、『またか』とは口にしないが、この女好きの全身精液まみれ種馬は際限がないから困る。天の御使いとはいえ、何故こんな男をそばに置くのかイマイチ理解できない…そんな荀？が聞き返す。

「桂花(けいふぁ)…そんな目で見るなよ、その徐庶って人が俺の記憶と合っていたならば…だけど、俺の国では名の知れた軍師なんだ、軍略と特に内政に精通した人物だったと…思ったけど、まぁ、本人かどうかはわからないけどな」

「へぇ、もしそれが本当なら…欲しいわね…その徐庶」

「華琳(かりん)様、軍師なんて私1人で十分です、そんな何処の馬のとも知れぬ女なんか…」

「桂花…あなたが、私の為に頑張ってくれていることはわかってい
るわ。だけどね、私はこれからもっと大きくなるわ…だから、優秀
な人材ならどれだけけいいても足りないくらいなのよ」

「か、華琳様ぁ～」

「はいはい、私の可愛い桂花。貴方はとても優秀な軍師よ、だから
わかって頂戴」

（でも、一緒にいたという少年……何か引っかかるわね）

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「銀閣君、風は聞いたのですよ～男に襲われた…と」

「えぇ？私が聞いたのとは違うわよ風。身ぐるみ破がされたって！」

「むむ、それがしの聞いたところでは……って、それよりも怪我は
なかったのか銀閣！」

宿に帰ると、“姉ズ”は飛びかかるように入り口に駆けつけた。
そして、何もなかったようで安心し、ことのあらましを聞くのであ
るが……。

「ふむ、我々も遠目でしか見ることが出来なくてな。しかし、聞けば聞くほど天の御使い殿は…なんというか、礼節に欠ける人物のようだな」

「どうなのでしょうかね…やはり直接お会いしてみないことには何とも……」

「凛(りん)ちゃんの言うと通りですね～噂や風評だけではわからないですし～」

「だけどよぉ、男好きってこともあるんじゃねえのかい、なんせ天の国のことは誰も知らねえんだしな！」

（確かにあの気迫は鬼気迫るものがあったな……男好きか……宝慧に言うと通りなら、絶対、関わり合いたくねえな）

「銀閣様、心配なさらずとも、あなたの雫(しずく)が必ずお守り致しますから！」

「いやいや、雫(しずく)殿、銀閣はこの趙雲子龍が守りきります故、心配無用ですぞ」

火花を散らしながら、なんだか問題発言をしている二人を眺める銀閣は、とにかく面倒が起きる前に街をでるのが良策だな…と考えていると、来訪者を告げる鈴が鳴った。

「ん？誰か来たみたいだね……僕が出るよ」

変に熱い二人から逃げるように、ひょこっと立ち上がり、玄関に向かう銀閣であるがそこへ向かう途中また鈴が鳴る。
随分とせっかちな来訪者だな…と、そう思いながら戸を開けるのだが、開けたすぐ目の前にイライラした様子の女の子?が仁王立ちであった。

「遅いのよ!鈴を鳴らしたらすぐ開けなさいよ!まったく……」

開口一番に文句を言われ、おいおい…と思うがそこは銀閣、ちょろっと悪戯心を刺激される。
猫耳のような被り物をした気の強そうなイメージを受ける……目の前の女の子は引き続き文句を垂れ流してるのだが、気が済んだのか…文句を言っていた相手が自分より目線の低い相手であることに気が付く。
自分の目の前にいる……その少年は目元に涙を浮かべ、ぎゅ〜っと力を入れている…そう、まるで泣くのを我慢しているかのように。

「えぇっ!?」
「銀閣く〜ん、お客さんは何方(どなた)でしたか〜」

驚きの声を発したその瞬間に…なかなか戻って着ない銀閣を心配して奥から程立が現れる。
そして、心の中でニヤリっとした銀閣は、その胸元に抱きつくのであった。

「ふ、風(ふう)ねえちゃぁん〜」

不意に抱きつかれた程立は、『おおっ！』とドキドキしながらも…おずおずと抱きしめる。
だが、よく見ると涙目ではないか…いったいどうしとのかと銀閣に問うのであるが、銀閣はエグエグと泣く（振り）ばかり、そして、入り口の外に立つ訪問者は、あたふたとかなり動揺している様が見て取れる。

ピンっ！と来たとばかりに、ニヤリっと口元を少し吊り上げた程立は、後は風（ふう）にお任せアレ…と心の中でワクワクさせたのだった。

「おお！どうしたのだ！こんなに泣くだなんて珍しい……ん？来客だったのですね…まさか！この人に何か変なことをされたんですか！」

と、奥の部屋にいる者たちに聞こえるような大きな声を（特に後半部分に力を込めて）あげる。
そして、当然のように…何事だ！とばかりに部屋にいた全員が玄関へと終結するのだったが……。

「えっ、あっちょっと待ちなさいよ！私は別にへ、変なことなんかしてないわ！それにこんな男の子が出てくるなんて思ってなくて、それに、泣かせるつもりなんかなくって、あ、いや、そんなに睨まないで…わ、悪かったわよ…だから、あ、謝っているじゃない！」

動揺し混乱しまくっている者が約1名玄関の外で…あたふたと言い訳？と謝罪？を懸命にしていた。

「おうおう、ねえちゃん、坊主を泣かせるなんて…坊主が大人しいのをいいことに、あんなことや、こんなことを……正直に白状し

ちまいな！」

「これこれ宝慧、そんなことを大声で言ってはいけませんよ、こんなことが奥の部屋いる星(せい)ちゃんや雫(しずく)ちゃんにばれたら…大惨事…いや、大虐殺が起きてしまいますから」

後ろにいる三人の存在に気が付かない振りをして、さも此処だけの話し的な口ぶりで言うのだが、後ろいる者達には丸聞こえであった。程立の独白を聞いた三人は大いに勘違いをした…それが悪戯者達の策とは気付かずに。

「なにっ！私の銀閣を泣かせた上に、破廉恥なことだと！（一言も言っていない）許さん！この槍の錆にしてやろう！」

「くっ、私(わたくし)の銀閣様に！うらや…いえ、許されない暴挙ですわ！この斬撃に斬れぬもの無しですわ！」

立ちこめる殺気に当たられた…可哀想な被害者?は涙目で『あうあう』と首を横に振ることしかできないでいたのだが、運命の神はまだ彼女の存命を許し…更なる混乱を望んでいるかのようだった。

「桂花(けいふぁ)～まだなのか～華琳(かりん)が少しイラついてきて恐いんだけど……」

彼女達の前に姿を現したのは、昼間に出会った天の御使い……北郷一刀。

彼は、曹操の命により昼間の詫びを含め徐庶達を食事に誘うべく使

いを買って出た荀?の…戻りが遅いので、様子を見にやって来たのであるが、声を掛けた先に見えるのは…ただ事でない様子。
駆け足で荀?の前にでると、庇うようにして両腕を広げた。

「おい、お前達やめろ!桂花(けいふぁ)に何しようとしてるんだ!事と次第によっては唯じゃ済まさないぞ!」

突然現れて、ただ自分の身内が危なそうであるという状況だけで、見た目だけで判断をし、こちらに非がないような、取りようによっては彼女たちが全て悪いようにも受け取れるその言い様は、痛く彼女たちの敵愾心を刺激した。
さらに増大する殺気に、状況を説明することもままならない荀?が辛うじて『やめて』という意思表示を込めて彼の服の裾を引っ張るのだが、彼は更に勘違いする。

そう、その行為を『助けて』と受け取ったのだから……。

「大丈夫だ桂花(けいふぁ)!ここは俺が何とかするから、お前は先に華琳(かりん)の所へ行っていろ!ほら、早く行け!」

荀?を逃がそうと声を荒げるその内容と行動は、お互いの齟齬を、勘違いを更に深める結果となってしまったのだった。
そして、それを見つめる程立と銀閣は『面白いことになった』と予想外の展開に、別の意味でドキドキしていたのだった。

１２話（後書き）

・・・・・・・・・・・・・・

登場人物が増えることが凄く・・・と感じ始めた今日この頃。
混乱なき読みやすくを心がけていきたいです。

13話

・・・・・・・・・・

彼は、若過ぎた。
彼は、自分の感情に正直過ぎた。
彼は、もっとも大切な思慮深さが足らなかった。

唯一の味方であり、この状況の全てを知っているはずの荀?を退場させたことで、絡みに絡まった行き違いと、勘違いと、高ぶった感情の紐はもはや手遅れなほどの事態に陥っていた。

(さようなら、天の御使いな人。運が良ければ……死なないかもな)

そんな末期の人に対する眼差しで見つめる銀閣であるのだが、クイックイッと程立が袖を引っ張る。
『このままでいいのか』といっているのであるが、ここまできたら成るようにしかならない。
何処まで行っても他人の命……ぶっちゃけ銀閣にとっても、程立にとってもどうでもよかった。
強いて言えば、ここで終わるような命であれば、この大陸に平和をもたらすなんて大きな話…所詮は戯言や虚言の類だということだ…
…なんて考えていたのだが。

「引かないのなら、俺もやるしかない!」

一時のにらみ合いの果て、一方的に言い放ち、腰の剣を抜いた本郷

は、眼光をさらに厳しく放つ。
武人が対峙した相手に対し“剣を抜く”とは、すなわち殺し合いをするということだ。
本郷は大きな思い違いをしていた、自分の目の前にいるのは、これまで相手をしてきた賊ではなく、本物のしかも一騎当千の強者であるということを、そして、今までのような、剣を見せての恫喝など、何も意味を成さないことを。
これまでは、曹操の知名度、自分の天の御使いという知名度というフィルターが掛かることで、相手は驚き、恐れ、結果、恫喝だけで事を済ませることもできていた。
そして、それは知らず知らずのうちに“北郷一刀自身の力”であると思い違いをすることとなる……つまり、彼は増長しているのだ。

武人は武人を知るという。
強気者（つよきもの）は、相手を見るだけでその大凡（おおよそ）の力量や強さを感じるというのだ。
そして、趙雲、徐庶共に己の“武”に自信と誇りを持っており、同じ土俵に立てば手加減など侮蔑以外のなにものでもないとさえ思う。
そんな二人の前で、剣を抜き、さらに恫喝する男。
天の御使いとはいえ、到底自分たちには適わぬ力量であろう……にも係わらず、強気の姿勢には、ある種感心すると同時に、殺すしかないと思わせるほどの感情の高まりを感じていた。
それは、もはや“言葉では言い表せない何か大切なもの”を汚されたような気になっていたのだから。

（これが…若さって奴なんだろうなぁ）

そんな気楽な感想を、やや爺くさい感は否めない…銀閣の感想は口

からは出ないが、そろそろ止めないと本気で、目の前の男は……正に天に召されることになるだろ……ということは分かり切っていた。

「星ちゃん、雫ちゃん、そろそろ止めませんかぁ～龍がヒヨコを食べたとて、腹の足しにはならないと思うにですよ～」

「いや風、だがな」

「売られた喧嘩は、買い叩く主義なので、あしからず」

そう言いながら武器を収めない二人に溜息をつき、程立は、銀閣の袖を引く……次は銀閣の番だとでも言いたげに。

（……やれやれだぜ）

「星おねえちゃん、雫さん……弱い者イジメ格好悪い」

効果は覿面。

一拍の間を置き……ガーンっいった効果音が聞こえてきそうな程のショックを受け、二人の夜叉モードは継続時間を終了し、『銀閣がそう言うなら仕方がないな』とか、『私別に本気ではなかったのですよ』などと聞こえてくるが、兎に角、玄関前でに惨劇は回避されたといっていいだろう。

鶴の一声ならぬ銀閣の一声で、簡単に矛を収めた趙雲と徐庶であったが、ただ1人、空気を読めない男…北郷一刀だけが、和みモードに入った空気から切り離され孤立していた。

そして、自らが振り上げた拳の収め場所を失ったその自尊心は、モヤモヤとしたまま消えることなく心の中に残ったのだった。

「命拾いしましたね天の御使い殿。ご用がなければ、ここから立ち去って下さい」

怒りを抑えたような棒読み、感情を殺したかのような能面、“武”を持たぬ郭嘉としてはこれ以上のことは出来なかったし、するつもりもなかった。
ただただ、彼に対する評価は底辺を貫き、地下へとさらに掘り進んでいる状況であったとしても…だ。

そして、彼を残し、皆、宿の中へと消えていく。
その存在を無い物として、関わり合うことすら面倒という空気をだしながら。
閉め出された彼は、そのまま呆然とかなりの時間立ちつくす結果となったのだった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「まったく！馬鹿なことをしてくれたわね！」

怒りを隠そうともせず、激情のままに当たり散らす金髪の少女は、無様な部下二人を叱咤していた。
街民の前での礼に欠けたやりとりに加え、それを詫びるための酒宴への誘いすらできず、喧嘩を吹っ掛ける始末。
このことは、日が経てば人知れず人の耳に入るだろう。
なにかと目立つ者たちだ、誰が何処で聞き耳を立てているやもしれない。
そして言うだろう、曹操とその部下は、礼を失する無教養者、無骨者であると。
さらには、所詮は宦官の家系、所詮は小娘、やることなすこと……などと言い募る者もでるであろう。
今まで衝突してきた者達はそうであったし、そう言われぬよう実力で、行動力で、結果を出し黙らせてきた。
しかし、この儒教社会に於いて……このことは、この対応のまずさは致命的になりかねない。

じっと蹲る(うずくま)二人を睨みながら、『斬るか…』との考えも浮かぶが、それでも足りないくらいだ。
なんとしてでも、この失点を挽回したいが、今は良い考えが浮かばない。

「すまない華琳(かりん)……だが、あいつらだって悪いんだぜ、いきなり…」

「うるさい！！黙りなさい一刀！それともここで……首を切られたいの？」

言い訳に激怒し、何もわかっていないこの男に更なる叱咤をするが、

自らそのまずさを教える気にすらならない。
イライラは更に募るが、それでは何も解決しないことも頭の中では理解しているのだが……。

（こんなことで躓き、覇を唱える機会を失うのなら、私の天運などその程度……というわけね）

スゥーハァーと深呼吸をし、少し落ち着いた曹操は、もう一度考えをまとめるために、荀？へ視線を向ける。

「桂花（けいふぁ）、貴方ならわかるわよね？私が怒っている意味が。だけど残念ながら一刀には、分からないようね…桂花（けいふぁ）説明してあげて」

曹操に命じられ、北郷に対して、今回の件についての問題点をつらつらと並べ立てていく。
それに対して、都度、『それは…』とか『だけど…』などと反論しようとする北郷を睨み付け、このことが公になれば、兗州や予州の名士達からの協力を得ることが難しくなると締めくくった。
そして、主君が華琳（かりん）様でなければ、すでに首を切られ、礼を欠いたことに対して、命をもって償わされているところだとも言い加える。

礼というものが、そこまでに価値を持っているとは露ほども知らなかったと言う北郷に対し、もっとこの世界のこと、しきたりや慣習を学び、精進しなさい……と言うに留まった曹操であるが、この件を穏便に収める策を考えなくては成らない…なんとも頭の痛いことだと思ったのだった。

１３話（後書き）

・・・・・・・・・・

14話

・・・・・・・・・・・・・・・

時は深夜、黄金色に輝く月明かりを見上げながら、街を囲う外壁の上で男が1人酒を楽しんでいた。
皆が寝静まったのを確認し、隠してあった酒を持ち出し、ここへやって来た。
くいっと杯を空けては、何処へいって酒というものはあるものだが、こんな時は…無性に祖国の酒の味が恋しくなる……そんな感傷が少し湧くが、言ったところで詮無きことだ…と想いを酒と共に飲み干す。

「一期（いちご）の栄（さかえ）は一盃の酒、四十九年は一酔の間、生を知らず…死また知らず…歳月またこれ夢中の如し………か」

今までの人生を振り返ってのことなのか、この先の人生を憂いてのことなのか、男が月に向かい語りかける言葉には、不思議と力が感じられた。
興が乗ったのか、男は懐から扇子を取り出すと、パッと広げ舞いを踊り出す。

「人間五十年～下天のうちにくらぶれば～夢幻のごとくなり～一度生を受け～滅せぬ者のあるべきか～」

平家物語の「敦盛最期」の章をもとに、世阿弥が編作した能であるが、男はことのほかこの歌を好んでいた。
人に見せられるような代物ではないが、自分なりに何度も練習し、それなりに形にはなっていると自画自賛…その程度であるが。

パチパチパチ……

人の気配と共に聞こえた拍手に振り向くが…影にはいっているのかその容姿はキチンと見えない。
だが、その拍手の主が女であることは察することがでした。
男は無言であったが、興味を失い座り直すと月を見上げながら杯を傾け始めた。
姿を見せぬものには、見せぬだけの理由があるのだと…勝手に解釈してのことであるが、その行為が彼女の琴線を刺激した。

「貴方…初めて見る顔ね…この街の者なの？」

先ほどの詩（うた）といい、舞いといい、庶人では到底得られぬ教養の賜物。
貴族か、豪族か、豪商か…しかし、この街の有力者の中に、目の前にいる男を見た記憶はない。
好奇心も相まって一歩近づき、男をよく見ようとするのだが、自分が影の中に居たからだあろうか、眩しいほどの月明かりによって輝いて見える男の姿が、どこか儚げで、どこか幻想的で、そして、胸を打つような美しさがあった。

銀黒の長く揺らめく長髪は乱れることなく、男の服装が夜衣でなければ性別をも見間違えたかも知れなかった。
女にしか興味がない自分ではあるが、この男はどこか違うような気がした……そう、自分が庇護する天の御使い…北郷一刀とも違う何かを。

「ねぇ、聞こえてるんでしょ、何か言ったらどうなの！」

何をムキになっているのだ…そう思わないでもなかったが、何故か興味を覚えた、そして、もっと知りたくなった…。
今の自分は、自由なはずだ、太守でも、名家の跡取りでも、君主でも、上司でもない、唯の女。
この、自分を知る者が全て眠っている瞬間だけが、本当のありのままの自分で居られる時間。
いつもとは違う…昼間では決して見ることの出来ない……ストレートに下ろした髪を右手でクリクリといじりながら、また少し男に近づく。
この自分の姿を見ても、誰も気付かないだろう……だから許されるのではないか…自分個人が純粋に興味を持つことが許されるのではないか…そう思ったのだ。

「元気がいいねぇ～お嬢ちゃん…なにかいいことでもあったのかい？」

少しだけ、少しだけ眼を女に向けた男は、再び興味なさげに杯を煽る。

無視されたわけではない、しかし、女が望んだ答えでもなかった。
だが、それ故、女は悟るのだ…ここは幻想、現実と現実の境目なのだと。
ならば、此処にいる間だけは、自由にしてよいのだと解釈し、テクテクと男に近づくと、その背に自分の背中を預けるように座り、手を男へと差し出す。

「そのお酒…私にも、ちょうだい」

やれやれ…そんな素振りをしながらも、一つしかない杯に酒を注ぎ…そっと手渡す。
一気に煽ると、また杯を突き出しお代わりをねだる。
少し酔いがまわったのか、今日起きた出来事を一方的に喋りだしては、あいつがダメだの、あの子もまだまだだのと、愚痴や弱音を吐いていく。
飲んでは喋り、飲んでは喋り、暫くすると酒がなくなり、男は酒壺を逆さし空(から)であることを無言で見せつける。

「うっ、ごめんなさい…全部飲んじゃったわね」

素直に謝る女の頭をポンポンっ叩くと、スッと立ち上がる…が、隣で座る女はバランスを崩し、ゴロリっと床へ転げこんでしまう。
それを見た男は、ふふっと込み上げた笑いを隠すこともなく、そして、転がった女も何故か笑いが溢れてきた。

「もう、急に立ち上がるなんて酷い男ね」

暫く笑い合った後、そう言いながら女も立ち上がろうとし、男は『男ってのはそんなもんだ』と肯定し女に手を貸して立ち上がらせた。くるりと背を向け立ち去ろうとする男の背中に、お返しとばかりに悪戯心を込めて抱きつくと……自然と顔も背に当たる。伝わる体温と鼓動が、懐かしくもあり、安心できる…そんな妙な感覚に囚われた。

男という生き物に興味がない自分であるはずなのに…とまで思うのだが、今は…深く考えるのはよそうとした。

「また…会える？」

すっと離れた男の背中に、幾ばくかの寂しさを感じる自分に対し、酔っているのだなと納得させたが、意識せずに出た自分の言葉に、自分自身が驚いた。

だが、それこそが今、この瞬間望んでいることなのだと理解した…したが故に沸き上がる熱い感情と上気する体温に戸惑う。

「出会いとは偶然…故に望んで叶えられることなし、胡蝶の夢なれど、自分を見失うことなかれ」

それは誰に向けての言葉なのか…振り向かずに…そのまま闇へ消えていく男の背を見続けながら、根拠はないが、また会えると感じていた。

そう、女のカンというやつであった。

「ふぅ～朝か……」

差し込む眩しい朝日、思いの外…目覚めが遅かったことを自覚する。
急がないと…と思い身体を起こすと、昨日よりも不思議と軽快なことに驚く。
疲れが溜まっていたはずだけど…そんな思いと共に、昨晩の出来事を思い返す。
どこからが夢で、どこまでが現実なのか…だが、それを記憶しているということには違いはない。

そういえば最近、政務の忙しさに紛れ、楽しいと思うことが少なかった…いや、あんな感じに自然に笑ったのは…どのくらい前になるのだろうか…自身の記憶を覗いてみるのだが思い出せそうになかった。

（少し…余裕がなかったかもしれないわね）

素早く着替えを終えると、朝食の準備の整った食堂に顔をだす。
待っていたのだろう…自分の部下達がそこに居た。

「おはようございます華琳（かりん）様！」

「華琳様おはようございます」

「華琳おはよう」

「おはよう…春蘭、桂花、一刀」

そして皆が揃ったことで朝食が進んでいく。
もしゃもしゃと頬張りながら、自分を慕ってくれる可愛い部下達をちらりと見、この者達のためにも頑張らなければと思いを強くしたのだった。
そう、自分の変わりはいない…此処にいる自分も、戦場にいる自分も、そして、あの場にいた自分も、全て自分自身なのだから。

「胡蝶の夢…荘子だったわね……ふふふっ…変な男」

そんな曹操の呟きは誰の耳に届くこともなく、微笑みだけを残していた。

１４話（後書き）

・・・・・・・・・・・・・

そろそろ詰まってきました（早っ！）

15話

・・・・・・・・・・

比較的穏やかな朝といえた……そのことが発覚するまでは。

「おはよう銀閣～少しいいかしら？」

（うわぁ～すげぇ笑顔なんだけど……このプレッシャーはなんだ）

「おはよう凛（りん）ねえさん……どうしたんだい？」

負負負……じゃなく、フフフっと微笑みながら、寝床から起きあがろうとする銀閣の両肩をガシっと掴み、顔をすぐそばまで近づける。息を感じられる距離、少しでも動かせば…その唇は触れてしまう…そんな距離。

「銀閣…昨日…別の女と一緒にいたりしてないわよね？」

恐るべしは乙女の嗅覚なのか……ここは肯定するべきか、否定するべきか……己の運命が決まるこの一瞬、少し躊躇した。

それがいけなかったのか、はたまた最初からダメだったのか、そのまま倒れ込むように押し倒された。

「凛ねえさん？」

「いいのよ…銀閣。でもね、私のことも見て欲しいの…わかるでしょ…私だって……」

（いや、わけわかんねぇって……）

『んぐっ！？』

突然奪われた唇、ふさがれ、そして蹂躙される。
侵入を許したそれは、大胆に、望むがままに動き回る。

『んぐっ、はむっ、んん……あはん……んん、んぐ』

絡む舌と唾液の音…そして、歓喜を帯びた漏れ出る喘ぎ。
気が済んだのか、小休止なのか、離れた唇から伝う銀色のなにかが……二人の中に住まう獣を呼び覚まそうとする。
銀閣とて男である…“こういう行為”が嫌いかと問われれば“否”と答えるのであるが……

（朝ぱらからってぇのも悪かない…悪くはないが、このままで済むわけがない…）

経験法則とでもいうのだろうか、短い付き合いではあるこの後の展開は……在る意味予想できた。
再び接近する唇と唇……重なり合う……その瞬間、『バンっ！』と

扉が開き、その様を指さす。

「そこまでなのです！凜ちゃん～協定違反は～ずるいと風は思うのです」

突然？の乱入者により、『ハッ』と正気に戻った郭嘉は、一体何を……と呟くと、自分の位置と銀閣の胸板、そして口に残る感触を思い出し、ぶしゅぅぅぅぅ……と鼻血を盛大に吹き出した。
当然のことながら、銀閣は頭の先から真っ赤に染まってしまい……見る者がいれば失神してしまいそうなくらいの猟奇的な空間となっていた。

「凜ちゃんの“黒化発動！”に対し、風はここで“清涼な風”を召還。正気の効果で、血みどろ沼を墓場へ送るのです！」

宇宙からの電波っぽいことを口走りながら、程立は郭嘉の鼻血を止めるべく首筋をトントンする。
そして鼻をかませると、“着替えること”を促す。
もじもじしている郭嘉の耳元で『淑女同盟』と呟くと、顔を蒼くして退出していった。

「もう～凜ちゃんは……仕方がないので風が綺麗にしてあげるのですよ～」

どこからそんな力が出ているのかわからないが、程立は銀閣の襟を掴むと、そのままズルズルと風呂場まで引きずっていく。

「ささ、その紅い液体まみれの服を～脱いでくださいね～」

Ｙｅｓ　も　Ｎｏ　も言わせぬ早業で服を剥ぎ取ると、『そぉれっ！』っと、銀閣に真水をバシャンっとぶっかけるのだった。
当然のように……銀閣はシュルシュルシュル～っと少年の姿に変化してしまい、手で股間を隠してブルブルと震える。

「なっ、何を……」

文句を言いかけたのであるが……程立のキュピーンと光る眼と背後に湧き出でる黒いオーラが……それ以上の発言を押しとどめた。
本能で察知したのだ…自らに降りかかるであろう命の危険を。

「朝から～火照っている銀閣君を冷まそうと思いまして……ほら、頭洗ってあげますから～こちらに来て下さい」

くいくいっと指で座る場所を指し示され……銀閣は観念してそこへ座る。
冷たくもないが、熱くもない……そんな湯でゴシゴシと頭の血糊を洗い流され、ふ～っと息を吐く出すと、今度は、かなりぬるいお湯を掛けられる……この程度の温度なら大丈夫……故に、銀閣は少年

姿のまま程立に全身…隅々まで綺麗に洗われてしまった。

もちろん、アレなるものも……丹念に。

灰になった銀閣は、成されるがまま程立の用意した服に着替えさせられ、そのまま外へでた。

宿の外には、趙雲、郭嘉、徐庶が揃っており、『遅い』だの『ずるい』だのと聞こえたが、燃え尽きている銀閣にとっては、全てどうでもよいことであった。

両脇を抱えられるように連れてこられた場所は、この街でも一番の高級料亭……といっても、この街の規模でという範疇だ、まぁ、ちょっち敷居の高い店といった具合か。

どちらにせよ一見(いちげん)さんお断りの店なので、懐具合も合わさって彼女たちも入ったことはない。

そんな店の前にやって来たのだが、ここで銀閣は思う……金(かね)大丈夫なのか？と。

店内に入ると、『伺っております。こちらへどうぞ』と導かれるまま案内係のお姉さんについて階段を上がって行くのであるが…チャイナドレスの際どいスリットから見える美脚に『おっ！』っと眼を向けた瞬間…銀閣の目の前に現れた目隠し（郭嘉と徐庶の手）により何も見えなくなったまま連行（その表現がぴったりくる）されていくのであった。

（いったい何がどうした）

三階の個室に案内されると、そこには、曹操、荀？、夏侯惇、そして、天の御使いである北郷の姿があった。

「よく来てくれたわね、心から礼を言うわ。そして、昨日の件も含め…私の部下達が不愉快思いをさせてしまい申し訳なかったわ」

曹操がそう言いながら、皆を席へと誘(いざな)う。
すでに盛りだくさんの料理と酒が用意されており、美味しそうな香に満ちあふれていた。

「皆…席に着いたわね。では、改めて、我が名は曹操、字は孟徳。陳留の太守をしている者よ。今回の件は本当に申し訳なかったわ、この通り謝罪させていただくわ」

そういって陳留の太守である曹操本人が頭を下げたのだ。
しかも相手は、貴族でも豪族でもない只の庶人である。
その姿から感じられる誠心誠意な心と気骨稜稜(きこつりょうりょう)な様は、その懐の大きさを感じさせ魅了されてしまいそうであった。

「私は、荀?、字は文若よ。華琳(かりん)様の軍師をしてるわ。今回の件は、も、申し訳なかったと思っているのよ。この通りすみませんでした。」

猫耳を模したフードのついた頭をちょこんっと下げ、恥ずかしそうに少し紅くなった顔は、荀?を知る者が見れば天変地異かと思えるほどの萌え具合であった。

現に、すぐそばでそれを目撃した夏侯惇も本郷も……驚いているように見える。
だが、その紅くなった目線の先にいるのが銀閣であることに気付いた“姉ズ”の心証は余り宜しくないようだ。

「ごほんっ、えっと私は夏侯惇、字は元譲。華琳様の守り刀だ。今回はこの桂花と北郷が迷惑をかけたそうだな……私からも謝罪させてもらおう」

無骨な雰囲気はあるが、どこか愛らし感じでもある武人はそれだけ言うと席にドカっと座り、『北郷早くしろ』と隣をこづいていた。

「あ、ああ。えっと、俺の名は北郷　一刀。天の御使いと呼ばれている。礼を欠く行動で不愉快な思いをさせたことについては本当に悪いと思っている。この通りだ、許して欲しい」

キラキラとした白い服を着込んだ天の御使いを名乗る男：北郷は、腰を直角に曲げ深々とお辞儀をした。
余りに勢いよく下げたので、『ゴンっ』と目の前の卓に額をぶつけたのは……ご愛敬というものであろう。
くすりっとした笑いを受け、場の雰囲気も若干和らいだように感じられる。

15話（後書き）

・・・・・・・・・

週末は、投稿出来そうにありません。

すみません。

16話

・・・・・・・・・・

少し和んだところで、招かれた側の自己紹介が進んでいくのであるが・・・

「それがしは、冀州常山の趙雲、字は子龍と『ええぇ！！』……申します」

「私は、郭嘉、字は　『なんだってぇ！！』……奉孝と申します」

「風(ふう)は、程立、字は仲徳と　『マジか！！』……申します」

三人が名前を告げると、天の御使いこと北郷が己の…自制無き驚きを大声で挟むので、なんとも言い難い空気に包まれてしまった。

「一刀！貴方……私に恨みがあるのね！そうでしょ！そうに決まっているわね！」

刹那的に曹操は、叫びながら隣に座る北郷の胸ぐらを掴み、力の限り揺さぶった。

余りのシェイキングに、北郷は意識どころか魂まで持って行かれそ

うになったが、辛うじて昇天は免れた。

「あっ、ちょっ、か、華琳(かりん)、ま、まて、まってくれって！」

上下に揺れる己の頭で視界がぼやける中、取り敢えず曹操の動きを止めないと命が危ない。
自分の両手で曹操の腕を掴むのであるが、この小柄な少女の何処に……こんな力が秘められているのか不思議なほどの力であった。

「ま、いいわ……もうこうなったら、ココで斬るしかなさそうだから！」

腕を放し、床へたたき落とした目の前の男を『頭文字G』的な生物を見るような目つきで睨む。
いつの間にか取り出した…死神が持っているような大きな鎌を握りしめる曹操に恐れおののきながら、訳のわからぬ激昂で斬られては堪らない……とばかりに取り繕おうとするのであるが、曹操の怒りは収まりそうになかった。

「一刀……選ばせてあげる。首がいいか、アレがいいか……ね。フフフ……」

「華琳(かりん)様、そんな情けは不必要です！こんな全身精液男なんかスパッと打ち首にしましょう！是非そうして下さい！この全世界の少女

の為に！」

「お、おい！桂花、煽るような事言うなよ！どっちを斬られても死んじゃうだろうが！前者は生命的に、後者は男として！」

「ふふふ、別に私は痛くもなければ、どうでもいいから！あんたが居なくなれば私が華琳様のご寵愛を独占できるわけだしね！だから死んで詫びなさい！華琳様と主に私の為に！」

そんな荀？と北郷のやり取りに興を削がれたのか、はぁ～と溜息をつき、再び趙雲達に頭を下げる。

余りにも馬鹿らしいやり取り（本人達は真剣そのもの）を見せられ、趙雲達にとっては、もうどうでもいい……そんな気にさせられた……が、友好的な雰囲気でないことは間違いなかった。

「一刀、桂花、いい加減にしなさい！二人とも、そこに正座よ！」

結局、曹操が止めるまで言い合いを続けていた荀？と北郷は床に正座を命じられ、皆に見下ろされるような位置にて縮こまった。

散々お説教され、この宴会中はそこから動くこと禁ずると言われる始末。

なんとも大変な宴会の幕開けは、こうして始まったのであった。

今夜は無礼講で構わないから、と前置きをし、酒杯を皮切りに宴会は進んでいく。

正座したままの二人は、美味しそうな匂いで胃袋を鳴かせ、酒杯を飲み干す音に、喉を鳴らす。

捨てられた子犬のような眼差しで……曹操を見続ける荀?がちょっと可愛いかも……と感じた瞬間、何故か太股を抓られ痛い思いする銀閣であるが、右から左からと差し出される料理を食べるのに忙しかった。

有耶無耶のうちに始まった宴会であったが故に、名前を聞いていなかったことに……今更ながら気がついた曹操が少年に名を聞こうとするのであるが、目の前で繰り広げられている……餌付けと思われる……何とも痒くなるやり取りを暫し面白そうに見つめていた。

「ほら銀閣、これも美味しいぞ!あ~ん」

「これも美味しいわよ!ほら一口取ってあげるね、ささ、あ~ん」

「風(ふう)は、これなんか凄く美味しいと思いましたよ~銀閣君~はい、あ~ん」

「銀閣様、口元にご飯粒が……ふふふ、これで綺麗になりましたよ」

テーブルを見上げるようにしている北郷達では、死角となる位置で行われている惨劇(銀閣談)。

声だけ聞いているには、まさにハーレム状態。

だからこそ、北郷はこの時考えていた……リア充死すべし…と。

口を動かし、飲み込み、止めどなく差し出される料理や飲み物に、振り回されているわけであるが、流石に少しゆっくりと楽しみてぇ……と思うの銀閣。

何度でも言うが、宇練銀閣……見た目は少年だが、心は大人。

この状況が恥ずかしいこと…この上なく、かといって副作用の補正効果により…強気にでれないジレンマ。

だが、この異様なテンションで世話を焼いてくれることに…色々な意味で恐れを抱くが故に、成されるがままでもある……ちょっと涙目になってきた銀閣であった。

「貴方たち、その子の名前…まだ聞いていないのだけど、聞いてもいいかしら？」

銀閣は、『おお、曹操殿！お主、今いいこと言いました』的な眼差しで口の中身を飲み込むと、ふぅ～と息を吐き、では…と言う感じで、しっかりと曹操を見つめる。

ホストからの申し出に、趙雲達も箸の動きをピタリと止めた。

「遅ればせながら、僕は宇練と申します。何もしていない僕までお招き頂き、大変感謝しております。ありがとうございます」

余り係わりたくない銀閣であったが、礼には礼で応える常識は持ち合わせていたので、簡潔であるが思うところを述べた。

ただ、その場にいた者全員の視線を浴びる（注：美少女だらけです）ことに恥ずかしさを憶えたため、やや下向き加減になってしまったが。

ただ、目の前の曹操に余り興味を持たれても厄介なので、銀閣自身

は大人しく目立つことは避けようと強く思っていた。

折り目正しく、挨拶する銀閣に、『礼儀正しい子ね』と好印象を持った曹操は、もう少し話しをするべく話題を振る。

何故か聞かなくては…知らなくてはならないと感じた…そう、根拠はないが曹操が持つ核の部分から沸き上がる何かに突き動かされてのことだった……ただ、本人は無自覚であったのであるが。

「喜んでもらえると、私としても嬉しいわ。そういえば、旅をしていると言っていたけれど、どこへ向かっているのかしら?」

その言葉を皮切りに、銀閣の旅の目的やその理由(ワケ)そして、趙雲達との馴れ初めなどを聞き、趙雲を始めとする皆との関わり合いなどを詳しく聞いていくのであった。

面白おかしく、時にはやや行き過ぎたスキンシップを交えつつ、話すその様子は、皆の心の距離を少し縮めることができた…と感じるに十分だった。

「そうなの…いい出会いをしたのね。ん?なら……趙雲殿たちと出会う前はどうしていたの?」

「もちろん、1人で旅をしていました」

「な!なんですって!」

叫び声をあげたのは曹操ではない、床に正座し、一言たりとも聞き漏らすまいと聞き耳を立てていた荀?であった。
男に全く興味を示さない（性的に）曹操がいつになく話を続ける少年：銀閣に何か探るべく事があるのかという思いから…であるのだが、その語られる内容についつい驚いたのだ。

この時代、当然のように荒れる風紀と秩序。
村から村、街から街への街道や峠などには“賊”と呼ばれる荒くれ者どもが現れ、食料や金品、そして身体や命すら奪い去る。
官軍や討伐隊などが駆逐していくが、賊が発生する根本が正されない以上、キリがなく商人や旅人は護衛を雇い、安全を金で買い旅をするのが常識となっていた。
一人旅をする者といえば、腕に自信がある者か…もしくは、巷の物騒さを知らない世間知らずだけである。

「あんたね！この陳留郡は華琳（かりん）様の統治で賊が少ないからいいものの、他の土地なんて酷いものなんだから！なのに、あんたみたいな…かわい…いや、少年が一人旅だなんて自殺行為だわ！」

いつになく真剣にそう叫ぶ荀?に、じぃぃぃぃっとした眼差しの郭嘉がいたのだが気付いた者は程立のみ。
銀閣としても、そのこと自体は概（おおむ）ね理解していたし、元の姿に戻れば無問題なので気にしていなかったのであるが、確かに知らぬ者にすれば大問題だろう。

「荀?殿……仕方ないのですよ、銀閣君は……父上を旅の途中で亡くされて……天涯孤独の上に、帰る所も・・・ああ、なんて可哀想

な銀閣君……大丈夫ですよ～銀閣君には、風(ふう)がいますからね」

そう言って、ぎゅぅ～と抱きしめる程立を『くっ、美味しいところを持って行かれた！』的な視線で見ていた者が約数名……もちろん、黙ってそのままにしておくはずがない。

酒が入っているせいもあるのだろうか……趙雲も、郭嘉も、徐庶も、言葉を掛けては……抱きしめていく。

逃げ場のない恥ずかしさで、嫌な汗をかく銀閣の背中では、口元を少し吊り上げている程立が居たが、誰も気付かなかった。

（逃がしませんよ～銀閣君）

そして、実は、お情け頂戴話に人一倍弱い……本人は自覚ないのであるが……猫耳軍師は、すくっと立ち上がるとズカズカと銀閣に歩み寄った。

「あんた！身寄りがなくて…もし、もしよ？どうしても困ったことがあると言うんなら、予州の潁川郡に行きなさい！私の名を出せば“荀家”が力になってくれるから。べ、別に私はどちらでもいいんだけど、知の者が集うところだから…あんたの病の手がかりがあるかも……って、何もあんたの境遇に同情してるわけじゃないんだから！……なによ、そんな驚いた顔しなくてもいいじゃない！」

余りに一方的な発言もそうだが、その内容にも驚く。

確かに銀閣の話しを聞けば、その境遇（嘘や誇大表現も混ざってます）に憐憫を感じてもおかしくはないが、そこまでの厚遇を与える

理由にはならないだろう。
現に、主人である曹操や傍らにて正座する北郷もあんぐりとした顔で荀?を見ているのだから。

「な、なによ!私は荀?文若、予州においては、“神君が八龍”の娘と言われる女よ!祖父の名に誓って嘘は言わないわ!だから……その証しに……これを持っていきなさいよ。それと……私の真名は、桂花(けいふぁ)よ!いいこと?二度は言わないからね!」

時間が止まったかのような空間にて、そういって真名を預けた荀?は、左手首から銀製の輪を外すと…そのままそれを銀閣の左手首に装着させた。
その顔が恥ずかしそうに……やや赤みがかっていたのは……見間違いであろうか。

「桂花(けいふぁ)……?あなたいったい……」

驚きのあまり…それだけしか言葉に出せない曹操の思いは…ここにいる皆の心境を代弁していると言ってもよかった。
そう、この荀?も仕える主人:曹操と同じく男に興味が無い…というか、ゴミのように嫌っていると言った方が正解である。
そんな荀?が自ら、少年とはいえ男に真名を預けるなどと……あり得ないものを見た……そんな顔をしている。

「えっ、か、華琳(かりん)様!こ、これは、その……贖罪(しょくざい)!　そう贖罪なん

です！今回の件は私にも原因がありますから、それを少しでも雪ぐことができれば……と、それだけなんです。深い意味はないんです」

やや、どもりながらも…それらしいことを言ってのける辺り、流石は軍師といえるのか？どうかはわからないが、取り敢えず納得出来ないこともない。

だが、真名を預かるとき…曹操に命じられて嫌々預へていたと…記憶に新しい北郷は、なんだか切ない気持ちになっていたが…その心境は誰にも気付いて貰えなかった。

「流石は噂に名高い荀？殿……侮れませんね」

小さな声だったために他の者には聞こえていなかったが、“黒化”した郭嘉の呟きは、新たに出現したライバルへの認知だったのかもしれなかった。

冷ややかな眼差しを眼鏡で隠し、じっと見ているその姿は冷徹な女であり、軍師の顔をしていたのだから。

16話（後書き）

・・・・・・・・・・・・・・・

楽しんでいただけると嬉しいです。

17話

・・・・・・・・・・・・・・・

楽しい時間はあっという間に過ぎ去り、宴会は終盤にさしかかる。
そして、真名預けた荀?に倣い、曹操も夏侯惇も本郷もそれぞれに真名を預けたのだった。
ただ、天の御使いである北郷には、元々真名というものがないらしく『一刀と呼んでくれ』と言っていたのであるが。

では自分たちも…と言う趙雲達を押しとどめ、それは今度再び会うときに…ということとなった。
何故なら、それは礼を欠いた贖罪の意味も込めてのことであったからだ。

「もし、貴方達が私の元で活躍の場を求めるならば、いつでも大歓迎よ。だから、いつでも私の街に来なさい」

太守自らの勧誘という栄誉を授かりながらも、皆その場での即答は避けるようにし、感謝の意を告げるに留めた。
その際、郭嘉と程立は目配せをしていたが、その真意は二人にしかわからない。
しかし、自分たちが望む未来への歩みを、自ら選ぶべき分岐点に立たされたことには違いない。
最後に、それぞれが再会を約束しあい解散の運びとなった。

何時間そこにいたのか……店を出ると太陽はすでに落ちており、月明かりを頼りに宿へと帰る一行であった。
途中で徐庶と別れ、もうすぐ到着というところで郭嘉は……勇気を振り絞る。

「銀閣……お風呂が終わったら、あの場所に来て」

誰にも知られぬよう、耳元で囁き……それだけ言うと真っ先に宿へと入っていくのだった。
なにやら思い詰めているような…そんな気がした……銀閣もそれを察知し、自分を見失うことが無いようにするべきだな…と心の帯を締め直すのだった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

雲一つない夜空は、何処までも高く、大きく見える月もまた…近いような錯覚を受ける。
風呂上がりの夜衣に着替えた銀閣は、綺麗に輝く月を肴に杯を傾けていた。

「待たせてすみません……風(ふう)の目を誤魔化すのに手間取りまして」

現れた郭嘉も風呂上がりなのか、いつもは纏めている髪を下ろしたままにしているせいか……印象が違うように見える。

走ってきたのか…少し上気した顔が桃色に染まっていた。

「で……話したいことがあるんだな？」

銀閣は杯を置き、向き合うようにジッと郭嘉を見つめる。
月明かりしかない暗がりのため、細かな表情はわかりずらいが……
何か思いを秘めていることぐらいは察知している。

「話しとは……これからの事です。」

真剣な眼差しで見られながら、一体何を聞かれることとなるのか…
小さな不安は胸にあるが、それでも応えられることならという思いはある……が、それも自分の手が届く範囲なら…という限定だ。
少しの間……ジッと見つめ合う二人であるが、ギュッと拳を握り郭嘉は言葉を紡ぐ。

「率直に聞きます。銀閣……あなたこの先……どうしますか？」

「ん？どうする……とは？」

「そ、その、私…達は、天の御使い様に会うという目的を果たしましたし、曹操様にも既知を得ました。風や星が…どう考えているかはわかりませんが、この旅も岐路にある…と私は思ったのです」

「なるほど……確かに」

「それで……銀閣は、この先…何処へ向かい、何を成そうと思っていますか？」

郭嘉の言葉を聞き……銀閣は、頭の中を整理する。
この世界において、己が果さねばならぬ使命とはなんであるかを。
だが、此処に来て1ヶ月、掴んだものは多くない。

「オレ……か、そうだなぁ…まぁ当初の目的通り、この身体を元に戻す方法を探す…だな。取り敢えずは、漢中って所に行く…かな」

「漢中……ですか？」

「ああ、老師がさ、漢中に何か手がかりがあるかもしれねぇ…と、教えてくれたんでな」

「そうですか……漢中……」

「まぁ、一直線にそこに向かうわけじゃねぇ。取り敢えずの目的地って所だな」

「……わかりました。それと、もう一つ……もし、もしですよ？この国の混乱をどうにかできる力が手に入ったとしたら……銀閣はこの国に居続けますか？」

「……ない」

「ええ？即答！？」

「いや、わからない…だ」

「そ、そうですか…そうですよね、先のことなど…わかりませんからね（でも、可能性がないわけじゃない）」

「ただ、オレが帰れない理由ができれば…当然、この国に居座ることになるだろう…な」

「な！なふほど！そうですか！帰れない理由ですね！ふむ、理由……（よし、理由理由っと）」

目を反らさず、見つめ合ったままであるが銀閣の表情は“何を言っているんだ”というのが読みとれた。

どこか……そう……やれやれ……そんな感じである。

どこか挙動不審な郭嘉を怪しそうに見ながらも、自分の事を心配しくれているという事実は、ちょっと嬉しかったりした。

だが、このまま…いつまでも一緒にはいられないということも事実だと自覚する。

銀閣には銀閣の、彼女たちには彼女たちの…生き方や目標、夢や将来設計があるはずだから。

郭嘉がこんな話を切り出すということは、そろそろ潮時なのだ…いつまでも彼女達に甘えているわけにもいかない…そう思うことは自然であった。

「稟（りん）ねんさんは、どうするんだい？」

銀閣からの言葉に、ハッと意識を戻し、その意図を考える。
今は二人っきり、そして自分の進むべき先についての質問。

（まっ、まさか！）

「凛ねえさん……まさか、オレの傍から居なくなるなんて言わないよな！」

「え？そ、それってどういう……」

「すまない……だが、気づいてしまったんだ！」

「も、もしかして……銀閣…あなた……」

「ああ、こんな一方的な想いを抱いちまうなんて…俺らしくもない…だけどな…いや、これはオレの我侭だ…すまない、聞かなかったことにしてくれ……」

「言って銀閣！私だって…あなたに伝えたいことがあるの…でも、銀閣の気持ちを先に教えて欲しい…だから、お願い…こっちを向いて」

「凛ねえさん……」

「二人っきりの時は、凛って呼んで欲しい」

「凛……オレ、凛のことが、す……」

「す？」

「す……」

「す？」

「す、好きなんだ！」

「ぎ、銀閣…ありがとう…私も…あなたのこと大好きよ！」

「凜！」

「銀閣！！」

（……という展開になり、更に燃え上がった二人はそのまま……）

ぶしゅうぅぅぅぅぅぅ

「おい！凜ねえさん！なんで突然鼻血を！」

慌てる銀閣は、目の前で…いつにも増して…勢いよく鼻血を噴出す郭嘉におろおろしてしまうのであったが、出来上がっていく血溜りに手遅れなのでは……と呆然としてしまう。

「やれやれ、凜ちゃんも、まだまだですね～」

どこから現れたのか、いつのまにか…目の前に程立が飴を舐めながら立っており、『は～い、凜ちゃん、トントンしましょうね～』と郭嘉の介抱をしだした。
ふごふご…と鼻に詰め物をされていく郭嘉の姿には苦笑するしかないが…あれだけ鼻血をだしながらも平気なことに愕然としていた。

「凜ちゃんの鼻血は心の汗。妄想力の賜物…乙女の秘密…いわゆる、女体の神秘というわけなのですよ～」

程立のわけのわからない説明はさておき、いつからそこに居たのかが……気になるところである。
“凜ちゃんの行動は、風にはお見通しなのですよ”そんなしたり顔の程立は、銀閣に向き合うといつもとは違う真剣な眼差しで見あげるのだった。

「風も、凜ちゃんも、この大陸での混乱を鎮め、平和で秩序ある国への手助けに自分達の力を使いたい…風達の智謀を必要としてくれる方の下で力を使いたい…そう強く願い旅を続けてきたのですよ…そして、今日、曹操殿、北郷殿に会うことが出来た…言葉も交わした…既知も得たのです。曹操殿は噂どうりの方だったのです…正に風達が望んでいた理想の方でした。だから、だからこそ、風は迷っています。思い描いた理想のために生きる道が正しいのか、心の奥に芽生えた感情に正直に生きる道が正しいのか……ここにきても

…まだ…結論がだせません」

必死に、真剣に、程立は言葉を銀閣に向けて精一杯吐き出した。
そして、その隣では郭嘉も同じ気持ちなのか…共に銀閣を熱く見つめている。
そんな二人の気持ちが何を指し、何を求めているのか…それがわからないほど鈍感ではない…だが、その全てに応えることはできないと考えていた。

何故なら、自分は、本来…この歴史の中にはいないはずの人間…なのだから。

とは思いながら、ここに今いる自分も…確かに宇練銀閣そのものであることは間違いなく、これが夢の中なのか、現実なのか判断がつかないと楽観視していたが、本当にこのまま“自分の知っている歴史”を大いに歪ませてよいものかどうかという判断ができないでいた。
しかし、冷静に考えれば、自分の知る歴史での偉人達が“女の子”になっている時点で手遅れなのではないか…そう思う自分もいるわけで、結局のところ…深く考えても詮無い事だと結論つけた。
ならば、自分の今までの行き方を貫き通すべきである。

「オレはよ…目に映る範囲でしか見えねえし、この刀で切れる範囲でしか守れねえ、加えるなら、手の届く範囲の人間しか幸せにできねえ。それだけで十分だ…と思ってる小せえ男なんだ……だから、目に付く人間全て、この国の人間全てを幸せにしてやろう…なんて気概は…持ち合わせてねえんだ」

つまり銀閣は“あんたたちの追いかける理想には付いていけない”そう言っているのだ。
だから、自分には構わずに、信じるべき理想を追いかけろ…と。
当然、銀閣の言葉でそれを理解できない郭嘉・程立ではなく…本当の意味での決断を下す時がやってきたということだった。

「銀閣君はイケズなのです……なら、風は…一刻も早くこの国に平和をもたらし、銀閣君と…お昼寝三昧ができる…そんな居場所を作る為に……曹操殿に…仕えることにするのです」

「え？風…本当にそれでいいの？私に遠慮しなくてもいいのよ？」

「いいえ、稟ちゃんも本当は決めていたんじゃないですか？」

「あ、うん…迷ってたけど、でも、初心を棄てたら一生後悔しちゃうんじゃないかって…だから、私、この国の為にできることを精一杯やろうって……決めたわ！ありがとう風」

抱き合う二人が、己の行くべき道を決めたこと……それは嬉しかったが、少し寂しくなるな…と心の奥で感じた銀閣であった。

17話（後書き）

・・・・・・・・・・・・・・・

戦乱の世に飛び出して・・・どうなることやら。

18話

・・・・・・・・・・

「名残惜しいが……ココでお別れだな」

街を出た者達は、街道の分かれ道で最後の言葉を交わす。
ある者は西へ、ある者は北へ。
出会いがあれば、別れがある。
始まりがあれば、終わりがある。

「また会う時を楽しみにしている……その時には、もっと強くなっているからな！では、さらばだ」

後ろ髪引かれる想いを断ち切るように、馬に活を入れ……駈けていく趙雲の背中を見つめ、それが見えなくなるまで見送った。

（星(せい)ねえさん、あんたから受けた借りは、いずれ返すからな……それまで元気で居ろよ！）

言葉にして伝えれば良いのに、銀閣はそれをしなかった。
だが、無言でも伝わるものもある……故に、それを飲み込む。
その思いを自分の心と1つにする為に。

“このままでは決心が鈍る”そう言い出した趙雲に促され、出発を決めた一行。

郭嘉と程立は、曹操の下で智謀を振るうことを決め。
趙雲は、北の太守である公孫?や袁紹を見て回るといい。
銀閣は、当初の目的のために、漢中を目指すことにした。

皆が自分の想いと向き合いながらも、己が描いた希望と信念の為…
…道を選んだ。

結局、ついてくることを拒みきれなかった徐庶が用意した荷馬車に、水や食料を積み込み、曹操から贈られた馬を繋ぎ、旅の準備を整えた。
皆で最後の昼食をとりながら、己の夢と目標を誓い合った後、再会を約束し、それぞれが席をたつ。
程立は“風(ふう)は湿っぽいのは嫌いですから”と、皆よりも先に宿を発ち、途中の街道までは……と趙雲は馬を並べた。

「私は、華琳(かりん)様たちと一緒にこの街を出ますので……皆さん、お元気で!それと……銀閣君?浮気はダメですからね?」

笑顔で郭嘉はそう言うと街の中へ消えた……背を向けたその顔に

は決心が、胸の中には切なさが。
寂しいのは皆同じ……だが、それに甘えていては何も始まらない。
銀閣は郭嘉の言葉に怯えながらも、“この先にある戦国の荒波に巻き込まれぬようにしよう”と強く思い、“三国志に主な登場人物にこれ以上出会わないようにしよう”……という方針?も胸に秘め一時の間であるが、世話になった街の門を出たのだった。

街道で趙雲と別れると徐庶は御者に徹し、少年姿の銀閣は荷台でひっくり返った。
高く、どこまでも高く広がった青空を眺めながら、自分が異国へ来たことを我ながら思い出し、母国の空を思い出そうとした。
次の街まではまだ遠く、今晩は野宿を予定しているからか、急ぐという要素はどこのもない。
ゆっくりとはしているが馬の歩く速度である、人が歩くよりもずっと早い、ましてや今は何もすることがないといっても過言ではない……だからこそ、銀閣は荷台にひっくり返っているのであるが。

暫くすると、銀閣は違和感を感じた。
微妙に感じるのだ……人の気配を。
不自然に成らぬように気遣いながら、辺りをチラリ……チラリと目を走らせる。
しかし、辺りは見晴らしのよい平野……遠目には林や森も見えるが、まさかそんな所からこちらを伺ってることもあるまい。
馬の速度は変わらぬが、感じる気配も同じように感じる……まるで、追跡されている……いや、すぐ近くで監視されているような?
そんな感じだ。

右を見る……よし、異常なし。
左を見る……よし、問題なし。

空を見る……よし、鳥すら飛んでいない。
後ろを見る……よし、追跡者なし。

ならば、残りは下か！と荷台の下へと覗き込むが、車輪が回っているだけで何も問題はなかった。
おかしい……だが、一度感じた違和感は、なかなか拭えないモノ。
突然身に付いた霊感や超能力があるわけでなし、まさか宇宙からの……と訳のわからないことを妄想し出すのであるが、ここにきて一計を案じた銀閣は、敢えて“隙”を見せるように……御者をしている徐庶の隣へと移動すると、その太股に手のひらを乗せた。

「あ！？ぎ、銀閣様！な、ま、まだ陽が高いですのに……い、いえ、別に嫌とかそう言うわけではなくてですね、その、いきなりだったもので、心の準備ができていないといいましょうか……」

いつものクールさは何処へ？と言った具合のテンパリ模様であったため、逆に銀閣のほうがドキマギしてしまう。
だが、そんなこととは露知らず、第三者的にみれば“これからイチャこいちゃいます”と見えるわけで、そんなことは……

「ちょっと待ちねえお二人さん！それ以上のイチャコイは……あっ、お天道様が許しても、この、宝慧さまは許しちゃおけねえな！」

荷台にある大きな瓶の口から……“にゅっ”と顔？を出した宝慧が銀閣達に待ったをかけた。
当然……声は瓶の中から聞こえるわけで……

「これ宝慧！これからがいいとこだったのに、声を出しては気付かれて仕舞うではないですか」

といった小言？も同じく瓶から……

驚き半分、確信半分といった感じで、銀閣は宝慧と“正体不明の声の主”に向かって言葉をかける。

「風ねえさん……曹操殿の元へ行ったのではなかったのですか？」

銀閣が声のする瓶の前に移動し“コンコン”とノックをすると、中から“入ってます”と返事があるのみ。

しょうのない人だ……ならば出てくるように仕向ければいいわけで。

「雫さん……気のせいでした……風ねえさんの声が聞こえたような気がしたんですけどね。あはは、未練ですよね……すっぱりと忘れないと！」

「ひ、酷いです銀閣君！」

海老に釣られた鯛のように、瓶の中で立ち上がり顔をだした程立は“しまった”といった表情になり……また、瓶に入り込む……ひょこひょこと動く宝慧の姿が微笑ましい。

「風さん……瓶の中が好きなら止めませんが、この振動で瓶の中……しんどいでしょう？さっさと出てきた方が身のためですよ？」

徐庶に言われたように辛かったのか、“そこまでいうのなら吝かでない”といった顔でいそいそと這い出てきた……若干顔が赤いのではあるが。

やれやれ……といった具合で銀閣がそれを手伝うと程立はおもいっきり抱きつき、勢い余って荷台に転がった。

「風は……風は、銀閣君のことが好きなのです！だから、やっぱり一緒に行くことにしたんです」

真っ赤になりながら、思いの丈を銀閣にぶつける程立がヤケに可愛く感じられた銀閣は、オレもちぃーとばっかり箍が緩んできたのかもな……そんな思いが沸き上がるが、誰にも言うまいとも思った。

それよりも、郭嘉はどうしたのか？曹操殿に対しても良かったのか？などと問いつめていくのであるが……

「ふっ、敵を欺くには、まず味方から……基本なのですよ～」

とニヤリ顔で宣う程立がそこにいた。

（誰が敵で、誰が味方だってんだ……）

そして、その頃……

「おかしいわね……どこにいったのかしら……あっ華琳様！」

銀閣たちを見送った郭嘉は、曹操たちの宿舎へと到着したのだが……先に向ったはずの程立の姿が見当たらすキョロキョロしているところで曹操に出会ったのだった。

「あら、郭嘉……あなたがココに来たということは、期待してもいいのかしら？」

「はい、華琳様の下でこの智謀を役立てたいと思います。どうか、私のことは稟、と呼んで下さい。」

曹操への仕官を果した郭嘉は真名を預けるのであったが……。

「あら、郭嘉殿、あなた宛に手紙を預かっているわよ？」

奥から出てきた荀？が懐から竹簡を出し、それを郭嘉に手渡す。訝しげに渡された竹簡を開くと、見たことのある筆跡に……嫌な予感を感じたが、急ぎ文字を目で追う。

読み終わった郭嘉は、ワナワナと震えたかと思うと手にした竹簡を叩きつけ……

「もう、風(ふう)ったら……仕方の無い子ね……なんて言うと思ったかぁ！今度会ったら憶えてなさいよ！」

黒い何かを背に纏い、ガシガシと竹簡を踏みつける郭嘉を見て、怒らせることはすまい…と感じた荀?だった。

『稟(りん)ちゃんへ、ごめんなさいです。風(ふう)は愛に生きることにしました…いえ、半分冗談ですが。銀閣君にこれ以上悪い虫が付かないように、雫(しずく)ちゃんが暴走しないように、風(ふう)が監視役を引き受けました…本当は嫌だったんですけど～仕方ないですね～テヘペロ。定期的に報告書は送りますので、淑女同盟は継続なのです。曹操殿のもとで余り鼻血を出さないように、妄想にはくれぐれも気をつけてください……あなたの親友より』

策謀の士たちの戦いは既に始まっていたようであった……。

１８話（後書き）

・・・・・・・・・・

すみません、ちとリアル事情で投稿が遅れそうです。
毎日見ていただいている皆さん、申し訳ないです。

１９話

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「どうしてこうなった………」

補給と宿を求め立ち寄った村で目的と達した後、マイペースで旅を続行してた銀閣一行。
兌州を抜け、予州に入ると同時に山賊や黄巾賊が急激に増え、馬車での移動が目立つのも合わさってなのか襲撃を受ける頻度も増大。
宴会の席での荀？の言葉が真実であったという証拠であるのだが、銀閣にとっては慰みにもならない。

「いったい……どこから湧いて出てくるんだ！」

ただの賊にどうこうされる一行でもないのだが、こう襲撃が多くては旅の情緒が感じられないのは勿論のこと、おちおちと昼寝してられない。
治安が悪いどころではない、まったく……やれやれだぜ……そんな銀閣のそばでは、徐庶と程立は別の意味で困っていた。

「こうも戦利品が多いと………荷台に乗り切らなくなるのも時間の問題ですね」

「そうなのです。粗悪品も多いと思いますが～それでも売ればいくらかにはなるのですよ～」

賊を返り討ちにする際、“武器や防具の類を極力斬らないように”と注文とつけられた銀閣は、めんどくさそうにしながらも……正確無比の居合い斬りでその要望に応えているのだが。

旅の路銀を稼ぐためとはいえ、なんともおかしなことになってきた。

追いはぎみたいで嫌だという銀閣の意見は……

「旅にはお金がかかるのです。そしてこれは物資の有効利用なのです。世界のためなのです」

という…なんちゃってエコロジストな程立の言葉により却下され、賊を倒したら、武器や防具、装備品やその他もろもろ売れそうなモノは全て回収することとなった。

賊の数が増えれば、当然それらも増えていく……そして、その荷台を見た賊がさらに集まる……そんな循環ができつつあるのだ。

早く少し大きな街に立ち寄り、売りさばいてしまいところであるが……そう言う時に限ってなかなか街が見つからないものである。

それからも、出会うべくして出会ってしまった賊達を全て葬りさり……治安維持に貢献したとも言えなくはない状況が何回か繰り返されたのだった。

パンパンになった荷台……戦利品を山積みし縄で縛ってあるが故

に、本来そこにあるべき人達はトボトボと歩く嵌めになっていた。
何かおかしい……何か間違っている……そう思うが、皮算用にてホクホク顔の程立を見ると、何も言えなくなってしまう銀閣なのである。

「銀閣様、風さん、ほら……陳の街が見えてきましたよ」

襲撃がめんどくさくなった（荷台にこれ以上乗せられなくなった為ともいう）一行は、遠回りで身を隠しながらの移動で予州の街…陳まで辿り着いたのだった。
街にはいると、早速…目を輝かした二人の乙女達は、己が持つ知謀と交渉術を駆使し、荷台にある戦利品を捌ききった。
戦国の世である…粗悪品でも武具の類は良い値で売れるらしい。
満たされた笑みで、ホクホク顔の二人を尻目に、やつれた表情の銀閣がそこにいた。

「雫ちゃん～なかなか良い仕事でしたね～懐が嬉しい重みでズッシリなのですよ～」

「そうね、風さん。久しぶりに良い宿に泊まれそうですね。ふふふ……」

世の中……金の力は偉大だな…としみじみと感じたが、その恩恵には肖れそうなので黙って二人の後をついて行くのだった。
濡れ手に粟ともいえる稼ぎを祝おうと、酒場へと出向いた三人は欲望の赴くままに注文すると祝杯をあげる。

上等とは言えないが、それでもお金の心配をすることなく飲み食いできるというのは……幸せであるのだから。
食事と酒が進む中、隣の席から男達の声が銀閣達の興味を引いていた……

「聞いたか？あの噂…」
「おう、聞いた聞いた！だがよぉ本当なのかぁ？」
「俺もそう思ったんだよ、親方の知り合いが言ってた話しだしよぉ……俺は本当だと思うぜ？」
「だが、直接見たって奴は賊なんだろ？信用できねえなぁ～」
「確かにな……にしてもだ……」

酔っているのだろう、話はドンドン逸れるいくのであるが、要約するとこうだ。
山賊や黄巾賊を狩りまくっている者がいるらしく、その者が通りすぎた後には斬り捨てられた残骸が残るばかりであるらしい。
しかも、その者は武器を振り回すこともなく、賊の前に立ちはだかった瞬間……斬られ絶命するというもの。
対峙した者は全て狩り獲られているのだが、奇跡的に襲撃に出遅れた賊の1人が遠目からその様子を盗み見ていたというのだ。
その様は、鬼神や仙人のようであったといい、乱れぬ銀黒の長髪と黒衣から『銀黒の鬼神』やら、仙術のよな戦いかたから『鎌鼬の仙人』などと呼ばれ噂されているとのこと。
性別はわからぬが、髪の長さからいって女であろう……とも言われているらしい。

「ぷっぷぷぷ……女ですと……それに鬼神って……くっくるしい

い～」

「あはははは…鬼神はねぇよなぁ～仙人とか…くっくっくっ…

……」

程立と銀閣はお腹と押さえながら笑い転げ、徐庶も口を押さえて笑いを堪えていた。

だが、このことが後々尾を引くとは……この時はまだ気づけなかったのも致し方のないことだった。

宿泊と食料品などの補給を終え、陳の街を出立した銀閣一行。

次は予州最西端の街…潁川へ向かい、そして荊州へ入る予定を立てていた。

粗方の賊を討伐してしまったからであろうか……以前ほどの頻度では襲われなくなり、皮算用が破れた程立はややガッカリしていたが、それでも少人数での馬車の移動は格好の標的となるらしく、程々?に稼いではいた。

そんな一行が順調に潁川の街へのルートを進めていると、いつもとは違う集団が近づいて来るのが視界に入った。

舞い上がる砂埃からすれば……千は優に超え、万も越えるかもしれない。

（厄介なことにならなきゃいいが……）

そんな銀閣の悪い予感というのは…悉く当たることを本人は自覚していないが…その集団は一定距離を置くと……そこから一騎のみが

こちらに駆け寄ってきた。
キチンとした身なりであり、後方に控える集団の統一された服装から察するに、官軍であろう。

「私は、左中郎将　皇甫（こうほ）　嵩（すう）様の副官、傅燮（ふしょう）と申す。その方たち、商人であるか？」

馬上からではあるが…名を名乗る男が口にした左中郎将　皇甫（こうほ）　嵩（すう）。
徐庶の知る限りでは、予州・荊州方面の黄巾賊討伐軍の司令官の名であり、漢の精鋭を率いる常勝将軍の名であった。

「何かご入り用でございますか？」

徐庶の丁寧な対応に気を良くしたのか、傅燮（ふしょう）は事情を話し出した。
立ち寄った村での食事を終え、出立したその後、皇甫（こうほ）　嵩（すう）が腹痛を訴え苦しみだしたというのだ。
生憎と薬の類は常備しておらず、商人なら…もしやと思い近寄ったと言うことであった。

食中毒か…食べ合わせか…兎に角、見てみないことにはわからない。
徐庶は自分を医学の携わる者であることを教え、薬はあるが症状を見ないことには、どの薬がよいか判断できないため患者の元へ案内して欲しいと伝えた。

厳（いか）つい官軍の犇（ひし）めく中、傅燮（ふしょう）に案内され皇甫（こうほ）　嵩（すう）の元へと案内された三人は、馬車の中で苦しんでいる女性と面会したのだった。
傅燮（ふしょう）立ち会いの下、食事の内容、量、日々の様子なのどを聞き出し、徐庶は患者の腹部を触診し、心拍・脈拍などを確認するのだが……

「銀閣様……この方の症状は……」

徐庶が迷ったように、程立の手によって目隠しされている銀閣に伺う。

腹部を見ていないが、話の内容から察するに“只の食べ過ぎによる腹痛”であることは明白。

しかし、それをそのまま伝えることが…この場合正しいのかどうか…という伺いであることは理解できた。

患者は、官軍の将軍、それも左中郎将であるし、ましてや妙齢の女性……言葉に気をつけなくては命にかかわるかもしれない。

以前、直接すぎる表現で伝えたところ、酷い目にあった経験があるからであるが……

「で、どうなのだ…この腹痛の原因は？」

うっ…と思いながらもそれは顔には出さない。

だが、相手は海千山千の将軍だ、ヘタな言い回しは逆効果かもしれない……銀閣はズバッと直球で説明を始めるのだった……

「その前に確認したいことがあり申す。飾らずにキチンとお答え願いたいがよろしいか？」

「うむ、わかった……」

「では……最近、便秘気味ですな？」

「な！……いや、はい」

「それで、今日の昼食には甘藍だけを食べましたな？」

「うっ……はい」

「それも大量に？」

「1玉半食べたが……たいした量ではあるまい？」

「いえ、食べ過ぎですな…しかも、生で食べたと見受けましたが？」

「う……その通りだ……」

「わかりました、では、このこの薬丸を服されよ。で、原因であるが、甘藍による繊維質の急激な過剰摂取が……」

胃腸薬を皇甫（こうほ）　嵩（すう）に飲ませ、いくら身体に良いとはいえ、生キャベツの食べ過ぎは腹痛の原因になり、十分な水分も同時に摂取せねば逆に腸の働きを疎外し、便秘の元凶にすら成り得るのだ……と説明をする。

暫くすると良くなるはずだから…安静に横になっているように…そう言って去ろうとした銀閣一行を傅燮（ふしょう）は引き留め、礼をするからと連れて行く。

副官に後を任せた皇甫（こうほ）　嵩（すう）は、ゴロリと横になりながら……包み隠さない説明と…症状から自分のことをズバリ当て仰せた銀閣を名のある医者であろうと勘違いしたと同時に、好奇心を感じていた。

さらに、副官とはいえ……傅燮（ふしょう）の前で恥ずかしい質問をした銀閣に何か意趣返しと、恩返しがができなものか…とも考えていたのだが、

それは後で考えるか……そうして眠りについたのだった。

１９話（後書き）

・・・・・・・・・・・・

ちと投稿遅くなりますが、頑張ってＵＰしていきます。

２０話

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「もう一度言ってくれ」

突然の勧告……というか命令？　一通り聞いた自分の耳を疑ったが故、再度…聞き直したが…やはり、理解が追いつかないことを言われた気がする。

「まぁ、そういうわけだ……あきらめろ」

「いや、わけがわからんのだが？」

「一度言ったことは梃子でも曲げない…そんな方なのだ。だから、もう一度言うが……あきらめろ」

そんなことで納得できるかぁ！……と叫びたいところであったが、目の前の相手…傅燮（ふしょう）に文句を言ったところでどうしようもないことは明白。
だからといって命令を出した本人に言ったとて結果は同じであろう事も理解はできた……が、それと納得できるかどうかは別物である。
左中郎将　皇甫（こうほ）　嵩（すう）、皇帝に絶対的な忠誠を誓う忠勇無双の士であり、常勝将軍との二つ名を持つ軍人。
漢軍の中でも上位の人間だ……しかし、その命令に〝はいそうですか〟と頷く必要は銀閣にはない。

ないが、共に旅をする程立と徐庶にとって皇甫嵩が持つ権力には逆らえないだろう。
つまるところ、二人に迷惑を掛けたくなければ従うしかないわけである。

（これは偶然か、必然か……）

結局、皇甫嵩の望む通りに、従うことにした……軍医として。

急ぎの旅でもなく、また提示された給金も魅力的であった、その他条件もなかなか優遇されていると言ってもいい。
条件交渉は、主に徐庶が取り仕切ったのであるが、銀閣の記憶通りに歴史が進むのであれば、黄巾の乱そのものが後数年で鎮圧されるはずである……つまり短期雇用で終わることがわかっているということだ……旅費を稼ぐという角度で考えれば、破格といってもいいだろう。
ただ問題なのは……漢軍（皇甫嵩直属）…に仕官という立場である。

三国志に係わる人物からは距離を置いて行動しよう…と思っていた途端この有様……。
この世界でいったい自分はどうすればよいのか……兎も角、今は与えられたことをこなす方が優先であることを思い返し、“あきらめる”ことにした銀閣であった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

うまくない……不味くはないが、うまくもない。

そんな軍用食を食べながら、これからの行動予定を皇甫嵩らから聞いている銀閣一行。
現在、黄巾賊は荊州方面と冀州方面にその勢力が拡大し、勢いは増すばかり。
そしてついに、黄巾賊の荊州勢が南陽を制圧、太守・?貢を殺し占拠し続け、その首領・張曼成は自らを「神上使」を称し他の街、城を攻める準備をしているらしい。

急遽、霊帝より左中郎将に任官された皇甫嵩は、予州・荊州方面軍の将軍として予州方面の黄巾賊は粗方片づけた。
そして、二万の精鋭もってこれから南陽奪回及び黄巾賊の殲滅を目指すべく進軍中だという。
また、右中郎将として任官された朱儁は時期を合わせ南陽を二万に軍勢で攻撃する作戦になっており、この二面攻撃で一気に予州・荊州方面の黄巾賊を葬り去る予定になっていた。

だが、ここに来てさらに膨れあがった黄巾賊は五万以上になったとの報告を受け、兗州・予州・荊州の太守、豪族への従軍を呼びかけてるらしい。
今のところ、女南の袁家、陳留の曹操からは出兵の連絡がきているが…総兵力数ではまだ不足なのだ。
しかし、そこは練度と策でカバーするしかない……良い策を決めあぐねている皇甫嵩がこうして銀閣らと食事をしているというわけだった。

「おい、お前達……策を出せ」

胃の調子も絶好調なのか、パクパクと食事を頬張りながら銀閣達に“そこの醤油取ってくれ”ぐらいの気軽さで話しかける皇甫嵩の言葉に、一瞬……箸と止めたが“ああ、冗談か”と思い再び食べ始める銀閣であったが、雇用主の目は笑っていなかった。

「冗談で言ってるわけではないぞ？」

「オレ達は軍医として雇われてる……だよな？」

「軍医が策を出してはならんと……誰が決めた？」

五万以上に膨れあがった黄巾賊に対し、皇甫嵩軍二万、朱儁軍二万、袁家軍より五千、曹操軍三千、合計四万八千。

練度や気合いで埋めるには差がありすぎた……だが、引くわけにも行かない。

ここで引けば、黄巾賊は更に増え、直接洛陽への侵攻を考えるようになるだろう。

冀州方面の黄巾賊には、北中郎将に任命された盧植があたっているが、あちらの戦績いかんによっては……漢という国そのものが崩壊することも考えられるのである。

西より攻める予定の朱儁軍が南陽に攻め込む前に、何らかの策によって黄巾賊軍を烏合の衆にしてしまのが望ましい。

故に、皇甫嵩は何か良い策がないかと……どこか確信めいた様に聞くのであった。

「えっと、僭越ながら私が。南陽は攻めるにも守るにも難しい土地

です。森や竹林も周りにはなく、伏兵なども置けない広大な平地が広がるところです。我々の存在を知れば、数に任せて押して出るくるでしょう。

ですからここは、朱儁(しゅしゅん)様の軍が、後方からトドメを刺す形に持っていくことが肝要と考えます。

私(わたくし)は、鋒矢(ほうし)の陣で正面から１５０００で突き、袁家軍・曹操軍は左右で待機ののち三包囲で攻撃した後、後詰めの５０００で敵本陣を一気に落とす策が良いかと」

唸りながら徐庶の策を聞く皇甫嵩(こうほすう)であるが、今ひとつなのか腕を組んだまま黙っている。基本に忠実な案であるが故にまた、消耗もまた激しいと予想できるからだ。

「風(ふう)は、魚鱗の陣１８０００でひと当てした後、左翼、右翼９０００づつに鋒矢(ほうし)陣で別れつつ突撃をしているところに、後詰めの１０００が波状にて突撃することで消耗度合いを軽減できると考えるのですよ」

程立の案でも、消耗戦であることに違いはないのであるが、最初の一撃が総力でのひと当てになるため、そこで大きくダメージを与えられれば、かなり有利に戦いを進められると考えられる。

皇甫嵩(こうほすう)、傅燮(ふしょう)、徐庶、程立……白熱する戦術論に盛り上がっているその横では、眠たそうな銀閣が興味なさそうに……アクビをしていた。

そして、決戦前日、女南　袁家から当主：袁術（えんじゅつ）と、その懐刀兼お守り役の張勲（ちょうくん）と紀霊（きれい）が５０００の兵を率いて駐屯地へ到着。
続いて、陳留の曹操が夏侯惇、荀？、そして北郷と共に３０００の兵を率いてやって来た。
その他豪族衆も総勢２０００が招集に応じてくれていた。

「良く来てくれた。応じてくれたこと、感謝する」

皇甫（こうほ）　嵩（すう）自ら、労いと感謝の言葉で皆を迎え入れる。
援軍の到着により、駐屯地の兵数は予定通りに達し、その熱気は冷めることなく将や兵たちの心を滾らせたのだった。
そして銀閣達はというと、駐屯地の奥、輜重部隊にその身を置き、友軍の勝利を祈りつつ……炊き出しの準備に狩り出されていた。

「銀閣く～ん、野菜をもっともっと刻んでほしいです～追加ですよ～全然追いつかないのですよ～」

己の愛刀は腰にあるが、手にする中華包丁で素早く野菜を……言われるがままに切り刻んでいく銀閣。
人手が足りないという輜重隊の声に、切るだけなら……と手伝い始めたのが運の尽き、今では、野菜の下ごしらえ（切断に限る）は全て銀閣の役目となっていた。

「今宵のシメサバ丸（中華包丁の銘らしい…）は……ひと味違うぜ！」

目にも留まらぬその技量で、山のようにあった白菜、人参、甘露、玉葱……全て切り刻まれていく。
そして、その切られた材料は…徐庶、程立、その他大勢の仲間達が次から次へと……巨大な鍋へと放りこんでいくのであった。
ぐつぐつ……と煮込まれた良い香りを放つそれ……“ちゃんこ鍋”ができあがると、配給を待つ兵士達の胃袋へと凄い速度で消えていく。
その日、２８０００を越える人間の食事を作ることが…どれだけの重労働であるか骨身に染みた銀閣達が、日々の食事に対するありがたさを実感していたりした。

「オレは……やっぱり食べる専門でいいや」

「おい兄さん、食べる専門だなんて、まさに鬼畜だな……」

「これこれ、宝慧、そんなことというと……風(ふう)たちも美味しく頂かれちゃうかもしれないのですよ……気をつけないといけないですね～」
（まぁ、それはそれで……かまわないのですが……）

「こら！知らない人が聞いたら勘違いするようなこたぁ言うな！」

全然……緊張感のない銀閣達だった。

２０話（後書き）

・・・・・・・・・・・・・・・

リアル都合で執筆速度は遅いですが、頑張ります。
楽しんでいただけると嬉しいです。

21話

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

『この国の1番になりたい』

この言葉が全ての始まり。
この言葉が全ての原動。
この言葉の実現させることが我が望み。

南陽の中心……政庁舎にある玉座の前で、1人の男が腕を組みながら右へ左へとうろうろしていた。
男の名は、張曼成(ちょうまんせい)…黄巾賊荊州軍の指導者であり、大賢良師・張角親衛隊のトップでもある。

「天和ちゃんの夢は、俺たちの夢！　こんなところで官軍に足止めを喰らうわけにはいかねえ！」

南陽を陥落して一息ついたのもつかの間、洛陽から派遣された官軍がこの地に迫ってきたとの情報を得たものの、元々商人の出でしかない張曼成に…軍人としての軍略や作戦を求めることは酷ともいえた。
しかし、夢を追いかける同志と共にこの地の足がかりを作った。
そして、この国に不満を持っている者、行き場のない者、喰って行

けない者なども集まり、親衛隊を含め総勢は…五万を越えた。
越えたが、夢を実現させるため、皆を養うためには攻め続けるしかない、つまり…奪えるところから奪うしかなのである。
それは許されることではないかもしれない…それでも、彼女たちには伏せてでも……官軍が持ちうるその食料……それを奪い獲り、荊州全域を黄巾賊のモノにしなければならない。

「波才は1万を率い官軍の左舷を、趙弘も同じく1万を率い右舷を、俺は残りの3万を率い正面から当たる。籠城なんて俺達にはできねえ……数で押し破るしかねえ……頼んだぜ」

張曼成は部下達にそう告げると、自らもその準備をするためにその場を去る。
波才、趙弘の両名も準備にするために急ぎ足でその後をついて行くのだった。
夢のため、信じるモノのため、自分たちの未来のために……全てを掛けるしかないことも男達は理解していた。

「「「全ては、天和ちゃんのために！」」」

翌朝、南陽の城壁に立ち、眼下に広がる同志達を張曼成は決意を秘めた目で見下ろす。
眼下に集まる者達……統一されていない服装、手に持つ武器も皆そ

れぞれである……だが、身体のどこかに巻いている黄色い布は皆同じものだ。
黄巾賊と呼ばれる所以（ゆえん）となったその布は、数え役満☆姉妹（シスターズ）の同志の証。
その同志達へ良く通る声で、その想いを熱く叫ぶ……

「皆！俺たちは仲間だ！同志だ！天和ちゃんを慕う馬鹿者共だ！お前達はこの国が、役人達が許せないかぁ！」

「「「「是的！是的！」」」」
「「「「是的！是的！」」」」

「この腐った国をぶっつぶし、誰にも奪われない国を作りたいかぁ！」

「「「「蒼天已死　？天當立　？在甲子　天下大吉」」」」
「「「「蒼天已死　？天當立　？在甲子　天下大吉」」」」

「よぉ～し！お前達は天和ちゃん達が大好きかぁ！」

「「「「ほんわ！ほんわ！」」」」
「「「「ほんわ！ほんわ！」」」」

「お前達は、天和ちゃん達を愛しているかぁ！」

「「「「ほんわ！ほんわ！」」」」

「「「ほんわ！ほんわ！」」」

「天和ちゃん達のために全力を出せるかぁ！」

「「「ほんわ！ほんわ！」」」
「「「ほんわ！ほんわ！」」」

「その想いがあれば！俺たちは超強い軍隊になれる！全軍突撃だぁ！官軍を叩きつぶせぇぇぇぇぇ！」

「「「ほんわぁぁぁぁぁぁ！！」」」

張曼成の号令のもと、南陽から出撃した黄巾賊……総勢５万の軍勢は、官軍目掛けて武器と想いを持ち突撃していくのだった。
その先にある……自分たちの未来を信じて……。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

与えられた天幕の中で、今回の討伐戦に対する行動作戦の詰めをしている曹操陣営。
勅命に従ったとはいえ、この戦働きでさらに“曹操”の名を高めたいという思惑持っていることは言うまでもない。
だからこそ、絶対にこの討伐戦で負けることは許されない……軍略の不備があれば容赦なく指摘し、自分や荀？の知略をもって勝利へ

の道を示すつもりであった。
だが、総司令官　皇甫　嵩の示した軍略は、少数精鋭である官軍の利と不利を客観的に分析した上で立案されたもので、曹操としても納得できるモノだった。

「流石は常勝将軍……皇甫　嵩ね……軍略に隙がないわ」

曹操の言葉に、頷きながら…万の軍勢を操る将軍の軍略に学ぶべきところ多く、今後の自軍営に役立つことは全て吸収しようと考える荀?の傍らで、思案気にしているのは天の御使いこと北郷。

「あんた!華琳様がお話して下さってるというのに、何考えてるのよ!ま…まさか、あんたもしや皇甫　嵩将軍に劣情を抱いたんじゃないでしょうね!きゃぁ～不潔!不潔よ!離れて!私から!華琳様から!百万歩離れなさい!この全身精液充満男!」

「落ち着けよ桂花……それに、俺は別に欲情してないから!」

騒ぎ出す荀?をなだめつつ、自分が何を考えていたのかを言葉を選びながら話し出す。
今回の軍議にて示された作戦……その全容からしても北郷が知る軍略と酷似……いや、それそのものであったのだ。
自分の先祖が使った戦法……とでも言うべき軍略が何故ここで示されたのかが気になって仕方がないらしい。

「あんたね!軍略、計略、その殆どは模倣から発展し、確立されて

いくものなのよ！完全なる独自性を持った発明なんてね、私や華琳（かりん）様のような超優秀な頭脳を持ってして初めて成し得るものなの！だから、あんたが未来？で知ったその戦い方も、元を辿れば誰かの模倣に繋がるのよ！わかった？あんたの精液まみれの頭脳じゃ理解なんて出来ないでしょうけどね！」

相変わらず辛辣な荀？の言葉に凹みながらも、流石中国４０００年……歴史の重みが違うんだな……と１人で納得していた北郷であった。

ただ、北郷の話した内容に少し、ほんのわずかではあるが…何か引っかかるモノを感じた者がそこにいたが、別の話題に移ったときには…感じた違和感はすっかりと消え失せていたのだった。

また、別の天幕では……

「七乃（ななの）～疲れたのじゃぁ～もう帰りたいのじゃぁ～」

金髪の美少女……女南　袁家の当主：袁術（えんじゅつ）は、足をバタバタさせながら守り役である張勲（ちょうくん）（真名は七乃らしい）に我が儘を言っていた。その傍らでは、“やれやれ”といった表情の袁術配下の将　紀霊（きれい）が畏まっており、知るものが見ればそれは袁家での日常的な縮図がそこにあった。

「もう、お嬢様ったら～私たちは勅命でここに来てるんですよ～何

もしないで帰っちゃったら……」

「……か、帰っちゃったら……どうなるのじゃ？」

興味半分、恐れ半分で疑問をする袁術に……表情を消した張勲が、立てた親指で首を掻き切る仕草をする……そう首チョンパ的なことを示唆していた。

「いやなのじゃぁ～首チョンパはいやなのじゃぁ～痛いのはいやじゃぁ～」

「あらあら、お嬢様ったら～首を切るなんて一瞬ですから～痛みを感じる暇なんてありませんよ～」

「ん？そうなのか？痛くないのか？」

「ええ、本当ですよ～ただ……」

「ただ？」

「ええ、ただ…時々…剣が～首の骨に引っかかって～ブシュゥゥ～って血が噴き出しながら、死にそうに痛い思いをすることもあるとか～」

「いやじゃ～痛いのはいやじゃ～」

「なら仕方ないですね、ちゃんと勅命に従いましょうね～わかりましたか？」

「うむ、わかったのじゃ……」

恐がり、涙目で嫌がる袁術を嬉しそうに諭す張勲は“ああ…お嬢様…なんて可愛いのかしら”とワザと怖がらせた自分のことなど棚に上げつつ至福の想いに包まれていた。

「じゃが、妾(わらわ)は戦(いくさ)などに出とうないぞ」

勅命に従うと言いながら、自分の欲望に正直な袁術を“もう～なんて自分に正直なの～可愛すぎます～”とニコニコしながらも、傍らに控える男を見ながら諭すように話しかける。

「大丈夫ですよ～そのために紀霊さんに従軍してもらってるんですから～私たちは、後ろの方で見物してましょうね～」

「そうですぞ、この紀霊、お嬢様の手を煩わせることなど致しません。安心して督戦していて下され」

「そうか、なら安心じゃの～安心したら喉が渇いたのじゃ……七乃～蜂蜜水が飲みたいのじゃ～」

“もう、困ったお嬢様”と想いながらも、全然困った素振りはせずに…甲斐甲斐しく袁術の世話を焼く張勲が天幕の中で動き回っていた。

夜が明ける頃には……黄巾賊との戦いが始まるとは思えないほど、和んだ空気がそこにはあった。

「七乃～お代わりじゃ！」

２１話（後書き）

・・・・・・・・・・・・・・・

少しずつではありますが、更新していきますので宜しくお願い致します。

22話

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

南から攻めるは、張曼成（ちょうまんせい）率いる…黄巾賊約5万。
北から攻めるは、皇甫（こうほ）　嵩（すう）率いる…官軍約3万。

「漢の精鋭達よ！今こそ、国の根底を乱そうとする悪しき者達を打ち倒すのだ！戦いは数じゃない！心が持っている高き誇り、強き想いが勝敗を決する！皆の心を1つにすれば倒せぬ敵など、この世にはおらぬ！行くぞ者ども！己の生き様を見せつけてみろ！全軍突撃ぃぃぃぃぃぃ！」

皇甫　嵩の号令が発せられ、官軍はまるで生き物のように動きだす。

黄巾賊は魚鱗の陣を敷き、官軍は鋒矢（ほうし）の陣で駆けだした。
夜明けと共に、檄を飛ばした両軍は激突し、その瞬間数多（あまた）の命が失われた。
そのまま数に任せた…力押しの消耗戦が続くと思われたその時、崩れた先鋒集団が逃走を始め…それに倣うようにその後方に続く者達も全力に逃げ出し始める。
我も我もと反転し、全力疾走しているのは傅燮（ふしょう）率いる官軍先鋒隊5000。
魚に突き刺さる銛（もり）のように突撃した先鋒隊は、突進し続ける力を失い、壊走する。

「退けぇ～退けぇ～後退し立て直す！退くのだぁ～」

部隊長達の怒号を聞いた兵士達は、黄巾賊の攻撃をかわし、息の続く限り走り続けた。

そして、当然のように勝機と見た黄巾賊が逃げまどう兵士達を追いかける……しかし、もとより統制の執れた軍でないため、勢いはあるが陣としては乱れた横陣になりうつあった。

５万もの人間が敵を追いかけ走り出すのだ…その勢いは凄まじく、また、追いかけられれば逃げたくなるもの。

時間が経つに連れ…敵を殺すことよりも、追いかけることに目的がすり替わり、盛大な命をかけた“追いかけっこ”がここに展開されたのだった。

陣後方より指揮をとっていた張曼成には、元より万の軍勢を率いる能力などない。

それでも、今…目の前で起きていることが異常事態である事ぐらいは察していた。

「止まれ！止まるんだ！止まれぇぇぇぇぇぇぇ！」

しかし、目の前の同志が駆けだしていくと……“自分も駆け出さねばならぬのではないか”という疑念に駆られ、黄巾の兵士達は、また１人…また１人と誘われるように駆け出していくのだった。

停止を告げる怒号は掻き消され、気がつけば皆が走り出している…

…そんな異様な光景が展開されていく。

ただ、目の前の人間が走っていくから…それに着いていく…その連鎖。
それが、5万に規模で行われたに過ぎない……ただ、それだけのことだった。

壊走し、全力で敵に背を向け地を駆ける先鋒部隊は、命が惜しいから逃げ出したわけではない。
先鋒を預かるは武門の誉れ、そして傅燮が率いる精鋭部隊である。
そんな者達が無様に壊走など考えられない……当然、策にはめ込まれた歯車の一つである。

そんな激しい戦闘が行われている遥か後方では・・・

「七乃(ななの)～蜂蜜水が飲みたいのじゃ～」

「ダメですよお嬢様。蜂蜜水は、午前と午後で1杯づつって決めたじゃないですか～でないと虫歯になるってお医者様に言われたでしょ？」

「そんなことを言っても、妾は飲みたいのじゃ～」

「もう～そんなに可愛く暴れても、ダメなものはダメなんです」

「むぅ～つまらんのぉ～」

督戦という名目…兼、輜重隊の警護を請け負った袁術及びその親衛隊１００余りは、戦闘開始時刻よりしっかり？とその役目をこなしていた。
その中で、特にやることもない袁術は、張勲と共にぶらぶらしていたのだった。

「七乃～あそこで眠りこけておるのは誰じゃ？」

日なたで居眠りしている銀閣と、ちゃっかり膝枕をゲットした程立が、気持ちよさそうにしているのを見つけた。
朝早くから叩き起こされ（当主としては当たり前だが）蜂蜜水も飲まして貰えない（既に飲んだため）自分に比べ、何故あの者達は…
……と理不尽な怒りを憶えた袁術はドスドスと足音を立てて近づいていく。

「こりゃ！御主達（おぬしたち）起きぬか！えぇい起きよ！今は合戦中なのじゃぞ！」

声に反応した銀閣は、目だけをしょぼしょぼ……とさせるが、自分が必要とされてるとは感じられなかった。

「ふわぁ～なんでぇ……騒がしいなぁ……ふわぁ～眠い……もう少し寝よ……」

「こりゃ！寝るな！起きよ！起きるのじゃぁ～」

余りに甲高い声で騒ぐため、眠気を削がれた銀閣が、片目をパチリっと開けると、金髪の少女が目の前で……ぴょこぴょこと飛び跳ねているのが見えたのだが……何故、自分が起こされなくてはならないのかがわからなかった。

「なんでぇ嬢ちゃん……怪我人でも出たのかい？」

軍医として従軍している自分を起こしに来るということは、そういうことだろうと思い口にしたが、合戦開始時刻からすれば……運び込まれるような時間ではない。

だとすれば何故だろうか……と疑問を持つことは自然なことだった。

「怪我人？何を言っておるのじゃ？」

銀閣に問われるものの、その答えは絡み合うことはなく、疑問を疑問で返す始末。

結局、二人の思惑が絡まるには……袁術を追いかけてきた張勲の到着を待たなければならなかった。

互いに面識はできたものの、袁術という少女に余り……いや殆ど意識することをしない……というか、関わり合いになることを避けようとする……そんな銀閣が居眠りを再開しようとするのであるが、片や眠らせてなるものかと面白そうに話しかけたり、頬を引っ張っ

たりとしている袁術。
そして、その様子を楽しそうにしている張勲……という図式ができあがっていた。

「ふわぁぁぁぁ随分と仲良くしているようですがぁ～あなたは～どなたですかぁ～」

余りにも騒がしく、そして、“私の銀閣君”にちょっかいをだしている少女に対し、眠れる獅子……いや程立が眠そうに立ち上がる。
身長は同じくらいであるため……睨み合う？ように対峙する二人を、周りはまた面白そうに見ていたのだが……。

「なんじゃ、お主…妾を知らぬのか？ふふふ…妾は名門　汝南　袁氏が当主　袁術しゃ！」

「きゃぁ～今！噛みましたね～お嬢様～恥ずかしいぃ～嗚呼、申し遅れました、私はお嬢様のお守り役で張勲といいます」

顔を真っ赤にした袁術と、それをからかう張勲の笑い声に気が抜けたのか、程立は“なんだかなぁ～”と思いながらも自己紹介をしたのだった。
程立としては、袁家当主と顔つなぎができることは損ではなく、これを機会に袁術という少女の人なりを観察しようと決めていたりした。
そして、銀閣はというと……いつの間にか居眠りをしていた。

“特技：どこでも寝られること”は、伊達ではなかったようである。

22話（後書き）

・・・・・・・・・・・・・・・

ちと短いですが、すみません。

23話

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

初戦で……陣がむちゃくちゃになった官軍と黄巾賊。
そして、逃げる官軍が“定められた地点”を通り過ぎようとした時
……平地を見渡せるように作られた物見台に登り、合戦の指揮を
執っていた皇甫　嵩からの指示が飛ぶ。

「右翼第一陣、左翼第一陣！今だ！撃ち方始めぇぇぇぇぇ！」

その号令を合図に、鳥の翼のように広がった左右の陣から……弓隊
の攻撃が始まったのだった。
左右合わせて１０，０００の人間で構成された弓隊から矢が放たれ
る。
しかも、指示された戦法は……指矢懸(さしやがかり)かり　三段撃ち。
一の隊・二の隊・三の隊に分隊された弓兵から1、2、3、1、2、
3……のリズムで放たれる矢は、途切れることなく矢を射続ける
ことができ、弓兵の長時間稼働も可能となる。
当たる矢もあれば外れる矢もあるだろう、しかし、的には事欠かぬ
この戦場で、次々と飛び交うその猛攻は……殲滅戦と言っても過言
ではないほどの苛烈さで、黄巾賊達を屍へと変えていくのだった。
まさに烏合の衆と化した黄巾賊は……矢が尽きるまで、ただ狩られ
るだけの哀れな的でしかなった。

その様子を眺める皇甫　嵩は、勝利の風を感じると共に、単純では

あるが故に難しいこの策で、ここまでの成果を出した……二人の智謀の士を従えるあの男の存在に…戦慄を隠せなかった。

あの晩、皆が策を練ることに熱弁を揮っていた中で、眠そうなあの男が示した策……“釣り野伏せ”……しかも待ち伏せの兵１０，０００に、全て弓を配備させるなど、並みの戦術家では想像すらするまい。

「地を這う兵士のとっての嫌なこと、そいつは槍兵と弓兵に遭遇することだ……こっちの手が届かないところからの攻撃なんざ…嫌がせ以外のなにものでもねえや……そうは思わねえかい？」

「でも銀閣様、弓隊を使うには敵を引き込むことが大前提ですわ」

「寡兵で当たる戦闘の基本とも言えますが、いくら黄巾賊が烏合の衆とはいえ、幾ばくかの統制は為されているでしょうし、５０００もの兵を引き込むことは容易ではありませんよ？」

銀閣は言った…黄巾賊の求心力として君臨する“太平道の教祖　張角”が女であるならば、その容姿を侮蔑されれば信者達は我を忘れて突っかかってくるだろう…と。

そして、逃げる敵は追いかけずにはいられない……戦場に置ける人間心理を突くこの戦術は必ず成功する……とも。

後は、逃げ足の早い精鋭を集めることと、必ず釣れる魚を射るための弓と矢が大量に必要だということ。

それが揃えば勝利は間違いないだろう……この局面において。

予定通り……近隣全ての街や村から掻き集められ、さらに急造された百万本を越える矢がドンドン消費されていき、その残量が気になってきた頃、左翼弓隊を撃破せんと奇声を上げながら突撃する者達がいた。

官軍の弓隊に対し、その側面へ周りんだ……趙弘率いる黄巾賊１０００。
接近戦に弱い弓兵へ盾を翳しながら突撃する様は、まるで土石流のようであった。
しかしながら、割り込むように突出した一軍がその突撃を阻止した……曹操率いる混成部隊５０００である。

「我こそは、華琳（かりん）様の大剣　夏侯惇　元譲なり！死にたくなくば私の前に出るなぁぁぁ！」

猪のように、とんでもない勢いで黄巾賊へ突進していくのは、曹操が将の１人…夏侯惇。
幅広の剣を振り回しながら暴れ回る姿は台風のようで、その剣が届く範囲にいる敵は次々と葬られていく。
そして、その勢いに後押しされた曹操軍は、一気に敵を押しやっていくのであった。

「むちゃむちゃ張り切ってるな…春蘭（しゅんらん）の奴。」

曹操軍中央にて、曹操の横に馬を並べる北郷の呟き通り、いつもの2倍……いや3倍は張り切っているようだった。

「当たり前でしょ？春蘭は曹操軍第一の将。たかが黄巾賊相手に引けを取るはずがない、あってはならないのよ」

実際の所、夏侯惇が張り切っているのは、曹操から提示されているご褒美が主な理由であるのだが、それは敢えて言わないのが彼女の為であろう。

趙弘率いる黄巾賊１００００は確実にその数を減らしていく……夏侯惇を筆頭に、精鋭揃いの曹操軍がその実力を遺憾なく発揮できている証でもあった。

「一刀、私たちも行くわよ。ここで一気に決着をつけ、名を高めるのよ！」

曹操はそう言うと、北郷を伴い、親衛隊と共に夏侯惇達尖鋭が作った所へ進撃していく。

何人斬ったか……数えることすら億劫になるほど敵を屠り、曹操軍第一の将は……時を同じくして……黄巾賊軍の中心部へと辿り着いた。

駆け抜ける旋風、繰り出される斬撃、馬上にあっても変わらぬ……その技を受けたモノは、次の瞬間…物言わぬ何かへと変貌を遂げる。

「小娘ぇぇぇぇ、この趙弘が旋斧の錆にしてくれるわ！」

そこに、護衛を従えた厳つい男が進み出る……と同時に、男は戦斧を振り回しながら夏侯惇へと突撃するのだった。
だが臆することなく、ともや嬉々として……その突撃を受け止めるかのように身構える。
将と将、馬と馬、そして剣と戦斧が交差する……が、一合もせぬまま崩れ落ちたのは、やはり趙弘であった。

「黄巾賊軍が将、趙弘！この夏侯惇が討ち取ったりぃぃぃぃぃぃぃ！」

己が将を討ち取ったことを高らかに叫ぶと、その勢いのまま敵軍勢を斬ってまわる夏侯惇。
その声を聞き、その鬼神のような戦いっぷりを目にした黄巾賊は、適わぬとみて1人、また1人背を向け逃げ始める。ついには軍としての秩序など消え失せていた。
だが、そのまま逃亡を許せば、どこか別の場所で略奪行為を繰り返すのは間違いなかった。

「この機を逃がすな！全員討ち取るのだ！」

良く通る曹操が殲滅戦の指令を出すと、その命を遂行しようと曹操軍・諸侯軍はさらに苛烈な戦いに身を投じていく。
その中で、北郷だけは一方的な殺戮への疑問と理解との鬩ぎ合いに

心を痛めるがゆえ……暫し固まっていた。

「なにを惚けているの一刀！腹を括りなさい！これが戦争なのよ」

馬を寄せ、曹操はそう北郷に喝をいれるが、人を殺めることへの抵抗が消えることはなかった……しかし、自分が生きていく上で必要なことなんだ…と言い聞かせ、北郷は戦いへとその身を投じていくのだった。

北郷が心の奥に小さな歪みを抱えていた頃、戦場の反対側では同じように袁術軍に突撃をかける黄巾賊軍の姿があった。

だが、曹操軍と対峙した黄巾賊と違ったのは、波才率いる１万の中核は元盗賊団であり、奪い殺すことになにも感じない……いや、その行為自体に悦楽を憶える者達が集まっていた。

「いいか野郎共！この戦場はもうだめだ、あとは奪えるだけ奪い北へ逃げる！」

昔からの部下達に作戦行動を告げると、張曼成（ちょうまんせい）から預かった者達には袁術軍への突撃を敢行させ、自らは大回りをし官軍の最後部に位置する輜重部隊を目指していた。

１０００に満たない人数ではあるが、その戦闘力は諸侯軍などに引けはとらない程である。

当然その動きは、袁術軍を指揮する紀霊にも知ることとなったが、倍近くの黄巾賊を相手にすることで手一杯となっていた。

「い、いかん！奴らの向かう先にはお嬢様が！くっ、えぇい、邪魔だ！この！兎に角、なんとかせねば！」

犇(ひし)めくと言ってもいいほどの黄巾賊を斬り倒しながら、副官に軍の指揮を任せ、自らと３００の親衛隊を反転させ、別働隊を追撃へと動かすのであった。

波才率いる別働隊が歩兵なれば追いつけたかもしれない。しかし、現実はそうではなく、必死に追いすがる紀霊達との距離は縮まることのないまま……一番恐れていた展開へと突入していくのだった。

「お、お嬢様ぁぁぁぁぁぁ！」

そして同時刻、官軍の遙か後方に位置する輜重隊からも、砂埃を上げながら向かってくる黄巾賊の姿が確認されていた。

物見の報告を受けた張勲(ちょうくん)は、素早く親衛隊に守備の指示を出すと袁術の元へと戻り詳細を伝える。

「どうするのじゃ七乃～だ、大丈夫なのかの～」

不安げに張勲すがる袁術がオロオロとし始めた。それもそのはず、物見からの報告では１０００程の黄巾賊が真っ直ぐにこちらに向かっており、袁術を守る親衛隊は１００余り……普通に考えても約１０倍の敵に対してどうこうできる人数ではない。
しかもここは平野、奇襲も伏兵もできぬ場所であるから尚更である。

袁術の不安な表情を“可愛いなぁ～お嬢様は…”と内心で愛でながら、張勲の頭の中では策謀と取れる手段の構築がハイスピードで行われていた。何気に袁術に係わる事に対して知謀・政治能力は非常に優秀だったりする……あくまで袁術用限定能力であるが。

そんな張勲の導き出した答えとしては、哀しいかな時間稼ぎしかなかった。
黄巾賊がここへ到達したとしても、すぐに蹂躙されるとは思わない。紀霊達も当然この別働隊の動きに合わせ軍を分けているはず。ならば援軍が到着するまでの時間をできるだけ稼げば……最悪でも袁術だけでも助けられるはず……そう結論に達したのだった。
後は、手持ちの親衛隊１００でどう対処するか…である。

思案顔の張勲を眺めながら、程立と徐庶は自らの安全を確保しつつ、尚かつ袁家へ恩を着せられる最高の案を自分たちの策謀でなんとかできないものか…そう考えるのであるが、手持ちの兵を持たぬ自分たちに出来ることなどここでは無いに等しかった。故にやはり…頼らざる得ないと結論つけた。
願わくば…銀閣の素性はもとより、その技量を晒したくなく…当然その姿すらも目立たさない方が望ましい……望ましいのであるが、背に腹は替えられない。なんといっても銀閣自身の命に関わる問題であると共に、この先…つまりいずれは終結するであろう“黄巾賊

の反乱”…その後を見据えてのことだった。

「銀閣君……お願いできますか……」

程立に…泣き出しそうな顔でそんなことを言われたならば、断れる男などいないであろう。
しかも、自分のことを好きだと言ってくれた女の子が自分を頼りにしているのだから。
さも当然のように、無言でポンポンと程立の頭をに手を乗せるとクルリと背を向ける。

そんな歩き始めた銀閣を目敏く見つけた袁術が、ポテポテと寄ってきたと思えば…その風にたなびく裾を掴み、咎めるようにも、縋るようにもみえる眼差しで見上げた。

「おぬし何処へいくのじゃ！黄巾賊の軍はそこまで来ておるのじゃぞ！早う妾と共にこちらに来るのじゃ」

袁術は袁術なりに……軍医であり、非戦闘員である銀閣のことを思い、自らと共に安全圏への脱出を促すのであるが、銀閣は首を横に振る。
そして、右手で袁術の頭をくしゃくしゃっと撫でると、向かい来る黄巾賊への歩みを進めていく。振り向きもせず、その手を振りながら。

「心配するな…お嬢ちゃん。守ってやる…お前も…皆も……な」

袁術は、去りゆく銀閣の背を見つめながら、まだ頭に残る大きな手の平の感触と、久しく感じていなかった無骨な手の重みに…何故か懐かしいものを感じ取っていた。

早くに父親が他界し、権力闘争の渦の中で生き続けてきた袁術には、親身に感じられる大人の数は多くない。袁家という大きな世界の中で見てきた大人の汚さ、醜さは己の成長を止め…“大人になぞなりたくないたい”と願うほど。

だが、先ほどの眠たそうな目の男には、不思議と嫌悪感は抱かなかった。だからであろうか…失いたくないという思いが彼を引き留める行動となったのは。

23話（後書き）

・・・・・・・・・・・・・・

超遅筆のなべにゃです。

でも、諦めずに投稿します。

宜しくお願いします。

24話

・・・・・・・・・・・・・・・・

「銀閣様……御武運を」

傍らで頭(こうべ)を垂れる徐庶の言葉に頷きだけで応え、銀閣の左手には…宇練家の秘刀、伝説の刀鍛治「四季崎記紀(しきざききしき)」が造りし完成形変体刀…斬刀「鈍(なまくら)」が握られていた。

いつになく鋭い視線を向けた先には、砂埃を上げながら一直線にこちらへと近づく騎馬がハッキリと見て取れた。もちろん、獲物を見るような喜悦の表情をする男達の表情も。

「ここは戦場(いくさば)だ……悪く思うなよ」

袁術が親衛隊が構える防衛地点から、散歩にでも行くような足取りで躊躇することなく進む銀閣。

そして、このすぐ際を馬を操る敵兵が、剣を振り下ろしながらすれ違う……。

『シャリン』

金属の摺れる音を聞いた男は…自分を乗せた馬が目の前から遠ざかるという…不思議な光景を目にした。
そう、紛れもなくあの背中、あの鎧は自分のもの。

『オレは何故…見上げるようして見ているのだ?』

そう思ったまま…男の意識は停止した。

「零戦(ゼロセン)はいつでも出撃可能だぜ?」

足下に転がった“首”に興味を示すことなく、銀閣は射程圏内に入り込む敵に零戦(ゼロセン)を放ち続ける。

『シャリン　シャリン　シャリン　シャリン　シャリン　シャリン……』

腰に下げし刀から、音が聞こえたその瞬間……馬上の兵は次ぎ次と馬上より、その身を落下させていく。
嘘せ返るような血の臭いが充満し、銀閣が持つその刀も血で濡れている。
繰り出される居合い斬り　宇練流抜刀術『零閃(ゼロセン)』、抜かれた刃の、きらめきすら見せぬこの技が繰り出され、金属の擦れるような音がする度に、命が刈り取られていくのだ。

刀を振り回す姿など見えるはずもない、ただ限りなく光速に近づいた居合の音だけがそこに残るだけ。

黄巾賊の兵達には異様に見えたかもしれない……ただ腰にある刀に手を置いているだけの男が進むだけで仲間が斬られていくという光景に！

俊敏な足捌きで騎馬の間をすり抜けていく銀閣。その姿を目にした瞬間、その命は刈り取られているのだから防ぎようがない。

１００は下らない命がその場で散った後、その事実に気付いた兵たちは取り囲むように銀閣に迫り武器を振り上げた。

並の武将であれば……討ち取れたかもしれぬそのタイミングも、銀閣にはスローモーションのようにゆっくりと見えるのだった。重なり合うように、自らの身体へと降りかかるそれらを最小限の動きで避け、死地より飛び上がる。

「零閃（ゼロセン）は空中からでも出撃可能だぜ？」

男達の頭上を飛び越えながら繰り出されるその技の冴えは、銀閣が着地と同時に証明される。

斬られたことにすら気付かないまま、滑り落ちる目の前の仲間の姿を目にしながら、男達の命は停止するのだから。

『シャリン　シャリン　シャリン　シャリン　シャリン　シャリン……』

『シャリン　シャリン　シャリン　シャリン　シャリン　シャリン……』

『シャリン　シャリン　シャリン　シャリン　シャリン　シャリン……』

駆け抜ける銀閣。見えぬ剣撃。そして残るは金属の摺れる音と骸のみ。

「限定奥義…斬刀狩り」

剣撃の届く射程に入ったモノを悉く…斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る……。

斬ったその者から得た血液を潤滑剤とし、鞘走りの摩擦係数を限りなく“０”にした宇練流決戦奥義。
繰り出される居合は光速を越えるという……。

気がつくと、もはや５０を下回る人数だけが遠巻きに銀閣を見ており、本能が指し示す絶対的な強者に対する恐れが戦場への侵入を拒んでいるのだった。
銀閣を囲むように乱れ倒れる死体は…全て一刀両断されており、その切り口は鮮やかな血色で彩られていた。痛みすら感じさせぬその鋭すぎる斬撃は、ここに倒れている男達にとっては幸せなことだったのかもしれなかった。
死んだことにすら気づかぬまま、自らを縛る全てのことから解放されたと……言い換えることができるのだから。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「あの男は……妖術使いなのか……の？」

一刻が過ぎる間もなく、寄せうる敵を悉く切り伏せていく銀閣を遠目より見ていた袁術は、想像を遙かに超える…その動きと結果を表す言葉を見つけられずに……そう呟いた。

だがそれは、この場にてそれを目撃した程立と徐庶以外が思ったことでもあったのだ。

「袁術殿、銀閣様の剣撃は達人すらも見極められぬ素早きモノ。そう思われても仕方がありませんが、決して妖術ではございませんよ」

徐庶が窘めるように説明すると、『ふむ、そうなのか……とにかく凄いんじゃな……』わかったのかどうか定かではないが、袁術は視線を動かさぬまま…そう呟いた。

驚きの表情は変わらぬが、今も尚、黄巾賊を斬って疾走する銀閣の姿を見るその目は…今までにないほど輝いたのだった。

「七乃～七乃～」

「はい、お嬢様。七乃はココにいますよ」

「見たかの！あの男……えっと、宇練と申したかの？凄いのじゃ！あんなに沢山の賊をバッサバッサなのじゃ！」

「はいはい、私も見ておりましたよ。凄いですね～驚きましたね～（ああ、こんなにはしゃぐお嬢様は久方ぶりですね…なんて可愛いのかしら）」

先ほどまで、命の危機に震えていたとは思えないほどの豹変ぶりで

はあるが、安心感も手伝ってのことであろうキャッキャッと騒いでいた。

そして、すぐ横に付き従う張勲へゴニョゴニョと耳打ちすると、また目を輝かせながら戦場へと視線を向ける。

『おおぉ！』だの『ほえぇ！』だのという言葉、いや歓声？がこの場を支配しつつあるのも当然といえた。銀閣の活躍により、あと少しで、こちらへと向かっていた全ての黄巾賊が討ち倒されようとしていたのだから。

皆と一緒になって歓声を上げる袁術から離れ、張勲は袁術と同じように戦場を見つめながらも、違う想いを念じ続ける二人…程立と徐庶に声を掛けたのだった。

「改めてお話ししたいと思います。少しよろしいでしょうか？」

今までの緩い表情から一変し、女南　袁家筆頭政務官の顔となった張勲は、至極真面目な言葉で二人へと問いかける。

その内容は、“宇練”と名乗る剣豪の素性と立ち位置、そしてこれからのこと。

情報戦とまでは言わないが、それに近い応酬が三人に間にあったことだけは書き留めておこう。

なんにせよ、程立達が望んだモノは…ある程度手に入ったと考えてよかった。

ただ、問題もあったりはするのであるが……。

・・・・・・・・・・・・・・・・

後方からやってくる紀霊達救援隊が迫ってきている以上、ここに留まっていては結局の所討ち取られてしまうことは明白であり、逃げ切るか突破するかの選択を迫られていた。
後方より来るは袁術親衛隊３００。前方には部下８００を斬り倒して尚、平然としている１人の男。
自分の武威を過信するではないが、今まで生き延びてこられたのは全てこの武の才能のおかげ。
ならば、己の武に賭けてもよいのではないか……そう思えてくる。
加えて眼前に佇む男は今までの戦闘からくる疲労が少なくともあるはず。
そう考えて…波才は馬を駈け、銀閣へと突撃を開始するのだった。

「この化け物がぁぁぁぁぁぁぁぁ」

己の中に巣くう恐怖を打破せんと、腹の底から怒号を掃き出し、握る刀を渾身の力を込め振り下ろす。
馬身一体とまではいかなくとも、馬術の腕は相当なものであったし、そこから巧みに繰り出す剣技も並の武将では一合も保つまい。
いままであった…いくつものピンチを己の技量で切り抜けてきた男の意地がそこにはあった。

あったが……

相手が悪かった。

『シャリン』

「ふっ、違いねえ……オレは、人を斬ることしかできん……化け物だよ」

誰に聞かせるでもなく呟いた言葉。
銀閣の周りに……その言葉を確認できる者は誰1人……生きてはいない。
そこにあるのは自虐か後悔か……その想いは誰にも届かない。

自分たちの大将がが斬られたことで、なんとか踏ん張っていた心の張りが限界に達し、波才の部下達は急ぎ足で壊走を始める。だが、追いついた紀霊達に悉く討ち取られたことで波才率いる黄巾賊軍は消滅したのだった。
無様に転がる屍の中心で空を見上げる銀閣は……生きるモノ全てを喰らいつくす死神のように映っていた。

２４話（後書き）

・・・・・・・・・・・・・

ちと短いですが
久しぶりに投稿です。

２５話

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

曹操軍・袁家軍の奮闘により、なんとか持ちこたえた皇甫嵩(こうほすう)軍は、作戦行動の予定調和通り朱儁(しゅしゅん)軍と挟撃の策を成功させ、南陽を取り戻すことができた。
これにより、予州・荊州方面の黄巾賊は処罰または縛につき、事実上消滅したといってもよかった。
残るは、北中郎将　盧植(ろしょく)率いる冀州方面が片づけば、黄巾賊の乱は収束するはずなのである。
そして、銀閣達の従軍もこれで契約満了となる………はずなのであるが………。

「何故…オレはここにいるんだろう……」

銀閣達は、洛陽への帰還兵達とともに行動していた。従軍での給金は洛陽に帰還してから……という契約であるから。
しかし、何故か“袁術専用の馬車”に乗せられており、その両端から飛び交う姦しい声が銀閣の両耳を哀しいほど刺激していた。

「ええぃ、じゃから少しは遠慮せよと言っておるのじゃ！」

「いいえ、これだけは譲れないのですよ～」

二人の少女?は1つのモノを取り合い争っていた……。

「風(ふう)!そんなに押すでない!落ちてしまうはないか!」

「なら、落ちてしまった方がいいですね～」

お互いが譲らず、お互いの身体を押し付け合い……やや体格の劣る袁術は落ちそうになる。

「ええぃ!ならばこうするまでじゃ!」

「ああ!美羽ちゃんずるいですよ!でしたら風もこうするのですよ～」

落ちまいとするが故に……銀閣の右腕をたぐり寄せしっかりと抱きしめる。

その真横では、『ならば風も……』と対抗するべく、程立も銀閣の左腕を自らの腰へと誘う。

「あらあら、お嬢様ったらこんなに楽しそうに～（お嬢様の笑顔が眩しすぎます）」

「お二方共!銀閣様が困っているでしょう!」

現在、馬車に乗り込んでいるのは…銀閣、程立、徐庶、袁術、張勲の五人。
そして、この馬車…あと3人くらい乗り込んでも大丈夫なほど広い。
袁家の贅を尽くした特級品の馬車なのである。
で…あるにもかかわらず、『狭い』だの、『押すな』だのと文句を言い合っている二人……。
真名を預け合うほど打ち解けた二人が取り合って言うのは、“銀閣の膝の上”。
なにもかも諦めた表情の銀閣を余所に、その膝の上では二人の乙女？が自らの居場所を確保すべく争っていた。

「いいかげん落ち着いたらどうだ？」

両腕で程立と袁術を抱きかかえるようにしながら、言葉を吐き出した。
機嫌を損ねたと感じたのであろう…やや下向きに視線を落とし、シュンと大人しくなった。

「別に怒っちゃいねぇよ。だが、もう少し大人しくしてくれ……」

その言葉を耳にした途端、少女達の顔に笑顔が戻る。

「妾は大人しくしておるぞ」

「風だって大人しくしてますよ」

申し合わせたかのように口にした言葉で、二人は目を合わせくすくすと笑い出す。

戦場からの帰り道とは思えないほどの穏やかな空気がそこにあった。

ただ、“二人の重みで足が痺れてきたこと”を、どうしても言い出せない銀閣は心の中で唸ってはいたが……。

そんな様子を見ながら、ここに至るまでの行動が間違いではなかったと、密かに安堵する張勲は緩い表情をしながら楽しそうにしている袁術を見つめている。

あの時、張勲が提案したこと……名と実の取引をもう一度反芻する。

若い袁術に、どうしても袁家当主としての“箔をつけたい”張勲は、何が何でも武勲が必要であった。

袁家の長老達に対しても、？にて勢力を固める袁紹に対しても。その為、何が何でもこの黄巾賊討伐戦で大将首を獲る算段であったのだ。どんな手を使ってでも……だ。

しかし、思惑とは違い…まさかの危機に陥ってしまった。油断をしていたつもりはないが、やはり戦場とは何が起こるかわからないものである。最悪、自分を盾にしても袁術だけでも逃がす腹つもりであったが、そうはならなかった。

目の前で袁術を抱きかかえる男……宇練銀閣の尽力故。

尽力といえるのか？

眠そうな顔をしながら戦場へと向ったと思えば、観るも鮮やかな剣

術で向かい来る黄巾賊軍を斬ってしまった。
そう、まさしく斬ってしまったのだ……全ての黄巾賊をさも簡単に。
袁家筆頭政務官をなってからも幾多の武人を見てきたが、これほどの“武”を持ちうる人物に出会ったことはなかった。しかも、皇甫嵩軍には軍医として従軍していると言っていた男……がだ。兎も角、銀閣に付き従う程立、徐庶への話を早急に纏める必要があった。
“この機会を逃してはならない”と自分の勘が告げているのだから……

宇練銀閣を筆頭とした三名は、官軍に属する直前まで“袁家親衛隊の客将”であったという事実。
そして、払い損ねていた給金は“遅延金”も含め洛陽にて全額支払うということ。
今回の件も、袁家に属していた誼で、“袁術の為に行った”という事実と、合わせて…その結果は“袁術へ帰する”ということも確認できた。

程立・徐庶相手に金額と条件の折り合いをつけるのは、かなりの消耗戦になったものの、金とコネで“袁術の手柄”が手に入るならば安いモノであった……袁家の財力を持ってすればだが。
できることならば、このまま三人を取り込みたいと考えたのだが、どうも宇練という男は“束縛される”ということが嫌いらしい…ということもわかった。
なればこそ、このような“武”を持ちうる人物が在野にあるのも頷けるというものだ。

数多の思い違いを張勲へと促した程立・徐庶の手柄といえるのかもしれないが、銀閣の知らぬ内にまとめられた交渉は露見することなく、銀閣の懐を潤す結果となった。

「結果良ければ全て良しなのですよ～」

ご満悦な顔で呟いた程立がそこにいたとか。

一行を乗せた馬車は、随分走った後……洛陽の城壁見える所にまで来た。

馬車は速度を落とさずに進んでいるのだが、一向に城壁までの距離が縮まらないような気分になる。

「なんだ？あの巨大なモンは……下酷（げこく）城なんて比べモンにならねぇな。」

光武帝が都を長安より移して、１８０年余り。経済の中心地として栄えた大都市は、皇帝が変わる度、その城壁を大きくしていった、権力の大きさを見せつけるかのように。

１５０万人以上の人間が居を構え、生活する大都市“洛陽”その巨大な城壁と比例するかのように、権力と利権、人間関係が渦巻く謀略の中心地と言っても過言ではなかった。

そんな洛陽での出会いが、この先の銀閣が進むべき未知へ大きく寄与することは間違いなかった……が、このとき、それを自覚できるモノは誰１人としていなかったのである。

25話（後書き）

・・・・・・・・・・・・・・・・・

久ぶりに投稿です。

26話

・・・・・・・・・・・・

ガヤガヤと静寂を破る物音の所為で、うっすらと瞼を開ける。確認したのは、窓からこぼれる僅かな光。それにより今が朝であることを理解するのであった。

「なんでぃ……まだ朝じゃねぇか……寝ょ…」

再び瞼を閉じた銀閣は、そのまま二度寝を決め込んだ。もぞもぞと布団に入り込み、夢の世界へと旅立つ。

洛陽に来て寄り6日ばかり、寝て、寝て、寝て、寝て、食べて、飲んで、また寝る……銀閣の“貯眠”はドンドン増えていく。夢の睡眠ライフ……まぁ、引き出すことは不可能で、利子もつかないが。格好良く言えばニート？粋に言えばヒモ？いや、居候とでもいうのか、ともかく今現在、衣食住を保証され自由を満喫している男がここにいた。

だが今日は“いつも通り”ではなかった。

ガラッと開いた引き戸と共に、ヒンヤリした空気が室内に流れ込み、ダンっ！と床を蹴る音。

何かが飛翔し、そして引力の法則を無視することなく放射線状に落下……いや、この場合投下というのか……金色の塊は躊躇することなく、目的の場所へと激突したのであった。

「ぐえぇ！！」

銀閣の呻き声と共に。

“不意を突く”という言葉では…到底言い表すことができぬほどの衝撃的な攻撃といえよう。

寝ている者への腹部への全体重攻撃……その破壊力は想像を絶する。

苦悶する銀閣をよそに、その腹の上で更なる追加攻撃……馬乗りになり、ドスンドスンと暴れている金色の塊はご満悦。すっごく楽しそうである。

「ほれ！銀閣！起きよ！朝じゃぞ！ほれ！起きよ！起きるのじゃ！！」

黄巾賊退治の報告や、その他諸々の公務などに引っ張り回されていた袁術が、やっと休日に取ることが許された朝であった。本来であれば張勲が全て引き受け、全てを完璧にこなす予定であったのだが、何故か“やる気”になった袁術は、袁家当主としての公務に真面目に取り組んでいたのだ。

決して程立に唆(そそのか)されたわけでも、ご褒美に目が眩んだわけでも、ない……たぶん。

『銀閣君が“おこちゃま”なんて相手にするわけないじゃないですかぁ～』と程立に言われたり……

『銀閣様は“大人の女性にしか”興味がないと……』と徐庶が話し

ていたとか……

『銀閣さんが言ってましたよ～“オレは仕事が出来る女にドキドキする”とかなんとか』と張勲がこっそり伝えていたりとか……

そして、大人の女性　＝　一人前の仕事が出来る者
仕事が出来る女　＝　いい女
いい女　＝　惚れるしかないだろ！

という方程式？が袁術の頭の中では画かれてしまったようだった。

明らかに嘘や捏造、または自分達の希望が大いに含まれていたりするわけだが……袁術にそれらを見破ることなどできないわけで、結局の所……鵜呑みにした袁術は非常にやる気をみせたのだった。
そんなワケで張勲の思惑通り事は進み、この洛陽で袁家当主としての存在を少しばかり示すことができた。

『これも契約……いえ、協力すべきことの1つなのですよ～被害は少なく、効果は大きく！なのですよ～』

と確実に約1名が被害にあうことは間違いないのであるが、某軍師が画く未来予想図の中では微々たること……らしかった。

結局の所、叩き起こされた？銀閣は、なし崩しに袁術たちと朝食を共にし、街へと出かけることと相成った。

「おめでとうございます！華琳様！」

「ええ、ありがとうね桂花。でも、まだまだこれからよ！」

「はい、もちろんです。私が全力をもって華琳様の覇道を支えてみせますから！」

「期待しているわ……桂花…可愛いい子」

洛陽内の飲食店が建ち並ぶ通りを、和気藹々としながら視察する曹操一行。

曹操を中心に、荀？、夏侯惇、北郷といった黄巾賊討伐に参加した曹操軍の面々である。

その手柄は上奏され、これまでの支配地であった陳留に加え、許昌・長沙の太守として、予州の一部を支配地とすることが内定していた。

もちろん、曹家の根回しが功を奏した結果でもあるのだが、曹操自身は大きく躍進できたことを素直に喜んでいた。

それが単純に、黄巾賊による被害でそれらの都市を守り、管理・運営できる人間が不足していたからであったとしてもだ。

「しっかし、これからドンドン忙しくなるな」

北郷の言葉に“うんうん”と頷く一行とその主……と例外その他一名。

「はぁ？何を言い出すかと思えば、この全身精液男。修める土地が増えたからといって、あんたが忙しくなるわけないじゃない、春蘭や秋蘭にまだまだ届かないくせに……何を忙しく……はっ！？まさか、あんた、この期に乗じて『俺、曹操様の近くで政務に携わる北郷っていうんだ…もし、ここで働きたかったら……』とか何とか言って、新たに採用予定の者達に手を出すつもりなんじゃ……は、離れなさい！ていうか死になさい！この変態！嫌ぁ～助けて～犯される～孕まされる！」

「ちょっ、ちょっと待て桂花（けいふぁ）！いきなり何を言い出すんだよ！てか、こんなところでそんなこと叫ぶな！なに勝手に俺のこと悪代官扱いしてんだよ！」

とっさに口を両手で塞ぎ、周りをキョロキョロしながら冷や汗をかく北郷。嫌いな男、しかも北郷に口を塞がれ、『うえっイカ臭い…吐きそう……』と涙目になって暴れる荀？がモゴモゴと言っているがお構いなしだ。

「はぁ…まったくこの子達ときたら……」

そんな呟きを掃き出しながら、相変わらずな二人を眺めながらも、つかの間の休息であることを認識する。だからこそ、今、このときを無駄にせず、羽を伸ばしているところなのだ。

曹操は、この洛陽で官僚をしていたことから別段珍しくもなんともないのであるが、荀？や北郷は初めての大都市にドキドキ、キョロキョロしていた。やけにテンションが高い二人のワケ……つまり、視察という名目で洛陽繁華街に観光にきているからなのだ。

そんな“おのぼりさん”な二人を楽しみながら観察していた曹操の眼に……何かが不意に映った。

初めてではない。しかし、1度だけ眼にした“それ”を忘れずにいた自分の記憶がリフレインする。
気のせいかもしれない。幻かもしれない。しかし、確かめてみて損はない。

そう考えた瞬間に身体は動き出していた。眼にしたそれに追いつかんと駆け出す曹操。そして、何事かと周りを警戒する一行を余所に、さらに加速していく。もう少し！しかし、人混みが行く手を阻む。

「くっ、ごめんなさい！あ、もう少しだというのに！」

それらをかき分け、ぶつかりながら、それでも見失わないよう眼を鷹のようにしながら追いかけるのであるが……角を曲がった先で見失ってしまった。

「ハァハァハァハァ……気のせいだったのかしら……」

息を切らしながら、眼に映っていた……揺れる銀黒の長い髪が決して“幻でない”と信じて。
幻ではない、であるならば……この街にいるのだ。あの夜出会った男が！根拠はないが乙女の勘がそう告げていた。『絶対探し出してやる』何故か密かに闘志を燃やす女が空を睨んでいた。

「はぁ～くしゅん！」

某覇王（予定）の乙女がメラメラと闘志を燃やしていることを知ら

ない銀閣は、盛大にくしゃみをしていた。それが、噂のせいなのか、ヒンヤリと滴る水のせいなのかは不明であったが。

曹操が追いかけていた人物は間違いなく銀閣その人であり、“運が良ければ”再会することは可能だった……運が良ければ。

今現在、“運”に見放された男の名は銀閣。

袁術に手を引かれながら街を散策（買い食い）している最中、突如襲った水しぶき。

打ち水していた店先の小僧が、桶に残った“それ”を『えいっ！』と放出した先に“運悪く”出現した男に全て命中したのだ。

そして、当然のように“少年”に変化した銀閣を隠すように抱え…人混みを抜け出した徐庶の機転はほめられるべきことであろう。

こんな人通りの多い場所で見られて良いことでもない。出来る限り秘匿とするべき事柄なのだから。

だが、そんな変化を目の当たりにし、驚きで……声をうまく出せないでいる少女がここに1人いた。

「な、な…なな……七乃～。ぎ、ぎ…ぎ…銀閣が銀閣が……（なんじゃ？いったい何が起こったのじゃ！？）」

「えっ？！ええ……（ふわぁ～お嬢様の驚きの表情！胸がきゅんきゅんしちゃいます）」

思いのかみ合わない主従は、兎にも角にも、徐庶が走り去った先へと、向かうのであった。

人通りの少ない場所から、小料理屋へと移動した一行。眼を爛々と輝かせ、甲斐甲斐しく銀閣の世話をする徐庶を余所に、どう切り抜

けるかと高速回転で思考を巡らせる程立が袁術・張勲主従を前にしていた。

26話（後書き）

・・・・・・・・・・・・・

細々と更新です。

27話

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ある村に、比類無き知謀と類い希なき美貌を併せ持った少女が1人……いたんです。

その少女の素晴らしさは国中に広まり、色んな人達が少女を一目見ようと、その智恵借りようとし村には旅人が絶えることがなく、村は大層裕福になったそうです。

そして、その噂は、ついに天界まで伝わり、その少女を我がモノにせんとする悪の仙人が手下を引き連れてやってきたのでした。悪の仙人は、手下を使い村を襲わせました。仙人とは雲の上の存在、とても村人達だけで退けられるものではありませんでした。1人、また1人と倒れていき、ついに少女にまでその手が伸びようとした……その時。

雲の切れ間からぐ溢れんばかりの光の束が降り注いだのでした。

その余りの眩しさに、少女も、悪漢たちも眼を瞑りました。暫くして、弱まった光ことで眼を開けた少女の前に……銀黒の長髪をたなびかせた1人の剣士が立っていたのでした。

「地の法を乱す悪漢共め！そこな少女をお前達に渡すわけには参らん！」

そう言い放った男は、眼にも停まらぬ剣捌きで悪漢共をバッタバッタと斬り捨てていくのでした。
そして、悪漢共では手に負えないと判断した悪の仙人が遂にその姿を現したのでした。

「もはや崑崙がお主を遣わすとは予想外よ！だが、俺様とて金鰲島の一角を占める妖仙……引かねばならぬ理由などないわ！」

こうして悪の仙人と銀黒髪の剣士は戦いを始め、その戦闘は三日三晩に及んだのでした。
二人の実力は拮抗しており、四日目の朝を迎えたときには二人はボロボロになっており、互いに限界が来ていることを理解していました。
そんな精も根も尽き果てようとしている二人を支えているのは……己の矜持のみでした。

先に動いた方が負ける……二人は互いの隙を伺いながら睨み合っていました。すると、そんな二人の間を突如あらわれたツバメが通りすぎようとしました。当然、そんな隙を見逃す二人ではありませんでした。

先に動いたのはどちらだったのか……人の目では捕らえることの適わなぬ早さで交差した二人。
吹き荒れる突風と禍々しい光だけが互いに何かをしたことだけを知る唯一の手がかりと言えました。
立ち位置は一瞬で入れ替わっており、互いが背を向けていました。

「秘剣……燕返し」

剣士がそう口にすると同時に、悪の仙人は崩れ落ち、塵へと帰っていきます……そうです、遂に剣士は勝利したのでした。
ですが、剣士が受けた傷は深く、その勝利は紙一重であったといいます。
さらに悪の仙人が放った最後の術により、その身にとんでもない呪いが降りかかっていたのでした。

助けられた少女は、身も心も剣士に捧げ、手厚く看病したのでした。
そのお陰か、程なくして剣士は回復しました……しかし、その身に受けた呪いだけはどうにもなりませんでした。

剣士は諦めませんでした、どこかに呪いをとく方法があるはずであると。己の故郷へ帰るため、夢を叶えるため、旅に出ることにしたのでした。
剣士は少女に言いました。

「世話になった、この恩はいつか報いよう」と。

ですが、少女にとってはとんでもないことです。何故なら自分の身を助けてくれたのは目の前にいる剣士なのですから。剣士がいなければ、とうの昔に攫われていたに違いないのですから。

「恩を受けたのは私のほうです。この身をあなた様に捧げることしか私にはできませんが……」

俯きながら真っ赤になった少女は……剣士の袖を掴みながらそう言うのが精一杯でした。

見つめ合う二人……そして、重なる影。

いつのまにか心を通わせた二人の間にそれ以上の言葉は不要でした。

それからです……剣士と“美少女”との宛のない旅が始まったのは。

「そして、何を隠そう…その美少女というのが～風(ふう)のことな「「ちょっとまったぁ！」」……なんですか～まだ、お話の途中なのですが」

不満顔で抗議をする程立を余所に、待ったをかけた二人は声を荒げて詰め寄った。

「風さん！そのお話は“美少女二人設定”と、取り決めたはずですわ！」

「仙人と戦うってどんだけ！？」

突っ込み所満載な……程立の話を目を輝かせながら聞いていた袁術と張勲であったが、徐庶と銀閣の“ちょっと待ったコール”を切っ掛けに、自分たちも質問したくてうずうずしているようである。

「尋常ではないと思っていましたが、銀閣さんは仙人の国からいらっしゃったんですか！」

「ぎ、銀閣は、ほ、本当に風と、その、接吻をしたのか……の？」

なんとも収拾がつかなくなりそうな気配が濃厚であったが、嘘にほんの少しの本当？を混ぜる程立の話術により……なんとか誤魔化しきった……ようだった。
そのあと、理不尽な質問攻めで大いに盛り上がったことはいうまでもない。

「おかしい……何か、こう……どんどん外堀が埋まっていくような気がするのは……気のせいだよな？」

なんにせよ、銀閣の秘密を知る人間が増えたことだけは間違いなかった。

そして、この時語った程立の話が……あらぬ噂を巻き起こすのは、もう少し先のことであった。

何かと面倒くさくなってきた銀閣であるが、今日は“雫(しずく)の番”らしく……少年姿でお出かけしていた。

「なんだか今日は街の中が忙(せわ)しそうだね雫(しずく)さん」

いつもの茶屋の二階（袁家御用達のお店）で、ぼーっと眺めている外では平服の者達に混じり、軍服の者も忙しそうに行き交っていた。

「昨日の晩に連絡があったらしいのですが、冀州方面の黄巾賊討伐に向かっていた盧植・董卓軍が帰還したそうですよ？」

「へぇ～すると張角は討ち取られたのかな？」

「いえ、張角・張宝・張梁の三名は行方不明らしいです。でも、私が思うに始めから存在していなかったのではないかと……」

「それは何故？」

「これだけの乱を呼び起こし、国中へと広った黄巾賊の首魁につい

ての詳細が……全くといっていいほど情報がないんです。わかりませんけど、虐げられてきた人々の想像、妄想、希望……それらがありもしない偶像を産み出し、その偶像を誰かが利用していたのではないのか……と。でなければ、討ち取れた首のほとんどが盗賊や山賊であることに説明がつきませんわ」

「なるほどねぇ～そういう見方もあるわけだ……」

「情報が無いため、人相も、風貌も、性別さえも不明。そんな者が首魁として成り立つのかと考えれば…おのずと……ですわ」

推理小説やコナン君的な事件のエピローグのような会話をしている二人であるが、ぶっちゃけ超第三者的立ち位置であるからこそ、そう思えるのかもしれなかった。

だが、これで確実に黄巾賊とよばれる反国家的勢力は消滅するのであろう。あらたな火種が花火を上げるまでの束の間の平和が訪れたといってもよかった。歴史を知っている銀閣は“正に束の間”と決めつけているが。

「まぁ、深く考えたところでしかたない……かな?」

新たな戦乱の足音が聞こえる……そんな気がした銀閣だった。

27話（後書き）

・・・・・・・・・・・・・

短いですが。

28話

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「こちらで暫くお待ち下さい」

受付で従軍中に貰った身分証を提示し、待合室に通された銀閣は眠そうな顔をしながら椅子に腰掛けた。いつも付き従う程立と徐庶であるが、今日は別の用があるとかでここにはいない。

「まったく、呼び出しとはいい身分だな」

ふわぁぁぁぁ……と欠伸をし、怠そうにしながら、『ああ、そういや将軍様だったな』と思い出した。将軍が何人いるのかは知らないが、“偉い人”であることはまちがいだろう。

「宇練殿！宇練殿！」

いつの間にか眠りこけていた銀閣を案内係の従卒が大声で呼び起こす。

ああ、そういや待ってたんだっけな……はぁ、めんどくさい……その思考は顔にでていたが、銀閣も従卒も気にすることはないようだ。

案内された扉をくぐると書簡、竹簡が所狭しと積み上げられた部屋があった。一瞬、物置部屋か?とも思ったがそうではないようだ。

何故なら……

書簡の山がそびえ立つその奥に、目的とした人物が顔を上げたからである。

「銀閣!よくきたな。まぁ、汚いところだが適当に座れ」

皇甫嵩(こうほすう)が言うとおり、本当に汚い…といっても乱雑に置かれた書類のせいでそう見えるのだが、しかし、座る場所がない。

「本当に汚い部屋だな」

仕方がないので、ちょいちょいと山を動かし、座る場所を確保し胡座(あぐら)をかく。気にしていたのかジロリと一瞬睨み付けるも、諦めたように書類へと眼を戻す。

「で、何の用なんだ?オレは忙しいんだけど?」

「ああ、そのことだがな。この私の部屋を見て何も思わないのか?」

「部屋？ああ、もう一度言えと？……汚いな」

「そうか、そうだろう。私もそう思う」

「で？」

「戦より帰還し、帝へ報告。一息ついたと思えば……この有様だよ。もう五日も風呂に入ってない」

「えへ……よくもまぁ平気でいられるものだな。流石は将軍様だ」

「馬鹿野郎！平気なわけがない！そんなわけないだろうが！ここは戦地か？いやちがう都だぞ！なのに何故私は毎日毎日毎日毎日毎日……やってられるかぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

突然切れだした皇甫　嵩に“どうしたものか”と思いながらも、嵐が過ぎ去るのを大人しくまつことにした。乙女？が口にするのも憚るような怒号が飛び出していたが、幾分か叫んだせいで冷静さを取り戻し『ごほんっ』とわざとらしく咳払いをして座り直した。

「然るに銀閣。お前……毎日遊び惚けているそうだな？」

羨ましいぞこの野郎！という念が篭もった眼力で、じぃぃぃぃっと睨み付けられる銀閣であるが、それはそこ、皇甫　嵩と銀閣の役割・身分の違いからくることであるから仕方がない。
仕方がないが、納得できないのが皇甫　嵩という人物の性格だ。

武に秀でた者はそこそこいるものの、事務処理、後方支援、戦術策定など文官、軍師など“知に属する”能力の高い部下恵まれない皇甫　嵩軍。門閥や軍閥、名家、名士、豪族、豪商が犇めき、そして宦官共が跋扈する宮中に置いて、それらと対峙し、時には共闘することで自らの閥を築かねば生き残っていけない。

皇甫　嵩とて武門の名家の出だ。従って、それなりの人脈は持っているし、持ち前の忠義により帝一族からの寵も高い。しかし、今回の黄巾賊の乱で失った人材も半端ではなかった。本当に半端なかった。優秀な奴から死んでいくものさ……と誰が言ったか知らないが、そこそこ優秀な奴は、死地へ旅だったか、故郷に逃げ帰った。それは、他の派閥・軍閥にも言えることだが、とにかく人材不足なのだ。

金や官位、権力や利権。荒れ狂う謀略の都　洛陽での権力争いは現在も進行形で、最高潮に達していた。これで、もし帝が崩御なんて事になった日には……。想像することも恐ろしいので、それ以上のことは考えないようにしているが、帝も高齢だ。後継者問題で揉めなければいいが……と懸念は尽きない。

だが、それはさて置き。目の前の書簡をどうにかせねば……身動きが取れないのもまた事実。
引き抜きや離職で減った自分の将軍府。派閥争いなどしている暇すらないのが現状だ。

『せめて、せめて、温かいご飯と風呂に入るだけの余裕が欲しい！
冷めた飲茶はもう嫌だ！』

それが、今、皇甫　嵩の願いであった。

そんな乙女？の願いをぶつぶつと呟きながら処理していく書類に中に、“とある人物”の名を見つけた。

そういえば…あいつどうしてるのか…そんな好奇心から、副官にちょっとした調査を依頼したのだったが……。

幾日か後、報告を聞き、行き場のない怒りが込み上げてきたことは、決しておかしいとは言い切れないだろう。

調査結果を要約すると……宇練　銀閣……袁家の別宅にて、寝て、食べて、飲んで、寝て、いちゃいちゃ？して、遊んで……の繰り返し。以上報告終わり。

「仕事仕事で自由がない私に対しての挑戦か！　この野郎！　ゆるさん！」

完全な八つ当たりであるが、もはや平常心など欠片もなく、完全に眼が逝っている皇甫　嵩に逆らえるものなど……この将軍府にはいなかった。

そうして、ここへ可哀想な生け贄は呼び出されてしまったのだった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「まったくもって、信じられないのですよ」

「まったくもって、激しく同感です」

文句を言いながらも、その手と眼は忙しく動いている。あの山のような、果てしなく積まれていた書簡も今や半分に減っている。二人の処理能力は明らかに自分のそれを超えている。ここまで優秀であったことは驚きでもある。

「文句言ってないで手を動かせ！お前達が働かねば……わかっているだろうな？」

どこぞの悪党のように急かす……皇甫　嵩もまた忙しく書類を裁いている。在る意味異様な熱気が篭もるこの部屋で、皇甫　嵩・程立・徐庶の三人は昨日から働き詰めだ。その成果により、出口が見えてきたことがなにより嬉しかった。故に軽口も出、ニヤニヤしてしまうこともしかのないことであった。

「そんなことを言うなら、さっさと文官を雇いやがれ！なのですよ」

「まったくです。そして、早く銀閣様を解放して下さい！」

人質を取られた哀しき乙女達は、悪徳将軍の罠にはまり……現在に至る。

ただ少しだけ、皇甫　嵩を弁護するならば、こうなったことは“予想の少し斜め上”であることだけは言っておきたい。それでも、半分は思惑通りなのであるが。

「仕方がなかろう。献様の頼み事を私が断れるワケがないのだから。だが、これらが落ち着いた暁には、必ず約束は守る……つもりだぞ？たぶん？」

「何故そこで疑問系！なのですか」

「はっきりしてもらわね困ります！」

何故に彼女達がココで皇甫　嵩の手伝いをしているのか？
それを説明するには、少しばかり時間を遡らねばならない。

…………………………………………

「だから、私の手伝いをしろ…と言っているのだ」

「はぁ？ワケがわかんねぇよ！」

「お、お前は…この現状を見て何も思わないのか！うら若き乙女が！何日も風呂にも入れず！冷めた飲茶しか食べれない！知ってるか？小龍包はな！冷めるとゴワゴワモサモサして超不味いんだぞ！なんでココの連中は私にこんな物しか持ってこないのだ！私は将軍だぞ！偉いんだぞぉぉぉぉぉ！」

「・・・・・・・・」

「ハァハァハァ……銀閣！こんな環境を見て……お前は何とも思わないのかぁぁぁぁ！」

「い、いやぁ……突っ込みどころ満載でなんて言ったらいいのか困るな」

「だぁかぁらぁ～私を手伝う…と言え！いえ、言って下さい！頼む！後生だ！私を助けてくれ！でもって、お前に付き従うあの二人にも口添えしてくれ！」

「……しょうがねぇなぁ……だが断る！」

「なんだよ！いいじゃねぇか！頼む！この通り！ちゃんと報酬は払うし、なんなら仕官も斡旋ってか……私のところに永久就職させてやってもいいぞ？」

「断固として断らせてもらおう」

「なんでだよぉ～頼むよ～助けてくれよ～」

そんなやり取りをしていると、『コンコン』と扉を叩く音。どうやら訪問者がやってきたようだ。

「おい、将軍様。誰か来たみたいだぜ？」

「あ～今…手が離せん。お前出てくれ」

本当に人手不足なんだな……と心底思いながら扉を開けると、ちんまい女の子が佇んでいた。

「将軍様は大変お忙しい模様ですが、お約束などございましたでしょうか？」

どこぞの執事か！というような変貌ぶり（仕草と口調）で対応するのであるが、少女それに合わせるかのように丁寧な口調で銀閣へと取り次ぎを頼んだのだった。

「将軍様、お客様ですよ？“協が来たと伝えて下さい”との事ですが？」

銀閣からの言葉を聞いた皇甫　嵩は“何！”と顔を上げ、ゴミと書類だらけの部屋をかき分け、扉まで駆けつけた。

「献様！」

部屋の中へ少女を招き入れてすぐ、片膝をつく皇甫　嵩。どうやら“やんごとなき方”であることは銀閣にも理解はできた。

「酷いではないですか陽。帰ってきたならば私のところへ来てくれてもよいものを。まぁ、貴方が忙しいであろうことは想像していましたが……酷い有様ですね」

とても客人を招き入れるには憚る部屋の現状に、怒りから、驚き…というよりも呆れに表情を変え“協”と名乗った少女は周りに目を巡らせた。

“陽”というのは皇甫　嵩の真名であるから、“献”というのは少女の真名なのであろう。つまり、真名で呼び合う彼女たちは、ことのほか親密な関係であるといえよう。

「申し訳ございません。なんせ……この有様。私としましては、すぐさま……え？献様？」

謝罪を口にする皇甫　嵩から……協は鼻を袖で押さえながら後ずさ

っているのだ。

「陽……貴方……くちゃいです。なんですかその臭いは！体臭もそうですが、その服から何か汁ものの臭いや…なにか変な臭いもします」

さらに距離をとりながら、皇甫　嵩の臭さを指摘する。それもそのはず、何日も風呂に入っていないことは元より、食事のこぼし汁、その他乙女的には口にできない……そんな臭いが染みついていた。

「こ、これはですね！仕事が溜まり過ぎてまして、湯浴みをする暇さえ許されない状況に追い込まれておりまして……その、そんな顔されると……凄く傷つくんですけど……」

両手を地に着け、さめざめと涙する皇甫　嵩。その胸の内からは行き場のない怒りが沸々と湧きだしていた。

『私はこんなに頑張っているのに……頑張っているのにいいいいい！！』

協に指摘されたこと、戦後処理、宮中での理不尽な扱い、馬鹿官僚共の不始末や嫌がらせ……そんなことがリフレインされ、心はすでにダークサイドに落ちていた。すくっと立ち上がると大魔神張りの怒りの形相で銀閣を指さし……。

「全部お前のせいだぁぁぁぁぁ！」

と力一杯叫び声を上げた。まさに八つ当たり。責任転化。まったくもって困った人である。

当然のように指された指を凝視しながら、“困ったねえちゃんだなオイ！”とあきれ顔な銀閣であるが、長年の経験からここで反論しても火に油を注ぐだけなので、落ち着くまでそっとしておくことにした。

28話（後書き）

・・・・・・・・・・・・・・・

楽しんでいただけると嬉しいです。

２９話

・・・・・・・・・・・・・・・・

「ところで、献様がここまでお出でになるとは、何か緊急なことでもありましたか？」

自分の臭さと再認識した皇甫嵩はさらに３歩離れて協に問う。

“おお！”と思い出したかのように、その言葉に反応し目を輝かせる少女。

「そうでした、余りの臭いに目的を忘れてしまうところでした」

聞く者にとっては、あんまりな言葉だが、彼女に他意はない。あくまでも素直な心の内を言葉に下に過ぎない。だが、少しばかり傷ついた乙女？が約一名いたかもしれないが。

「うっ……それで、御用向きはなんでしたか？」

「あれですよ、陽。そなたから今回の戦いのことを聞きたいと思ったのです。宮中の者は発端と結果しか知りません。私は、もっと…こう…斬った張ったの…本物の本当の戦いというものの話を聞きたいのです」

何十年かの降りの大きな戦。加えて、諸侯でなく、平民達が蜂起し

た戦としては近年では最大級のもの。協にとっては初めての身近な戦話となろう。宮中に置いては“帝の御威光のお陰で華麗に勝利した”と奏上されていることからも、協にとっては気になって仕方がなかったのだ。

「そうですか（退屈姫だからな…献様は……）しかしながら、この部屋の様子でご理解いただけるかと……」

どれだけ忠を捧げた姫の為とはいえ、この現状を放置したままにはしておけない。ぶっちゃけ、姫の退屈心を満足させるためだけに政務を停滞などさせられない。『だが、しかし、いや、それでも……』と心の中の葛藤を飲み込みながら、政務が落ち着いてから伺う事を告げたのであるが、協は素直に引き下がらない。今、このやり取りをしている時間すら惜しいのに……そんな心の叫びは誰にも聞こえない。聞こえないが、そういえば?と、空気のように他人の振りをしている……いや、書簡の壁にもたれて居眠りしている客人のことを思い出した。

「なぁ銀閣。私は今、良いことを思いつきました……おい!銀閣!聞こえていない振りするな!銀閣!」

「ふわぁぁぁぁなんだよ。オレ、今……寝てたんだが?」

「わかってる。わかってるから!だから起こしたんだろうが!」

「いいって、無理するなよ。オレはまだ寝ていられるからな?大丈

夫、気にするな」

「ちがう！間違っているぞ！てか、起きろ！寝るな！私の話を聞けぇえぇ！！」

二人のやりとりが余程可笑しかったのであろう。クスクスと笑いをこぼした少女は、笑いが止まらないのか……お腹を抱えて涙目になっていた。

「陽、こちらの方を紹介しては貰えませんか？」

純粋な笑いは気分を爽快なものに変える。少女はいつになく、よい気分で銀閣の紹介を受けた。

そして、今回の遠征にて少なからず活躍したことも耳にすることとなった。

“軍師”と紹介されては“軍医”と訂正し、“凄腕”といわれては“駆け出し”だと訂正する。

「ならば、あなたにお願いしたほうがいいみたいですね？陽はこの通り忙しいようですし……」

「ええ、かまいません。どうぞどうぞ、お連れ下さい」

本人の承諾無しに進む話を苦々しく思いながら、“はぁ～めんどくさいことになった”と吐き出すのだった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ふわぁぁぁぁ………眠いな」

貴族の令嬢とは何故に…こんなに、パワフルなのか。
このちんまい身体のドコに…こんな体力が秘められているのか。
これが巷でいう“乙女の秘密”というヤツなのだろうか？

よくよく考えれば、この世界の女達の能力の高さには偏りがありすぎる……というか、自分の知る歴史とは性別が逆転していたりするわけであるが、すでにそんなことはどうでもいいことだ…と結論に至る。
自分の力でどうしようもないことを、どうにかしようと考えたところで時間の無駄だ。

夜通しアレやコレやと話しをせがまれ、結局徹夜を強制させられた銀閣は、“やっと電池が切れた協”の後始末を部屋の外にいる侍女に任せ、フラフラとした足取りで与えられた部屋へと移ったのであった。

「やっと眠れる……」

そう呟き、寝台に倒れ込んだのだった。
外では雀がチュンチュンと朝が来たことを知らせていたのだが、銀閣の耳には届くことはなかった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

場所は変わって、とある寝所。
夜叉を背負った……ような空気を纏う二人の少女。

「帰って来ませんね……」

「朝帰りとは……いい度胸なのです」

「風さん……まだ、帰ってきてませんよ。それに、銀閣様ですよ？何か厄介ごとに……」

「はい、風もそう思うのですが～言って見たかっただけなのです。妻的な立ち位置で」

何気に危険な単語が混じっていたが、出向いたまま戻らぬ銀閣を心配していることには違いなかった。
なんにせよ、"厄介ごとに巻き込まれやすい体質"であることに二

人は気づいているのだから。

「では、こちらから出向くとしましょう」

「準備は既に出来ているのですよ～」

一応……何が起きても対処できるだけの装備を調え、二人は、銀閣が呼び出された将軍府へ乗り込んでいくのであった。

「おお……そろそろ来る頃だと思っていたよ」

書類や竹簡が山のように（決して揶揄ではない）敷き詰められた部屋の奥から、モゾモゾと人の気配がしたかと思うと、煤けた……いや、窶れた姿の人物、この部屋の主、この将軍府の主でもある皇甫嵩（こうほすう）が姿を見せた。

この有様はいったいなんだろうか……疑問に思いながらも、直接は関係のないことである。

ヨロヨロと立ち上がる将軍の言葉に耳を傾けることなく、広い部屋の中をキョロキョロとする二人組。

だが、お目当てのモノは見つからなかったようだ。

「では、将軍……キリキリと～吐いてもらうのですよ？」
「隠し事は無しでお願いしますね？」

ゴクリ……弱っているとはいえ、将軍の地位にある武人に唾を飲み込ませるだけの気概というか、何かを背負った夜叉がそこにいた。

「「なんですとぉぉぉぉ！」」

驚きの声を上げる二人を尻目に、皇甫　嵩は自らが考案した作戦通り（現実逃避しながら…）に話を進めていく。

銀閣が帝に一族に連なる“やんごとなき方”に連れ去られた事（本当は人身御供）。
若く年頃で、色々と“持て余している”方なので、満足されるか、飽きられるまで宮中から解放されることはない（わけでもない）。
私が直談判すれば、返してもらえるだろうが、なにぶんこの有様である、これらを処理しないことには身動きがとれないこと（これは本当！切実に！）

と二人に説明する。

「無官の私たちには……これより奥の宮中へ足を入れられませんし……」

「はぁ～仕方がないのです。諦めて帰りましょう」

そういうと、トコトコと出口へと歩き始める。

「ま、ま、ま、待て！ちょっと待て！早まるな！いや、諦めるな！」

そんな二人の背に向かい何故か必死に呼び止める皇甫嵩（こうほすう）。

彼女は知らない……程立・徐庶の口元が少し吊り上がっているのを。

「いえいえ、忙しそうな将軍様の貴重な時間をこれ以上風（ふう）達の為に浪費させてしまうわけにはいかなのですよ」

「そうですね、果報は寝て待てと申しますし……ここはお暇しましょう」

「いやいやいやいや……だから！待てって！わかった！わかったから！」

「およ？なにがわかったのでしょうか～風（ふう）にはさっぱりなのですよ

？」

結局のところ、想定の倍額以上の給金を約束させられたものの……
優秀な助手を一時的に雇えた皇甫　嵩は安堵の息を吐き出した。

「これで、やっと風呂に入れるな……」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

とある名家の別宅にて……

「ねぇ、最近どうも様子がおかしいと思わない？」

「ああ、オレもそう思っていたところなんだ」

コソコソと“ある人物”を盗見しながら、ヒソヒソと囁き合う二人は互いが感じた疑問を確認する。
いつもはすぐに諍いを起こす二人だが、『主』と仰ぐ人物の様子が

ここ数日おかしくなっていることに対しての危機感がそれを許さない。
そして、今日……宮中より戻ってきてからの不可解な行動はいったい何を示しているのか？

二人の主である曹操は、宮中での政務の傍ら、各官僚達への根回しに動いていた。
数日後には、新しく与えられた領地への赴任を控えていたが、中央との繋がりも疎かに出来ない。いつ何時難癖をつけられ、解決困難な問題を突きつけられては困るからだ。使いたくはなかったが、一族の権力と財力はこういうときに役に立つ……自分の持ちうる手札が多ければそれに越したことはないのである。

だが、そんな折り……曹操は見てしまった。

気怠そうな表情の男は、部屋からでると侍女に案内され別の部屋へと消えた。別に、変なことでもなければ、不思議な事でもない。そこは離宮……浮き世とは時間の流れが違う場所。何がいつ起きていても、起こされていても、それを咎めるモノなどいないだろう……この離宮の主である劉協様を除けば。

だから、曹操も気にするほどのことではなかった日常的に起きている情事の一コマでしかないのだから。
ただ、その見覚えのある男が出てきた扉の向こうが……この離宮の主が住まう部屋でなければ……だ。

突然の出会いに驚愕するものの、声を掛けるには遠すぎて、急ぎ近づくには他の目がありすぎた。
茫然とその様子を見送り、我に返っては何故か……急ぎ足でその場

を去ってしまった。

1度目は、月夜の下で。
2度目は、雑踏の中で。
そして、3度目は……早朝の離宮にて。

曹操は思考の海へと沈殿していく。あの男は何者なのか……。
早朝の離宮に平然と出入りを許される身分。
劉協様から厚遇を得られているであろう扱い。
しかし、そのような男の話など、今の今まで聞いたことがない。
子飼いの諜報員達ですら知り得なかった事……なのだろうか。
劉家に係わる秘事……もしくは……。

その解は得られないまま、時間だけが過ぎていく。

「まったく……どういうことなの。私がこんなにヤキモキするなんて……」

そんな呟きは扉の外で耳を押しつけている者達には届かない。

29話（後書き）

・・・・・・・・・・・・・・・・・

忘れられた頃に更新です。

すみません。

リアル都合でなかなか………。

楽しんでいただけると嬉しいです。

３０話

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

離宮に拉致？された銀閣であるが、あれから数日が過ぎ去った。
まるで浦島太郎になったかのような……そんな気分にさせられるが此処を脱出するに至ってない。
なんだかんだと理由をつけては引き留められているのだが、一番の理由は帝立書館院への出入りを許されたことにある。

しかも、皇帝一族と許された極一部の限られた者しか入れない“奥の院”への入室（もちろん劉協同伴）が許可されたことが大きい。
本来の目的を“思い出した”銀閣にとって秘蔵の書に記された“あれやこれや”を読み耽ることは非常に有意義な時間の過ごし方であった。

この書庫にある書物を隈無く読み解けば確かな答えがなったかもしれないが、この膨大な書の海を泳ぎ切るには時間がかかりすぎた。
光武帝がこの地に建ててよりの書は勿論のこと、それ以前時代からの“文字”が記されたあらゆる竹簡・木簡が収集された歴史と知識は一個人が飲み込むには量が多すぎるのである。

ただ、自分が望む答えとなる手がかりになること……いや、なりそうなことがいくつか得られた。
故にそろそろ脱出を試みたのであるが、この離宮の主“劉協”にまた引き留められ、最後の晩餐へと招かれたのであった。

「ささ、遠慮せずに召し上がって下さい」

劉協の声で始まる二人きりの晩餐。私室に運び込まれた長いテーブルには色どりの料理……到底二人で食べきれる量ではないのだが、余ったら余ったで使用人たちが美味しく頂くそうなので心配はない。銀閣の稼ぎ（……あるのか？）では、一皿であっても手が届かない高級料理であるが故に、自然と箸が進む、共に出される酒も特級品であるから尚のこと。

「こうして……銀閣殿と食事をするのも最後かと思うと寂しいですね」

劉協は皇女である。

皇女であるが皇位を継ぐ立場ではない。それは、八つ年上の姉“劉弁”がいるためである。

二人の皇女は年が離れているからであろうか、とても仲が良かった。

劉弁は何かと聡い妹を可愛がり、劉協は雄大な姉を尊敬していた。

それ故に聡い劉協は思うのだった……

『姉上の足枷になってはならない』

姉が誰気兼ねなく、帝位に就くために自分は担がれるワケにはいけない。権謀術策が渦巻くこの宮中に置いて派閥を作るわけにはいかない。自分が“帝に相応しくない”と思われなければならない。

それを自覚したその日から……劉協は“退屈姫”の二つ名で呼ばれ

る我が儘姫となったのだった。

そんな彼女であるが、皇女は皇女。皇帝の娘であることには変わりなく、父、母、姉とを除けば周りは全て家臣。友を作ることも出来ず、また、胸の内をさらけ出せる忠臣も傍にはいない。いや、１人…皇甫　嵩がいるのだが、彼女は劉家に対しての忠臣であるので、本当の自分の“想い”までは知れずにいる。

一段も二段も立ち位置が違うことが皇帝の娘であることが原因ならば、自分は劉家になぞ産まれたくはなかった……そう思うことは数え切れないほどあった。

であるから、媚びるでもなく、敬うでもなく、気負うでもなく、気兼ねすることもなく“同じ目線で”語りかけてくれる目の前の男の存在をありがたく思っていた。

劉協が自分のことを皇女だと明かしても『へぇ～本物の姫さんってわけかい』と言い、それ以降劉協のことを“姫さん”と呼び、自然体で接している。聞けば異国からの旅の途中で此処に辿り着いたとのことであるが、その旅の話は尽きることなく“本物の外の世界”が知ることができ劉協はとても喜んだ。

劉協としては銀閣を自分の元へ留め置きたいと思ってはいたのであるが、目的がある旅の途中であることも聞いていたので強要はできない……と強権発動を控えた。それをすることによって、目の前の男に嫌われる可能性があることも理由のひとつであるが。

だが、ここで手放してしまうには……非常に心残りになる。こんな時代であるから、これが最後の顔合わせになってしまう可能性のほうが高い。なにか良い手立てはないものか…そんな想いが何故かしら湧いてくるのであるが、その真意がどこにあるのかは劉協自身も理解はしていなかった。強いて言えば“乙女の勘”というやつであろうか。

食も酒も進み、この数日間の思い出話に華を咲かせたところで、劉協は自分の望み…真成る本当の願いを銀閣へと切り出した。

「銀閣殿に……お願いがあるのですが、如何でしょうか？」

急に真剣な表情になった劉協に銀閣は…ややたたずまいを正し、『伺おう』と言葉を返した。

その言葉を聞いた劉協は、では……とゴクリっと覚悟を決め、言葉を続けようとしたのであるが、緊張のあまりすぐに言葉を出せずにいた。

酒で勢いをつけたつもりであったのであるが、なにぶん初めてのことであり、脳内では“　早く言わなきゃ早く言わなきゃ……”と焦りがグルグルとしながらも“　落ち着け落ち着くのだ献！私は出来る！私はやろうと思えばちゃんと出来る娘……のはず！”と念じ心を落ち着かせようともしていた。

少しばかりの無言の時が、やや赤くなった顔をした劉協とまじめな顔で見つめる銀閣の間に流れた。

「そ、その……えっと…ですね、な、なんといいますか、実は……いえ、そうではなくて、あの……いえ違うんです、あわわ、違わないんですけど、ああ……その……」

なんとももどかしい……何が言いたいのかさっぱり理解できな銀閣

であるが、なにやら重大なことを告げようとしていることは察することはできた。
あたふたと手を動かしながら、頑張っている様子？は……なんとも可愛らしく見える。

「すぅ～はぁ～すぅ～はぁ～……では、ぎ、銀閣殿！私と共に……ともに……いや、あの、その……と、友達になってもらえませんか……」

深呼吸の後、勢いつけて話し始めたのであるが、最後のほうは……哀しいほど小さな声になっていった。
全ての力を使い果たしたかのように、ハァハァ…と息を荒くしながら、俯いた少し涙目の劉協の顔は真っ赤であった。

少し呆けながらも、ハッと我に返り、銀閣は思う。
皇女という立場からも、劉協は友達が少ないのであろう…と。ましてや洛陽から出たこともなく、宮中からもの外出もままならない立場であるのだから、気軽に話が出来る者に出会うことは稀なことなのではないだろうかと。
ましては銀閣は異国人。物珍しさも手伝ってのことではないだろうか…とも。なれば、この可哀想な姫の友の1人になることは吝かではない。というか面白いではないか……皇女と友人というのも。だが、彼女は大きな勘違いをしている……とも。

「残念だな……姫さん」

銀閣の言葉に、己の願いが否定されたと感づいた劉協はギュッと目を瞑り、力無く拳を握る。
だが、諦めればそれで終わりである。もう一度、言葉を出そうを顔を上げたところで、銀閣が柔らかい笑顔でいることに目を見張る。

「オレは……もう友達のつもりだったんだがね？」

なんとも酷い男である。なのにこの爽やかさは何だろう。気を抜くとすぐに眠そうな顔で欠伸ばかりしている様子とは随分ちがうではないか。そんな想いを胸に抱きながら、劉協は……自然を零れる涙を止めることができないでいた。
嬉しくても涙がでるんだ……初めてそれを経験したが故に改めてそう思ったのだが、なんだか悔しい思いもなきにしもあらず。自分を泣かせた（注：勝手に泣いただけですが）貸しはきっちり取り立ててなくては……だが、それは後でもいいだろう、今は、この気持ちを大切にしたい…そう思った。

３０話（後書き）

・・・・・・・・・・・・・・・・

やっと更新です。

遅筆ですが、楽しんで頂けると嬉しいです。

31話

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

部屋中に漂う濃厚な血の臭い。
部屋のあちこちには、拭き取られた後があり、初めて目にするモノは目を疑うだろう。
何度も、何度も、同じ事が繰り返されてきたような……そんな猟奇的な雰囲気を隠しきれない部屋。
そして、また今日もその犠牲者が血だまりの中に沈んでいた……。

コンコン……

部屋の扉をノックする音が響くが、返答はない。

コンコン……

再び扉を叩くが、やはり返答がない。

「まさか！」

主人より領地の名代を任されている将軍は、返事のない部屋の中へ急ぎ侵入する。

力任せに開いた扉は大きな音を立て壁にぶつかったが、そんなことを気にしている暇はない。
将軍が室内に目をやると、執務机には血だまりに沈む軍師の姿が。

「しっかりしろ！おい！気をしっかり持て！」

将軍の声が響き渡るが、その声は届いているのか……
介抱する相手の口元からは、消えそうな声で……言葉が漏れだしていた。

「……だ、だめです……そんな……あぁ……」

「えぇい！戻ってこい！しっかりしろ！」

「……そこは……でも……あぁん……」

このままでは危険だ……拉致があかないと判断した将軍は、しかたなしに荒療治に移行する。

「余り使いたくはないが……仕方がない。夏侯妙才の力、存分に味わうといい！」

そう言うと、眼を瞑り、両腕を腰に添え脇を閉める。すぅぅぅ……と息を飲み込み、腹部は水月に力を溜め……カッと眼を見開く。

「稟(りん)！！起きろぉおおおおおおおおおお」

姉と共に“虎狼”と称される夏侯淵の雄叫びが部屋中にこだまする。大気が震え、壁が、床が、天井が、書庫が、地震のように揺れ、その声は机の上で“別世界”へ飛翔していた郭嘉の魂へ直撃を果たす。

「ぐはぁぁぁ……ハッ！私はいったい？……あれ？」

還ってきた魂を取り戻した郭嘉は正気に戻るが、その魂に負った疲労と流し過ぎた血液（鼻血）の為にふらついてしまう。

「やはり、働き過ぎではないのか？今日のところは私が引き受けよう。部屋へ帰りキチンと休め」

夏侯淵の言葉に首を横に振り、机の上を雑巾で拭き始める。だが、身体に力が入らないことは郭嘉自身が一番わかっていることだった。

「そうですね。じゃぁ…お言葉に甘えて少しだけ横になりますね」

「少しじゃなく、今日は休んでいいのだぞ」

主人である曹操が、黄巾賊討伐の恩賞として新たな領地を得たという情報は、すぐさま陳留に伝えられた。荀？から届けられた書簡を読みながら、曹操の懐刀“夏侯淵　妙才”は、これからの領地経営の対応をどうするべきか思案する。本格的な始動は、曹操が洛陽から戻ったからになるであろうが、その下準備は大急ぎで行わなければ間に合わないだろう。行政のまとめは、荀？の担当であるが従軍しているので、自分と郭嘉でまとめなくてはならない。喜ぶべきことであるが、荷が重く感じることも正直な気持ちであった。

「まぁ、領地が増えることは悪いことではない。華琳（かりん）様のお力が更に増すということでもあるのだからな」

誰にでもない、自分に言い聞かせるように呟いた夏侯淵は、急ぎ足で郭嘉の執務室へと足を向けた。
部屋に入ると、自分に届けられた書簡をそのまま郭嘉に渡し、内容の齟齬がないように確認を促す。

「素晴らしいことです！これでまた一歩華琳（かりん）様の覇道に近づきましたね！」

まるで自分のことのようにキラキラとした目で、喜びを表現する郭嘉を見ながら、『ああ、よかった、本当によかった……』と夏侯淵も呟いた。
書簡には、曹操は勿論のこと、夏侯惇も北郷も無事であり、負傷し

た兵、死亡した兵は微細である旨も記されていた。
夏侯淵としては、皆の無事を喜びながらも、姉である夏侯惇の活躍が直接見れなかったことが残念で仕方がないが、皆が帰ってきた後にゆっくりと話を聞くのが楽しみであった。

そんなわけで、政務に勤しむ二人であったが、数日後、拝領した許昌・長沙からの調査結果を手にしてから激務が幕を開けた。
予想以上に荒廃した領地、腐敗した官僚達、そして黄巾賊の残党達。人を使わすにも、兵を送るにも、物資を送るにも、とにかく人手と金がいる。先行投資が必要なことはわかってたのだが、無い袖は振れない。今は陳留領内を引き締め、無駄を極力無くし、新たな領地の運営資金を作り出さねばならない。最終的には曹操の承認が必要になるが、前段階までは進めておかなくては……。

そんな折り、疲労、寝不足、ストレス、その他もろもろで、郭嘉のテンションゲージはＭＡＸを越えてしまった……。

「ふふふ……これで華琳（かりん）様の覇道は加速。そして、私の野望も……」

急に立ち上がり、灰色の瞳で虚空に向かい喋り始めた郭嘉。その様子を時間（とき）が停まったかのように見続ける夏侯淵。時間の流れが明らかにおかしくなった二人の空間に突如襲いかかる妄想の嵐。

ツツツ……

「だ、だめよ、銀閣君……」

ポタっ……

「まだ、日が差しているじゃない……」

ポタポタっ……

「それに、こんなところじゃ……」

ポタポタポタっ……と、したたり始めた赤い液体に気付かないまま、致命的な妄想は更に加速してしまう。

「……だ、大丈夫。心配しなくても私……あは、うん、私も、ええ、わかっているから……だから、ね……お願い……ああ……」

ぶしゅぅぅぅぅぅぅぅぅ

何を妄想していたのかは本人にしかわからないが、とにかく勢いよく吹き出した液体は、執務机はもちろんのこと、書簡、竹簡、床、書庫を赤く染めていく。

それを見ていた夏侯淵は、ハッと我にかえると急ぎ郭嘉の鼻を塞ぎ、

血止めの処理をする。

「最近は治まったと聞いていたが……無理をしていたのだな」

介抱しながら、早く主人と姉達の帰還を心より願った夏侯淵であった。

郭嘉が鼻血の海に溺れている……そんな頃、洛陽では……

「色々とお店を廻りましたが～ここの飲茶が一番だと風(ふう)は思うのですよ～」

「そうですね。でも、梅梅(めいめい)飯店も甲乙つけがたいかと」

「ぬぅ～確かにあそこの大根餅は風も気に入ってますが～味付けがちょっと濃いと思うのですよ～」

「そう言われると……そんな気もしますね……ふむふむ」

“午後の飲茶時間（井戸端会議）”と称される乙女達の休憩時間。
昼下がりの繁華街では、色んな流行や時事、噂話に華を咲かせる乙女達があちらこちらで飲茶っている。
そんな中、暗黒将軍府より生還を果たした銀閣達が、とある人気の飲茶店の店先で軽食をつまんでいた。

「臨時収入も入ったことですし～そろそろ次の準備にかからないとですね～」

「ならば一層気をつけませんと。銀閣様は……なにかと巻き込まれやすいですから」

「風（ふう）もそう思いますよ～銀閣君は女の子に甘過ぎだと思うのですよ～」

「兄さん……モテ気到来だなんて思ってるんじゃねーだろうな」

「・・・・・・」

少年姿に身を窶した銀閣は、無言で叉焼饅頭をパクついていた。何かにつけて、程立・徐庶・宝慧に攻められている（昨日の晩から……）ことに、少し苛ついてきたが、二人を心配させたという事実は誤魔化しようが無く、グッと我慢の男の子状態であった。

「あら、珍しいところで会うものね？」

なにかと目立つ三人に気が付いた猫耳フードの少女?から声がかかり、振り向いた銀閣は……ややげんなりとした表情になる。

「どうしたの?随分と気落ちしているようだけど?」

「いえ、別段……まぁ、色々とありまして」

「桂花(けいふぁ)ちゃんもお茶ですか?」

竹簡を抱えた荀?が、銀閣達が陣取る席の一角に腰を下ろすと、奥から店員が急ぎ現れる。荀?は『いつもの』とだけ言うと、店員は『畏まりましたお嬢様』と一礼をして去っていった。

「で、あんた達。どうして洛陽にいるの?」

唐突に疑問を投げかける荀?であったが、銀閣達は固まっていた。

「ちょっと!聞いているの!」

相変わらずの上から発言だが、それ自体が荀?の個性であると知っている三人は、そんなことは気にしていない。それよりも、店員が荀?に言った『お嬢様』発言に気を取られていたのだ。

「まぁ、桂花ちゃんも、強いて言うならば、荀家のお嬢様ですからね～ふむふむ、なればこのお店は……桂花ちゃんのお店なんでしょか？」

「ふぅ、あんたのその洞察力って、やはり侮れないものがあるわね。まぁ、隠してもしかたないことだけど、この店は荀家の資本がはいっているわけよ」

「なるほど、つまりここが洛陽における荀家の情報収集拠点の一つ……というわけですか」

「むぅ……ホント、あんたたちのその頭……惜しいと思うわね」

銀閣を置いてきぼりにし、二人の知謀の士は少ない情報から本質へと辿り着く。

この店、“娘娘飯店”は荀家資本により設立された飲茶専門店。洛陽内に数店舗、長安、漢中、江陵などにも出店している繁盛店である。“安い・美味い・早い”を店の心得として掲げた荀家の資金源の一つ。そして、その裏では各地の情報を収集する為の拠点となっていた。

荀家の祖、荀子は性悪説や孫卿新書の元になる書物とは別に、家中の秘として“人・物・金・報”に関する書を残したとされ、子孫はその教えを守り今日に至る。荀家の拠点は潁川郡である。政治の中心地である洛陽から、そう遠くはない距離に位置する場所に根をはる名門荀家が、常に一定の権勢を保っている理由には、こういう弛まぬ努力があるのである。

「まぁ、私も家に帰ればお嬢様って呼ばれていることは認めるわ。でもね、今、この場にいる私は、ただの荀？　文若よ。だから気にする必要はないわ」

自分の言った言葉に照れたのか、少し赤みがかった荀?は、いつもとは違うかわいらしさが印象的であった。

31話（後書き）

・・・・・・・・・・・・・・

やっと更新できました。

楽しんでいただけると嬉しいです。

３２話

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「かくかくしかじか……かくかくうまうま……なわけなのですよ～」

荀?を含む……曹操一家（この名称が正しいかどうかはさておき）は、銀閣達が黄巾賊討伐に加わっていたことは知らない。故に洛陽にいる理由を説明しなければならないワケである。
ただ、重要なことは隠しつつ、うまく話をつなげる程立と徐庶の阿吽の呼吸は、さすが旅を共にしてきただけのことはあった。

「へぇ～何、それじゃぁ……今は袁術のところにいるわけ？」

「まぁ、お世話になっていますね。美羽ちゃんが“どうしても”って言うので～仕方なくなのですよ」

「え、それって袁術の真名じゃないの！あんたたち、そんな仲だったの？」

「まぁ、昔、女南で仕官していた時期がありましたから～（嘘）」

「へぇ～それは初耳だけど……まぁいいわ。それよりも………」

獲物を狙う猫娘のような目で、荀?は銀閣に優しく微笑んだ。

「貴方達も既に知っての通り、華琳(かりん)様が新たな領地を拝領したのだけれど、人手がね……特に優秀な頭脳を持った人間が是が非でも欲しいわけ。まぁ、それはどこの陣営でも同じなのでしょうけどね。もし、仕官を望むなら、他の二倍……いえ、三倍の給金を出すわよ！袁術のところなんかより絶対に沢山出すから！」

「むぅ～……そうですね～なかなか魅力的な話ですね～」

「皇甫(こうほ)　嵩(すう)様のところの三倍なら、非常に魅力的だといえますね」

「え、なに……あんたたち、左中郎将の所にも出入りしてるの！？ちょ、ちょっとそれは予想外だわ……将軍府直属軍師の給与の三倍……う～ん…う～ん……」

程立と徐庶の二人は、唸りだした荀？を楽しそうに眺める。

（ふふふ……いい感じに勘違いしてくれているようですね～）

（あまりからかうと、後戻りできなくなりますよ。程々にしておかないと）

荀？に聞こえないように、こそこそとしている二人は、とっても楽しそうだ。

しかし、彼女たちの耳は、ブツブツと呟いている荀？の思考的独り言を聞き漏らさなかった。

「……ちょっと厳しい……けど……華琳様には……荀家からの援助資金……なんとか……そうね、それなら……それに、彼女たちが来るなら、銀閣君とも……」（チラッ）

あらぬ所を見つめながら、独り言をブツブツ言っている荀？の姿はある意味……怖いものがあったが、それよりもゾワゾワっとした寒気を両脇から感じた銀閣の超感覚は正しいと言えた。

『門前の虎、両脇の狼……』

嫌な予感がヒシヒシとする中、程立と徐庶は何も無かったかのようにまた会話を再開する。

「そうですかぁ～華琳様も、統治すべき領地が増えて“優秀な軍師”である桂花ちゃんだけでは政務に手が回らない……ということなのでしょうね～」

「なるほど。“名高い軍師”である桂花殿だけに任せきれないほど領地が広がってしまったことですし……華琳様も大変なのでしょうね」

「ちょっ！貴方達が何を考えているかは知らないけれど！曹操軍の筆頭軍師である私は、華琳様に一番愛されている存在なの！つまり、

華琳様の覇道を支えは私独りで十分なのよ！領地が増えたからって私にとっては楽勝よ楽勝！そこらへんのことはちゃんと認識しておきなさいよね！」

いきなり激昂した荀？を、二人は申し訳なさそうな表情で見つめた後、笑顔で言葉を紡いでいく。

「ふふふ……そうですよね～桂花ちゃんは“とっても優秀な軍師”ですから～政務も軍略も独りで楽勝ですよね～。風はちょっと勘違いしていたようですね～申し訳ないのです」

「桂花殿の優秀さはこの洛陽でも頻繁に耳にしますから……桂花殿のように広い視野で物事を推し量れる素晴らしい知謀の士はなかなかいませんからね。華琳様からのご寵愛も納得できるというものです」

二人から持ち上げられ、非常に満たされた様子の荀？は鼻息を荒くしながら、店員にあれも、これもと追加注文をしていく。

「貴方達、やっと私の偉大さを理解できたようね！」

「ええ、もちろんなのですよ～」

「ふふふ、ああ、怖いわ……私の秘めたる才能が怖い。ささ、食べなさい、払いはぜ～んぶ私が持つから！」

「おお、知謀だけでなく懐も広い。桂花殿にちょっと嫉妬してしまいそうですね」

「しかたないわ。私の素晴らしさは隠しようがないから！」

テーブルの上に所狭しと並べられた料理に、うまうま……と箸を進めながら、荀？の華琳様自慢とそれを支える自分の策を披露する話題で盛り上がっていく。

湧いてくるニヤニヤを笑顔で隠し……“ふふふ～ちょろいのです”なんて誰も考えていない。
たぶん……。

そんな中、ハッと我にかえった荀？は…ゴホンっ…と咳払いをする。

「それで……話を戻すけど、私はね、別にいいのよ、優秀だし、万能だし、華琳様に愛されているし。でも、貴方達がどうしても一緒に仕事をしたいっていうのなら、私が華琳様にもう一度推挙してあげてもいいのよ？そ、それに、華琳様の近くに居た方が安全なわけだし、給金も優遇するし、その、あれよ、銀閣君も色々と過ごしやすいんじゃないかって……それに、せっかく何かの縁で知り合えたわけだし……真名も交換しているワケだし……もう少し仲良く……って、べ、別に変なこと考えてる訳じゃないんだからね！」

真っ赤になりながら、いっぱいいっぱいな荀？。

『なんなんでしょうか～この可愛い生き物は……』と程立が思ってしまうのも無理がないほどのテンパリ具合であった。

『これが天の国の言葉で言う…“ツンデレ”というやつなのですね』と徐庶も似たような感想を胸の内に思うと共に、“これ以上の深入りは危険ですね。主に銀閣様の貞操的に”と感じていた。

「どうかしら……銀閣君は？」

お茶を少し飲み、やや落ち着いたのか……少し覗き込むような視線で銀閣を伺う荀？のフードに付いている猫耳が“ぴょこぴょこ”とせわしく動いているように見たのは、目の錯覚だろうか。

そして、両脇に座る二人から、“むぅぅ～”といった唸り声も、きっと幻聴に違いない。

『ああ…疲れてるんだなオレ……きっとそうだ……』

銀閣の独白は、彼の胸の内だけで吐き出され、急激な疲れを感じながらも、荀？への返答はしなければならなかった。

「お誘いは、とっても嬉しいです」

「なら！」

「でも、次の目的地へ行きたいと考えてるので……ごめんなさい」

「そ、そう……し、しかたないわね」

猫耳がペタリ…と垂れてしまった（ように見える）荀?は、はぁ～と独り溜息をついた。

「桂花お姉さん。旅が終われば、遊びにいきますね」

その言葉に、パァ～っと笑顔が咲いた。うんうん…と首を振りながら、「必ず来なさいよね！」と宣う荀?を見ながら……

『そんときは、こんな身体（少年）じゃないことを願うがね』

お腹も膨れ、そろそろお暇しましょうか……と徐庶が切り出し、各々が腰を上げたとき、荀?は通りの人混みの中に愛すべき主君を見つけ出した。

「あ！華琳（かりん）様！」

銀閣のお昼寝時間は……もう少し先になりそうな気配だった。

とある所の部屋の中では、皇帝：劉一族特徴である……濃桃色の髪の毛をいじりながら、昨日の事を思い出しニヤニヤしたり、ぼーっとしたり、ぶんぶんっと首を振ったりと……端から見れば奇っ怪な行動を繰り返している少女が独り。

「うへへ……友達できちゃった」

32話（後書き）

・・・・・・・・・・・・・・・

お待たせ致しました。
楽しんでいただけると嬉しいです。

ツンデレ表現は難しいです。

３３話

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

明日の出立を控えた朝、曹操は差し込む朝日で目が覚めた。

霊帝こと劉宏より太守の印を授かり、むかつく十常侍にも挨拶を済ませ、各官庁への根回しは昨日までに終わらせた。自分としては賄賂など唾棄すべきものだが、今のところは慣例を無視し清流を気取ったとしても、ここで嫉妬や恨みを買えば、領地へ戻った後、いらぬ厄介ごとが起きるのは目に見えていた。

故に、それなりの物を贈り、憂いを絶つことにしたのだが、欲にまみれた獣共（けだもの）の顔は卑しいの一言に尽きた。自分の覇道が成った暁には、必ずや亡き者にする腹づもりで、湧き出るむかつきは、酒の力で飲み込んだ。

少し飲み過ぎたのであろう、やや頭に痛みを感じるが……今日は、久しぶりの休日である。もう少し布団の中で過ごしていたいが、胃袋の鳴りが起きることを決意させた。

「ふぁぁぁぁぁ～。さて、起きないと。今日は何をしようかしら」

いそいそと寝間着から私服へ着替え、女中に朝食の用意を命じる。席に座り、茉莉花茶の香りを楽しみながら料理を待つ間、今日の行動予定を頭の中に羅列していく。

「幻想万華鏡書店で新作を見てみたいわね……後は、桂花（けいふぁ）の言っていた娘娘飯店と、秘蜜亭も覗いて……そんなところかしらね」

商業集積地でもある洛陽は、中国各地の名産、珍品が集まる場所である。自分が治める領内では入手困難なものも、以外と安値で手に入ることも…まま あり得る。しかし、書の類や芸術品関連、夜の小道具など……この洛陽でしか買えない物も当然のようにある。曹操もいくつか手に入れたい品を買い求める為に、外出する予定にしているのであるが、是が非でも…といった感じではないため、まったりとしているのだった。

今日は、護衛役を買って出た春蘭以外の部下には自由行動を許してある。皆、都会での最後の1日を楽しんでくれると良いのだけれど……そう思いながら微笑む曹操はいつになくスッキリとしていた。

「さて、私も出掛けようかしらね……春蘭！春蘭！」

少し遅めの朝食を済ませた曹操は、最も頼りにしている護衛を呼ぶ。飛びかかるかのように曹操の前にやってきた夏侯惇は、『はい、華琳（かりん）様！おはようございます！お呼びですか！』と直立不動で挨拶をする。もし、彼女を幻視出来る者が居たならば、その腰と臀部の間に……フサフサとした尻尾が、ブンブンっと振られているのが見えただろう。

「出掛けるわ。用意して頂戴」

「大丈夫です！もう出来ています！」

昨日の晩から……『ふふｈ……華琳（かりん）様をお出掛け……二人っきりでお出掛け……』と上機嫌だった夏侯惇は、粗方の準備は既に整えており、いつでも出撃可能状態であった。

しかも、北郷と荀？には、決して邪魔は勿論、同行や追跡などもしないよう言い含めるほど楽しみにしていたようである。

「ふふ、用意のいいことね。なら、春蘭行くわよ」

馴染みの店に立ち寄っては、明日出立する旨を伝え、自分の新領地に支店を出すように要請をしたり。

露店を覗き込んでは、装飾品手に取ったり、軽食を買い夏侯惇と分け合って食べたり……と政務を忘れ、曹操なりに楽しんでいた。

（ひと時の平和……民の笑顔を守るのも執政者の勤め。早く戦乱を終わらせなくてわね）

目的の店で、何点か購入し、領地への移送を依頼した後、遅めの昼食を取るために飲食店街の一角にある娘娘飯店をキョロキョロを探し始める。

「だいたい……この辺りのはずなのだけど……」

「ああ！華琳様！あそこでは？」

目の良い夏侯惇が、通りの中から娘娘飯店の看板を見つけたようだ。
他の店と同じくらいに賑わいを見せている店先から、どこかで見たことのあるシルエットが手を振っているのは気のせいだろうか。

「華琳（かりん）様ぁ～」

激しく手を振り、自分の居場所をアピールする荀？の姿を……少し恥ずかしいと思うと同時に、愛らしいとも思っていた。

「ふふふ…」

「ぐぬぬぅぅぅ……桂花（けいふぁ）の奴……何故此処に！」

曹操の後ろでは、ぴょこぴょこと飛び跳ねている荀？を……睨み付ける夏侯惇が歯ぎしりしていた。
相変わらず仲が良いのか悪いのかわからない関係だが、このまま放置しておくわけにもいかない。

（全く……桂花といい、一刀といい、もう少し仲良くできないものかしらね……）

「まぁ、いいわ、春蘭……いくわよ」

「し、しかし、華琳様ぁ～」

「いいから行くわよ、同じ事を二度も言わせないで」

荀？のいる場所へと足を向けた曹操と夏侯惇であるが、そこに見知った顔があることに少し驚いた。

「あら、風（ふう）に雫（しずく）……それに銀閣。貴方達も洛陽に来ていたのね」

「お久しぶりです華琳様」

ぺこりと頭を下げ、程立達は挨拶を交わす。銀閣は相変わらず眠そうな目をし、めんどくさい事にならないうちに……と、この場を去りたいと思っていた。

「こうして同じ面子で顔を合わせるなんてね…世の中広いようで、狭いわね」

「そうですね～後は天の御使い様がいれば完璧ですね～」

程立から“天の御使い”という単語に、荀？は『げぇ～』と顔を顰

めた。荀?と北郷の仲はこの場に本人がいてもいなくても、宜しくない様子が少し垣間見れたが、徐庶にとってはどうでもよかった。

「そうね。そういえば一刀は何処に行ってるのかしら。春蘭?」

「えっ、ああ、一刀の奴でしたら華琳様が朝食を召し上がっている間に出かけていきました」

「そう、それで姿が見えなかったのね」

二人の会話を聞き、程立は“そういえば!”と手を叩く。

「風達は、ここに来る前に~天の御使い様に会いましたよ~」

程立は、この娘娘飯店に来る前に会った天の御使いとの遭遇シーンを曹操たちに説明し出した……。

(銀閣君には……もう少し男女の機微というやつを学んで欲しいのですよ)

程立と徐庶は、まだ眠そうな目をしている銀閣（いつものことだが…）の手を引きながら、昨日から今朝方の事を思い出し、少し腹をたえてていた。

いかに仕方の無いことであったとしても、一番心配していた（と自負している）自分達に謝罪の言葉や労いの言葉があってもいいはずなのだが、宿舎に戻ったところでの袁術の乱入があり、なんだかんだで有耶無耶になっている。しかしながら、自分から迫っていくのは……恥ずかしさもあるが、負けた気がするので……と考えている時点でもう手遅れなのだが……でも、この気持ちに気づいて欲しい……という葛藤を抱えているため、ややご立腹なのだ。

「風さん、風さん」

「は、はい?!ああ、なんですか～雫ちゃん?」

少しばかり思考の海へ漕ぎ出していたため、徐庶の呼びかけに気づくのが遅れたが、その視線の先にあるものを確認して、いましがたの呼びかけの意味を理解した。

平素を装いながらも、良く観ると…どこか挙動不審な人物が視界の先に映っていたのだ。

いつもと違う服装をしていても、あの髪の色と人相は忘れるはずが無い。そうあれこそ、“天の御使い”ということになっている男ではないか。

「北郷殿！北郷殿ぉぉ～」

あまりお近づきになりたくないが、知らん振りするのもどうかと思い徐庶は大きな声で彼に呼びかけた。
しかし、その声に気づかないのか、聞こえないのか……反応が無い。
だが、少しばかり動揺したことの気がついた少女が口元を吊り上げた。

「雫ちゃん～もう少し大きな声で“天の御使い様！”と呼ばないと気が付いてもらえないかもですよ～」

程立の提案に“ピン”ときたのか、しゅぅ～と息を吸い込むと、先ほどとは比べようが無いほど大きな声で……

「て～ん～のぉぉぉぉぉ……みゅぐううう」

叫びかけたのだが、超ダッシュで駆けて来た北郷に口を塞がれてしまった。

「たたた、たんま！聞こえてるから！聞こえてるから！」

「乙女の唇に無断で触れるとは、相変わらずのようですね～北郷殿は」

「いやいや、そんなふうに言われると、俺がなんかすんごい鬼畜み

たいにきこえるじゃん。違うから、勘違いだから、桂花の言葉を鵜呑みにしないように！俺はいたって紳士だから…さ」

警邏の者に聞かれたら連行されそうな程？の言葉に、力いっぱい否定するのだが、どこか胡散臭さを拭いきることはできなかった。そう、なにか、どこかソワソワしている気がするのだ。落ち着きが無いというか、心ここにあらずというか……。

「まぁいいです。して、北郷殿はどちらにお出かけでなのですか～」

ある種の予想をつけながら北郷の表情を探ると、程立の言葉にやや動揺している……のが読み取れた。

「えっ？　ああ、俺ね？俺さ、今日休みなんだ。それでさ、最近はさ、書類仕事もできるようになったからって超忙しくてね、それで、なんていうか……えっと、ん～……そう！なんか身体を動かさなきゃな～って思ってさ、それで…ね？」

「はぁ…鍛錬…でもされるのですか？」

「えっ？ああ、そう！それ！鍛錬！そんなんだよ。座ってばかりだと身体が鈍るじゃん？だから、こう、溜まってるヤル気を発散しようと思ってね」

「へぇ～流石は華琳様が認めた方…というわけですね～関心関心なのです」

「えへへ、そう？まぁそんなわけで、今日は俺の青龍刀を思う存分振り回すぜ！って感じなわけ」

「青龍刀？」

「あ！いや、いいのいいの、気にしないで！じゃ、そんな訳だから、俺行かなきゃ！また、な！あっ後さ、ここで俺に会ったのは秘密にしといてくれよな！頼んだぜ！じゃんな！」

ワサワサと怪しい身振り手振りをした後、足早に掛けていく北郷の後姿を、ただ呆然と見送った三人は、首を傾げながらも、まあいいか……と気にしなかった。

ただ、程立だけは、北郷が駆けて行った目的の場所には当たりをつけていたのであるが。

「そんな感じで、北郷殿は～とある街角の方へ掛けていきましたとさ、めでたしめでたしなのです」

何故か御伽噺風に〆た程立であるが、話を聞いて頭に“？”を浮かべている者と、ヤレヤレと思っている者と……ワナワナと震えている者が約一名。

「まぁ……休日に何をしようが個人の自由だけれど……問題を起こ

さなければいいかしら……ね」

「青龍刀？奴に使い方を教えた憶えはないのだがな……う～ん、一刀め、いつの間に……」

“パキっ”

「あんのぉぉ全身精液種馬男ぉぉぉぉぉ、朝一番から色街だなんて！やっぱり年中盛りのついた猿だったのねぇぇぇ、ああもう嫌！なんであんなやつが！春蘭、今から一刀を……殺してきて頂戴！それもできるだけ早く！そうしないと、穢れる！穢れるわ！この洛陽が穢れてしまうわ！」

程立の話を聞き、北郷の行き先を予想できた荀？は手にしていた箸を片手でへし折っていた。そして、続けざまに北郷への罵倒はエスカレートしていくのだが、乙女が口にするには酷すぎる内容に、銀閣は自分の耳を塞ぐ。

『なんでこう、あの兄ちゃんの話になると、こうも過激なことを言んだろうな……黙ってりゃ可愛いもんなのに……やはり女子（おなご）は…淑やかにかぎるな。とは言っても、腹黒いのも考え物だが……ハッ！』

身に付いた危機回避の本能が“逃げろ”と銀閣に警告する。

よくわからんが逃げなくてはならないようだ…と、胸の内で叫んだ

銀閣は、素早い動きで席から離れる。

しかし、銀閣は回り込まれた！

「なんてことだ……」

もちろん、銀閣は逃げられない！

「どこへ行こうというのですか…銀閣様？」

「銀閣君？」

「え？いえ、なんでもないです……すみません」

無言の圧力というか、なんとも説明しきれない何かに気おされて、銀閣は二人に詫びた。そして、女は可愛いところもあるが、やはり……怖い生き物だ…と再認識したのだった。

「さてと、華琳様…申し訳ないのですが、私たちはこの後行かねば成らぬ所がありますので、ここで失礼させていただきます」

徐庶は、ちょうど良いタイミングで曹操に切り出し、席を離れる旨を告げる。

「いいのよ、気にしなくても。それと、仕官したくなったらいつでも来なさい。歓迎するから。凛も待ってるとおもうわよ？」

「あっ、はい。ありがとうございます。まぁ、仕官はアレですが…凛ちゃんのことはよろしくお願いします」

こうして、席を離れる三人であるが、本当に眠くて仕方が無いのか……銀閣は『ふわぁぁ～』と欠伸（あくび）をしながら席を立ち、コキコキと首を鳴らす。そして、クルッと曹操に背を向けと、伸びた銀黒の髪が淑やかに揺れる。

「華琳様？どうかしました？」

目の端に映った揺れるその髪を、凝視してしまった曹操の耳に荀？の声は届いていなかった。

黒髪など珍しいものではない、銀黒の髪とて同じこと。しかし…いや…“そんなことがあるわけがない”という常識というフィルターが、“もしかして”という乙女の勘に蓋をする。

そして、思いのほか疲れているのだ…と、自分の思考を自嘲することで、思いついた“ソレ”と頭の端へと追いやった。

だが、その考えとは裏腹に、曹操の二つの眼（まなこ）は、離れていく銀閣の

後姿が人込みに消えるまで目を離すことはなかったのだった。

３３話（後書き）

・・・・・・・・・・・・・・・・・

ストーリーは遅々として進みませんが、少しずつ進めていきますので・・・・。

楽しいんでいただけると嬉しいです。

34話

…………………………………

洛陽を無事？出発した銀閣一行。
銀閣が調べてきた情報を元にしながら、方角的には漢中に直接向かう予定であった。

情報の信用度は怪しいものがあったが、過去の記述から巴顔喀拉（バヤンカラ）山脈にあるといわれる拳精山に、銀閣が悩む身体的変化の秘密を解く鍵がありそうなのだ。しかし、過去の地図と近年の地図を睨んでも、いくら調べても、正確な場所はわからなかったのだ。
故に、医学的にも、仙術的にも、この漢という国における“病魔”の治療先進都市である漢中ならば………と、当初の目的通りの旅を続けることにしたのだった。

が………。

「いやじゃ！嫌じゃといったら嫌なのじゃ〜」

年齢不詳？のちんまい少女……新たな南陽の太守（予定）は体中で自分の意思を表現していた。

床の上に寝転がり、手足をバサバサと激しく動かし、瞳は涙で濡れている……。
良家のお嬢様とは思えぬその行動は、ある種新鮮とも言える。しかし、それはそれ、これはこれ。

「あらあら……困りましたわね」（チラッ）

「いうことを聞いてくれるまで妾は此処を動かんからな！」（チラッ）

銀閣は、はぁぁぁ……と息を吐き出す。もう溜息すら売り切れそうだ。

「美羽、それに七乃……その台詞、３回目だ」

そう、床の上で暴れながら、チラチラと様子を伺う主従。コントのようなやり取り……本気なのか、そうでないのか判断に困るのであるが、どちらにせよ銀閣を困らせていることには変わりない。

袁術は半ば本気であろう、しかし、張勲は明らかに楽しんでる。あの笑顔がその証拠だ。“ああ、駄々っ子なお嬢様～最高に可愛いですわぁぁ”とか考えているに違いない。
そんな二人が、何故こんなことをしているのかというと……。

持ちつ持たれつとはいえ、世話になったが故に、洛陽で係わった人達に一応挨拶をしてまわり、さて出立するか……というときになって、すっかり“自分と共に南陽に向かう”と思いこんでいた袁術が、銀閣達の行き先を聞き、暴れ出したのだった。

随分と前に、張勲には伝えてあったのであるが、忘れていたのか、ワザとなのか、この場になって袁術の耳に入ったというわけである。

「嫌じゃ、妾は銀閣達と南陽に行くのじゃ！それがダメなら、妾が銀閣達についていくまでじゃ！」

と言い出したのだ。随分と懐かれたモノだが、張勲に説得をお願いしても、『あらあら……』と言うばかり。なんともし難いことで、無駄に時間だけが経過していった。

「仕方がないのです。銀閣君、南陽経由で漢中へ向かいましょう。少し遠回りになりますが、美羽ちゃんには一応恩義もありますし～お友達ですから」

「おお！風（ふう）、おぬしならば、そう言ってくれると信じておったぞ。」

程立の言葉をしっかりと聞いた袁術は、スクッと立ち上がるとその両手を握りしめた。無論、その瞳に涙などたまってはいない。苦笑する銀閣一行に対し、袁術と張勲は笑顔だったのが印象的な一幕だ

った。

（ふふふ……計画通り）

その思いは、誰のモノだっただろうか。

隙間から入る日の光。
自分を囲む陶器の冷たさ。
暗闇の中、そこには不安と圧倒的な絶望。
どれだけ泣いたかわからない、どれだけ嘆いたかわからない。

「ふぅうぇぇぇぇ……どうしたらいいの。どうなってしまうの……朱里ちゃん……」

生き別れた親友の名を口にするも、事態はまったくもって好転しない。
揺れるたびに体が痛み、殴られた傷を思い出す。どうしてこんなことになってしまったのか、自分の認識不足、世間知らずを恨めしく思う。

「こんなはずじゃ……なかったはずなのに……」

悲しみ底に沈む少女を無視するかのように、外様子が騒がしくなってきた。馬車の速度が上がっていくが揺れの激しさでわかる。

「おい！もっと速度をあげねぇと追いつかれちまうぞ！」

「わかってる！だが、これがめいいっぱいなんだよ！」

「荷が重すぎるか……なんとか振り切れ！でないと、どちらにしても俺たちゃ終わっちまう！」

「くそぉぉぉぉ、欲張るんじゃなかったぜ」

「とにかく、逃げ切るしかねぇ！」

どうやら、何かに追いかけられているようだ。聞こえくる男たちの焦り具合からも危機がせまっていることも感じ取れた。馬車の揺れはどんどん酷くなり、そして、沢山の馬の足音と野蛮な男たちの叫ぶ声や怒号も聞き取れる。

「あわわ……ど、どうなってしまうの……」

洛陽を出て、三日目の昼過ぎ。もう少しで南陽に到着するかという頃合いに、進行方向にて砂埃が発見された。ただちに斥候が放たれ、その原因が伝達されてくる。報告によると二台の荷馬車を黄巾賊の残党らしき集団が追い立てているとのこと。

「妾の領内で暴れるとは……許せないのじゃ！七乃！」

「はい、お嬢様」

張勲は護衛である親衛隊全員に追われている荷馬車の保護を命じる。日夜訓練に明け暮れている彼らならすぐに追いつき、賊を蹴散らすであろう。万が一討ち漏らしたとしても、ここには銀閣がいる。張勲は何も心配をしていなかった。

親衛隊達を追いかけるように、銀閣達の馬車も急ぎ駆ける。かなり揺れているのであるが、袁術は張勲に掴まりながらも仁王立ちし、『急ぐのじゃ！』といつもの姿からはうって変わり、真剣な面持ちであった。隣で“ああ……お嬢様……ご立派な……堪りません”と呟いていたことは伏せておこう。

さほど時間をかけずに親衛隊は賊を蹴散らしたようで、銀閣達がそこに到着したときには、すでに検分やら事情徴集やらが始まっていた。ガヤガヤと喧しい現場の中心では、捕まえた賊と……何故か、

助けたはずの荷馬車の主も縄で縛られていた。

「どうしたのじゃ！」

袁術の疑問はもっともなことで、親衛隊員の1人が事のあらましを説明していく。どうやら助けた商人らしき男は、人買いだったようで、荷馬車に積まれた沢山の大きな壺のなかから、少女が何人も発見されたのだった。国の法に定めるところ、人身売買は禁止となっており、捕まれば縛り首と決まっていた。

「助けたと思えば、人買いじゃったとわ！」

せっかく良いことをしたと内心喜んでいたのに、悪党と助ける結果になり、憤りから地面を踏みならす。

「黄巾賊の残党も討てて、尚かつ人買いも捕まえられたのであるから、大手柄でですよ！お嬢様」

しかし、そう言われると機嫌が直ったようで……

「そうか、妾の判断は正しかったというわけじゃな！」

と、無い胸を張って鼻息を荒らくした。

“商品”とされていた少女達は、助かった安堵と不安が入り交じった顔で、親衛隊から配られた水と食料を恐る恐る口にしていた。少女達は、誘拐されてきた者もいれば、実の親から売り払われた者もいて、帰る場所がわからなかったり、帰る場所そのものが無い者ばかりであった。

そんな少女達の中で、一際目立つ帽子……紫の大きな尖った帽子をかぶった少女に気がついた徐庶。

「雛里(ひなり)！雛里ではありませんか！」

名を呼ばれた少女は、声のする方へと目を向ける。見上げたその先には、自分のよく知る顔が目に入った。

「雫(しずく)ねぇさまぁぁぁぁぁぁぁ……」

今の今まで、少女は……空腹であった。疲労があった。不安でしかたなかった。なにより、この先にある自分の未来に絶望があった。

少女は駆け出していた。自分が敬愛する者のもとへ。

泣きながら、大声で名を呼びながら、少女は徐庶の胸元へ飛び込んだ。

温かかった、柔らかかった、そして、そこには……自分が望んでいた優しさがあった。

34話（後書き）

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ドンドンと……増えていきますね。

どうなっていくのか、さばききれるのか、まだわかりませんが・・・

楽しんでいただけたなら嬉しいです。

３５話

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

情報伝達手段の乏しいこの時代、隣の村の情報すら商人や旅人達から聞かなくてはわからない。
もちろん、大都市や国の情勢など庶人とっては知る術が無い。強いて言うなら、日々を生きることに精一杯な者たちとっては、知らなくても問題ないのだ。
だが、国を憂うもの、時代を読み取り、乗り切ろうとするものたちにとって、情報は何よりも大切なもので、千金の価値がある。

ここ襄陽にも、清流派の名士達が組織する情報伝達網によって、“黄巾賊による内乱が終焉に向かいつつある”というものが伝わってきた。
その内容は自分たちで撰紗し、判断しなければならないが、概ね信用に値するものだと考えられた。数万人を超える根無しの賊が、信仰だけで組織を維持・運営できるはずがないのだ。
人間は物ではない。食欲もあれば、疲労もする、怪我もすれば、ストレスも溜まる。ましてや、寝ないで動き回るなどできるわけがない。そして、簡単に死ぬ。
略奪によって消費される分を賄ったとて、いずれは破綻する。なぜなら、叛乱を起こしている黄巾賊の大半が農民であり、彼らこそが生産の担い手であったのだから。

故に、名士達は早ければ数年もかからず内乱は終結すると結論付けていたし、事実そうなった。
目端の利くもの、持論をしっかりと持っているものは、中央や腐敗

と横領がひどい都市からは、脱出し隠遁していた。

「これで戦火が収まってくれればよいけれど……私には、まだ終わりが来ないような気がしてならないのです」

襄陽名士会の一員である彼女が営む私塾の私室で、彼女を師と慕う生徒達の前でそうつぶやいた。
生徒といっても数人しかいない。皆、戦火の影響で殆どの者が帰省していた。
ここにいるものは、帰省すべき場所が無い者か、帰省すべき場所がとんでもなく遠方であるもの達だ。

そんな生徒の1人、諸葛亮は小さな体の小さな手を握り締めながら、大きな夢を心に描く。
彼女は思う、『自分の力を役に立てたい、自分の力を試してみたい、自分の力で世を平和へと導きたい』

「雛里ちゃん！雛里ちゃん！」

諸葛亮は、自分に親友の部屋の引き戸を開けながら部屋の主を呼ぶ。

「どうしたの朱里ちゃん？」

読んでいた艶本にしおりを挿みながら、諸葛亮のほうへと視線を向ける。
上気した諸葛亮の目が“爛々”と輝いており、なにやら熱く語り出しそうな気配が濃厚であった。

「あのね、さっきの先生の話なんだけど……」

「うん」

「私たちの知識と智謀を役立てたいと思ったんだ」

「う…ん？」

「それでね、理想を現実にできる意思と信念と力を持った人を探して……仕えてみようかなって」

「う……ん」

「雛里ちゃんは、どう思う？」

「え?!わ、私?」

「うん、雛里ちゃんは、どう思う?」

いきなり、突飛椰子もないことを聞かれ、一瞬困ったが、持ち前の回転の速さがやっと戻ったのか、諸葛亮の言いたいこと、そしてその意味を沈思黙考する。

「雛里ちゃん!雛里ちゃん!聞こえてる?」

「えっ、あ、うん、聞こえてるよ。そ、それは……素晴らしいことだと思うよ朱里ちゃん!」

「そうだよね!雛里ちゃんもそう思うよね!」

「うんうん」

朱里と真名で呼ばれた紫のベレー帽をかぶった少女は、諸葛亮　孔明。大陸史上もっとも有名な艶本収集家として名を残すことになる艶本大好きっ娘である。その部屋に隠された艶本は、巧みに偽装されており、決して悟らせないことにかけては水鏡女学院でナンバー1であった。内気な性格とは裏腹に、計画は綿密に、行動は大胆に

……と、意識せずに周り（主に鳳統）を巻き込んでしまう天然さんである。

そんな彼女の親友……鳳統　士元。真名は、雛里。学院内統一模試で常にトップを諸葛亮と競い合う天才少女である。しかし、元来気が弱い彼女は、何かと自分の意見を押しと通すことができず、また、荊州の名士・？徳公の従子ということもあって、影で陰湿なイジメに悩んでいたりした。それもあってか、心の友である諸葛亮以外に友人を持たない……姉と慕う人物がいたのだが、理由があって今は会えないことに孤独感を抱えながらも、寂しさを艶本で補完する引き篭もりっ娘である。

諸葛亮とこの世を愁い、平和なる世を作り出す、または導くべき方法などを熱く語ったのは三日前。

「あの日から……私を取り巻く全てが変わったんだと……そう思いましゅ……」

鳳統の著作……後生に残る史実書　『同居だわ～アカンて、僕っ娘（こ）～時々、男の娘（こ）？』の書き出しには、そう記述されていた。

兎にも角にも、親友の行動は迅速であった。気がつくと、新野行きの乗り合い馬車の中であった。

思い返せば、水鏡先生との別れの食事会や壮行会などに出席していた記憶があるのだが……。

「えっ!?私も!?」

「ん?どうしたの雛里ちゃん?」

「えっ!朱里ちゃん……なんで私はここにいるのかな?」

「何言ってるの?私達、親友でしょ!」

「あっ、うん……そうだよね……」

「もう、おかしな雛里ちゃん」

「ご、ごめんね……」

諸葛亮から視線を外し、窓の外を見ると住み慣れた襄陽の街が小さくなっていく。今更ながら、親友の行動力と自分の行く末に不安を覚えるのだった。

『がんばれ雛!私は、やれば……出来る子……やれば出来る子……やれば……やれる……かな』

そう心の中で自分を励ました。そうでもしていないと、心が折れそうであった。そして気がつくと、鞄の中から無意識のうちに、お気

に入りの艶本を取り出していた。これを読んでいる間は、嫌なことを忘れられる……

「雛里ちゃん、早く次の頁へめくってよ」

隣から覗き込んできた親友が促す声に、瞬時に現実へと引き戻された。鳳統は、自然と目から汗が流れ出るのを止めることはできそうになかった……。

新野へ無事到着した諸葛亮と鳳統の二人は、自分たちが“仕える価値”のある人物の情報を得るために、新野在住の名士を訪ね歩いた。勿論、諸葛亮が仕切っているわけだが、その結果、洛陽へ行くこととなった。黄巾賊の乱が一段落し、その鎮圧や討伐に参加し、功を上げた諸侯が終結している……と聞いたからである。

急ぎ、洛陽行きの馬車を捜すが、なかなか見つからなかった。それもそのはず、襄陽に比べると新野は小さな街。当然、商人団や乗り合い馬車の数も限られている。ましてや、戦火の中心地であった南陽を通過するのは、小規模の商人団では心許ない。故に、護衛や馬車の金額もやや高騰し、諸葛亮と鳳統は財布の中身を勘案しながら、途方に暮れていた。

「あのとき、新作を手に取らなければ……」

「朱里ちゃん……今更そんなことを言っても仕方がないよ……」

久しぶりの旅……そして、無駄にテンションの高い諸葛亮の財布の紐は……ゆるかった。寄り道する必要のない書店に、ふらりと立ち寄り……艶本を“ついつい”“何冊か”買ってしまい、宿代を鳳統に借りるはめになる始末。金子をどこかで補充するか、稼がなければ、志半ば……いや、初手で襄陽に帰るハメになりそうだった。鳳統としては、それでもいいかな……なんて少しだけ思っていたりしたが。

「朱里ちゃん……どうする？」

「ふふふ、私に任せて」

鳳統を宿屋に残し、1人で外出した諸葛亮が戻ったのは、日が沈み辺りを静寂が支配した時間だった。

「出立するよ、雛里ちゃん」

「こんな時間に？」

ただでさえ情勢不安、街の中とはいえ、うら若き乙女が出歩くには危険な時間である。知謀にはそれなりの自信はあるが、武術など嚙ったことすらない二人には危険すぎる……鳳統の疑問は当然だった。

「大丈夫、ちゃんと作戦考えてあるから」

ここまでくれば親友の言葉を信じるしかない。信じないことにはやってられない。というか、信じていいんだよね?促されるまま宿屋を引き払い（支払いは当然、鳳統が済ませた）、二人は、商人達の荷馬車が終結している場所へと近づく。

そこでは、早朝の日の出と共に出発する予定の商人団が準備を終え、その周りで見張り番達が、酒盛りをしたり、雑談をしたりしていた。そんな荷馬車に……コソコソ、トコトコと近づく二人。

「あっ、これだこれ、雛里ちゃん、これに乗るよ」

声を落とし、コソコソと囁く。もしかして……とは思ったが、鳳統の“嫌な予想ほど良く当たる”というスキルは見事的中を果たす。

「えぇ～朱里ちゃん、これって！」

「しぃ～雛里ちゃん、声が大きいよ、静かに！静かに」

「で、でも……」

「大丈夫、次の村までだから」

いくら金子を節約したいとしても、やっていいことではない。しかし、ゴゾゴゾと乗り込んでいく諸葛亮の背中を見つめながら、すでに引き返せないところまできていることを痛感する。鳳統も仕方なく荷馬車へと無事侵入を果たす。

無銭乗車者二名を乗せた荷馬車は、護衛団付の商人団であった。さすがは諸葛亮が目をつけただけのことはあり、順調に中継地点に位置する村までやってこれた。そして、夜になるのを待ち、またゴソゴソと馬車から逃げるように離れるのだったが……

「おい、お前……そこで何をしている」

野太い男のドスの効いた声が背後から聞こえる。

「あわわ……」

ドスっ！

鈍い音と共に、鳳統の意識はそこで消えた。

「ふぅ～なんとか上手くいったね雛里ちゃん」

先行していた諸葛亮が振り返りながら、親友に声をかけるのだが……そこには誰も存在していなかった。
取り敢えず物陰に隠れながら、周りをキョロキョロと探るが、見つけられない。

「雛里ちゃん……どこいったの～」

涙目の少女は、見失った親友を探し、村を徘徊することとなるのだが。
ここで予期せぬ事態が発生する。交易の中継地点である……この村を虎視眈々と狙っていた黄巾賊の残党が急遽攻め立ててきたのだ。

村を守る傭兵、義勇兵は守りを堅め、防衛に徹することとし、商人達も街を囲むように構築された壁堀の外へ出ないように通達がまわった。だが、“鮮度が命”である商品を扱う一部の商人達が、忠告を無視し街の外へと飛び出していく。そして、それらの行動は、当然のように賊が知るところとなり、執ように追いかけられることとなるのであった。

追いかける賊と逃げる商人達、重い荷を積んだ馬車が、一台、また一台と脱落し、略奪されていく中、他を蹴落とし疾走する二台の馬車は、“馬の限界”と“幸運の残高が０”になるまで走り続けたのだった。

「あわわ……でも、あの絶望的な不運がなければ、私はこうしてご主人様と出会えなかったわけだから……そういう意味でも、朱里ちゃんには凄く感謝してるんだよ？」

ゆったりと紅茶の入ったカップを円卓へと戻し、照れたように笑う少女は、何年か後……そう語ったという。そして、それを見せつけられた親友は、無性に悔しいような、寂しいような思いをし、さめざめと泣いたとか、泣かなかったとか。

３５話（後書き）

・・・・・・・・・・・・・・・

１２月になりましたね。

今年もあと僅かではありますが、頑張りたいと思います。

朱里……少し、はっちゃけすぎていますが、お許し下さいませ。

楽しんでいただけると嬉しいです。

３６話

…………………………………………………

大筋の過程を一気に喋りきった後、安心したのか眠ってしまった少女の頭を……徐庶は自分の膝に乗せ、久しぶりに梳く髪の感触を懐かしんでいた。昔は、よくこうして鳳統や諸葛亮の髪を梳いてやったものだ。あの幼かった二人が、この乱世へ飛び出してくるなど……あの時は想像すらできなかったが、これもまた運命なのだろう……そう思った。

「随分と……恐い思いをしたようだな」

子猫のように丸まりながら眠る少女の傍らで、銀閣は他の面子と共に少女の寝顔に目をやり、再び徐庶へと視線を戻す。

「そのようですね……まったく、この娘達は世間知らずのくせに、頭でっかちで、全てを机上の延長で物事を推し量るモノですから……一歩間違えば……本当に、運がよかったですわ」

優しい目で寝顔を見つめる徐庶のそれは、妹を気遣う姉のものだった。

「それで、こやつは何者なのじゃ？」

銀閣の膝の上を占領している袁術が痺れを切らしたようだ。銀閣の背中にくっついている程立も興味深げであった。

「この娘は、鳳統　士元。荊州の名士・？徳公の姪っ子で、襄陽にある水鏡女学院の生徒です。私も一時期お世話になっていましてね、それで知り合いました。局部的な戦術、軍略論に置いては私を凌ぐ知謀と“閃き”そして、最悪の事態を予測する“冴え”を持っていますわ。水鏡先生曰く、『将来、知謀を活かせる立場にあれば、策…神を差し置き、謀…鬼すら焼き尽くす鳳凰となるでしょう』と。それでその雛鳥ということで、“鳳雛”と呼ばれていましたの」

“鳳雛”

その言葉を聞くと、銀閣は一瞬固まった。思考が停止し、視線は自然と鳳統へ。

（鳳統……だと！）

この世界に足を踏み入れ、いくつかの驚きを経験してきたが……このちんまい少女が、あの“伏龍”と相対する“鳳雛”だとは、なんとも不可解でおもしれぇじゃねぇか……正に雛鳥を連想させるその姿に、銀閣はそう心の中で唸った。

「銀閣君……やけに熱く見つめてますね～ま・さ・か！」

「いやいや、それはねぇよ」

「むむむ、発展途上の少女の肉体に興味がないと……そういうわけなのですか～？」

「ないない、ねぇよ」

「な、なんと、まさか、風の身体に飽きてしまったと……オヨヨヨヨ」

「風さん……それ自爆ですよね」

袖口で目元を隠し、泣き真似をする程立。自らの身体を発展途上と定義つけてしまったことに、徐庶から突っ込みが入るが、程立の反応は違っていた。

「風には、雫ちゃんと違って、未来があるんですよ～なので～これから成長するんで……イタタタッ！」

徐庶に米神をギュゥーっとされ、最後まで言い切ることは出来なかった。何気に自分の“やや薄いといえなくもない”胸元を気にしているようである。また、年齢的にも程立とは、三歳差があることもお仕置きの原因のようであった。

銀閣も男である、胸の話を聞かされれば当然……その視線は……。

程立を見……。

徐庶を見……。

鳳統を見……。

袁術を見……。

張勲を見……。

「銀閣君？」

「銀閣様？」

「……？」

「あらあら」

微妙に室内の気温が下がった気がした銀閣は、この世界に来て何度目かの命の危機と感じた……気がした。

「さてと……俺、そろそろ寝るから……」

そう言って立ち上がろうとしたのだが、裾をガッチリ掴んで離さない程立から沸き上がる……なにか黒いモノに動きが止まる。

「銀閣君～今、七乃ちゃんの胸を見ている時間がちょっぴり長かったのは～気のせいでしょうか～」

「銀閣様……後で、少しばかりお話がありますから、そのおつもりで」

「ふふふ……あらあら、だめですよ～この胸はお嬢様のものですからね」

今更、胸なぞ見ていない……なんて言い訳は通じるはずもなく、その夜……何故か女性の機微に対する男としての在り方というものを懇々とお説教されるはめになった。

そんな、銀閣にとって苦痛な時間も佳境に入った頃、一息入れるためお茶の準備をしている徐庶の傍らで、程立はやや、赤くなりながらモジモジっと……。

「だいたい、風の胸が小さいのは、銀閣君のせいだと思うのですよ～」

「えっと……わけがわかんねぇんだが？」

程立の発言に、徐庶も手を止める。シーンっと静まりかえった空間の中。

「だからぁ～銀閣君が～風の～む、胸を……揉んでくれないので／

／／／」

「風さん、それは何処から得た知識ですか？」

読書量では程立に勝る徐庶にしても、その知識の元にピンっと来なかったようだ。程立のことである、市勢の噂や信憑性の無い話を鵜呑みにはすまい。

「黄帝が記した内経の書１８巻の内『経脈』の項の一説に記載されているのですよ」

「具体的には？」

程立は、声を潜め、徐庶の耳元へのみ聞けるよう……顔を近づける。

「本当に秘密な事にしなければならないのですが、雫（しずく）ちゃんだから教えます～書には、意中の異性に胸部を揉触され続けることで、内気が整えられ、経脈が発達し、膨らみが促進される……と」

「そ、それは、つまり！」

「詳しい医学的なことは～風にはわかりませんが、揉まれることで、胸の中にある経脈が胸を大きくする効果の気を分泌するのではないかと、あと異性の体温も関係するのだとか」

銀閣をチラチラ見ながらも、コソコソと程立と徐庶は……胸な話に夢中のようである。しかも、その内容は、秘密といいながら……銀閣に聞こえるように話しているから質が悪い。

この時代の最新の医学書『黄帝内経』は、“聖人は既病を治すのではなく、未病を治す”という言葉からもわかるように、病気に成っていない身体を内側から治し、また、健康を維持するという概念から書かれている。“漢方”という医術の根本はここからきているのだ。

銀閣は、元の時代にて、『黄帝内経太素』の写本を読んだことがあった。勿論それは、写本であるし、全巻分が正確に揃っていたわけではない。だが、『鍼経』にある内容は、一通り目を通していたのだが……さきほど、程立が言ったような『おっぱいは揉んだら大きくなる』なんてことは書いてなかったと記憶している。たぶん……。

だが、今ここで、それを否定してしまっていいのだろうか……と悩む。だが、否定しなければ、日夜……揉むことを強要されるであろうことは予想できる。しかし、否定してしまえば、可能性という希望に縋ろうとしている乙女たちの夢を打ち砕くこととなり、なんとなく罪悪感を憶えてしまう。

揉むも地獄、揉まざるも地獄

胃がキリキリ痛くなる銀閣であった。だが、あながち嘘というか、偽りでもないのだが、全ての人に当てはまるわけでもない。真正ならば、貧乳…いや、やや可哀想な胸に溜息を漏らす女性が居なくな

っているだろうから。あればあるで悩み、ないはないで悩みの元となる“女性の胸”……女体の神秘を解き明かすには、まだまだ修行が必要なようである。

「結局……揉めば、納得するんだろうな……結果がどうあれ……」

銀閣達の夜は、まだまだ長そうであった。

36話（後書き）

・・・・・・・・・・・・・・・・

お待たせ致しました……が、少し短くて済みません。
楽しんで頂けると嬉しいです。

37話

・・・・・・・・・・・・・・・・

トントントン……

カンカンカン……

ギーコギーコ……

街のあちこちでは、資材を加工する音、建物を修繕する音などで喧しい。今、南陽の街は、復興に向けて職人や官僚、兵士、市民と皆が一丸となってとなっていた。少し前までは、黄巾賊に襲撃され、占領され、略奪と暴力に見舞われたこの街は、荒廃しきっていた。人々は隠れるか、逃げ出すしかなく、まさに世紀末の縮図のようであったのだ。

しかし、袁術の太守就任が決まってからは、一変して復興への動きが加速する。

まず、先行して南陽に到着した袁術配下の者達は、街に潜む残党狩りと治安の確保、庁舎、宿舎、城壁、城門などの修繕、市民への炊き出し、孤児の保護、破壊された民家の立て直しや職の斡旋など、莫大な袁家資本を使い、街をしての機能を取り戻すべく尽力した。

袁術一行が到着した時には、最低限ではあるが太守が住まう街とし

ての機能が回復していた。であるからして、当然のように、市民は太守である袁術に感謝の意を持って迎え入れたのである。その殆どは、張勲が差配した結果であるが、彼女はそれをひけらかしたりはしない。全て袁術の為に成したことなのだから。

そんなこともあり、また愛くるしい容姿も相まって、南陽の街では『姫』『お嬢様』といえば太守である袁術を指す名詞となるのに……そう時間はかからなかった。

「随分と歓迎されてますね～美羽ちゃんの人気は凄いのです」

「まぁ当然じゃな。妾の力を持ってすれば、このようなこと簡単なことじゃ」

胸？を張り“エッヘン”と腕を組んで宣う袁術は、なにげに可愛い感じである。周りも微笑ましいのか皆ニコニコとしている。

（ああ、何もしてないくせに、その自信満々なお嬢様……可愛すぎますぅ～）

約1名、悶えていたが、一行は……敢えて無視することにした。

庁舎に到着すると、袁術と張勲は部下達からの経過と進捗などの報告を聞き、この先の南陽及び荊州北部の統治計画を打ちださなけれ

ばならなかった。張勲は、袁家筆頭政務官として、袁術第一の家臣として超多忙な日々がスタートしたのであった。

「それでですね、実は皆さんにお願いしたいことがありまして」

いつになく真面目な張勲の言動……嫌な予感がヒシヒシとする銀閣をよそに、話は進んでいく。

「もう少しだけ、皆さんのお力をお借りしたいのですよ」

張勲曰く、袁家の長老という名の老害達を排除し、本当の意味で袁術を独り立ちさせたい……と。信用できる部下はいるものの、まだまだ人材不足であり、南陽の街も税を徴収できるようになるまでには時間がかかる。そこを老害達につけ込まれ、権益をかすめ取られるワケにはいかない。故に、運営が軌道に乗るまででいいので、手を貸して欲しい……と。

「勿論、客将として、友人として、破格の報酬はご用意させて頂きます」

まずは、手付けとして……そういって机に置かれた革袋には砂金の大粒が詰まっていた。だが、銀閣としては、金子よりも時間が惜しい。

「七乃には悪いが、俺は……」

張勲は、銀閣の言葉を聞き流すようにして、程立と徐庶へ視線を移す。

「雫さんには……コレを。そして、風さんには、こちらを」

彼女たちの前に置かれた物……徐庶の前には、竹簡が三巻。程立の前には、高級そうな木箱が置かれた。
いったいそれにどれほどの価値……二人を足止めするに値する物なのか、銀閣にはさっぱりなのだが……。

「こ、こ、これは！まさか……」

「はい、雫さんの見識通りかと」

「いや、しかし……ありえない……」

「ふふふ、袁家の財を持ってすれば造作もないことですよ」

動揺しながら……手を震わせている徐庶が見つめるその先にある巻物。

それは、近年、金銀に輝く髪を持つ種族『欧羅巴人』が住む国へ迷い込んだ少年『丸子（まるこ）』が、母を捜しながら、お供の猿『阿牝璃男（あめりお）』と共に旅した際、つまみ食いしたり、くすねた菓子や食べ物の事を書き記した『希臘喰倒の書』の写本であった。

当然、西洋の情報など皆無に近いこの時代。超遠距離交易の危険性の高さから、まさに異境の国である“欧羅巴”。内容の正確さや濃さは兎も角としても、貴重な情報源であることには間違いなく、また、密かに“お菓子作り”を趣味としている徐庶としては、是が非でも手に入れたい一品なのだった。勿論、その希少性の高さから、原本は元より、写本の写本すら超高額であり、庶人では目に触れることすら叶わない存在……。

興奮気味に巻物と睨めっこする徐庶を横目に、『雫ちゃんたら……しょうがないですね～』と心の中で呟いた程立は、自分の目の前に置かれた木箱の家紋を見て、衝撃を受ける。

「こ、これは……」

「さすが風さんですね、やはりご存じでしたか……」

「でも、ここにある理由が、いえ、ここにあってはいけないものでは……」

「蛇の道は蛇。袁家の権力と財力を持ってすれば、難しくはありませんよ？」

木箱に焼き印されているのは、『牌牌軒』の家紋。それを見ただけ

で、程立は鳥肌がたつのを自覚する。

「帝専属の甘味職人集団『牌牌軒』が丹誠込めて作り上げた最高級棒付飴菓子……『紅炉秘露（ぺろぺろ）』それが、１２本入っています」

ゴクリっ……そんな音が聞こえそうなほど憔悴しきった程立の姿に、銀閣は、見てもいない箱の中身がなんなのか気になった。

「へぇ、その箱の中身はそんなに凄いものなのかい？」

ギギギ……音がしたなら、そう聞こえたかも知れない。驚きの顔をしたまま、首だけを器用に銀閣へと向けた程立。

「この焼き印は、漢王室専属の特級調理格闘師達の中で、最も優れた職人として選ばれた三人……通称『鉄人』といわれる方達の１人、超特級甘味調理師“紅鉄人”が率いる甘味職人集団『牌牌軒』謹製の証……」

「いや、しかし、棒付飴ならいつも舐めてるじゃねぇか」

いかにも、“やれやれ……”そんな眼差し。

「ふふふ……わかってませんね～銀閣君は。あれは、『牌牌軒』に

入ることができなかった甘味職人が見よう見まねで作ったといわれる贋作です。まぁ、値段も手頃なので風の懐的にはちょうどいいのですが、それなりに美味しいですしね。しかし！本物の紅炉秘露（ぺろぺろ）との差は、月と海底ほど違うと言われて居るんですよ～庶人はもとより、諸侯でも、一生に一度手に入れられるかどうか……そんな品なのです。なんといっても漢王室専用職人達が作る至高のお菓子ですし～お金をどれだけ積んだとて、手に入らない物なのですからね……一応」

得意げに語る程立は、楽しそうである。何しろ飴菓子好きな自分が死ぬ前に、一度で良いから食べてみたい……いや、舐めてみたいと思っていた物が目の前にあるのだから。それも１２本だ。

「さて、改めて……お二人のお気持ちを聞かせて頂けますか？」

ブツを熱く見つめる二人に真剣な表情を崩さず、張勲は返答を促す。静まり帰った室内に、ツバを飲み込む音だけがやけに響く……そんな気がした。

「わ、わ、私の、こ、心は銀閣様のもの。こ、このようなもので私を試そうなど笑止千万ですわ」

「はぁ～あぁぁぁ～、残念です～すっごく残念です。本当に残念です～でも、でも、銀閣君のそばを離れるなんて風にはできないのです～」

手に取るように動揺と未練が伝わってくるが、彼女たちは彼女たちの強い意志を示して見せた。銀閣としては、強要はしないし、彼女たちの好きにすればいいとさえ思うのであるが、彼女たちは選択しているのだ。それも、自分の中にある強く暖かいモノを信じて。

「そうですか、これならば……と思ったのですが、残念です」

張勲は、巻物と木箱を元の包みへと戻すと、自分の足下へと片付ける。その様子から目を離さず、視線で追いかけ……深い溜息を漏らす二人。そんな彼女たちの気持ちが痛い……そう想う銀閣は、己の心に問うてみる。

「銀閣～妾達を置いて旅へにいってしまうのかえ？もう少し……ここにいてもいいではないか……」

皆のやり取りを見ていた袁術が、寂しそうに、消えそうな声でそう問いかける。初めて出来た心から笑える仲間が離れていくのが我慢できないのであろう。しかし、袁家当主として、南陽太守として、心を踏ん張るしかない……出会いがあるから、別れもある。頭では理解できるものの、心は別のようであった。その証拠に、二つの眼には、光る何かが貯まっていき、今にもこぼれ落ちそうである。

「わかった、わかった、わかったよ。本当にしょがねぇな。少しだ

けだぞ、あと少しだけ、ここにいりゃいいんだろ。七乃、乗せられてやるよ、だからそれ、二人にやってくれ」

「えっ！いいのですか～銀閣君？」

「銀閣様、それでは……」

「おお、銀閣！」

「ふふふ……」

「いいんだ、いいんだよ。急いだところで、結局は手探りなんだ。少しばかり道草を食ったと思えば、どぉってことはねぇ、だから、それ、貰っておきな。欲しいんだろ？」

「風を見損なわないで欲しいのですよ。物欲に負けるほど、脆弱な気持ちではないのですよ」

毅然とした眼差しで、銀閣に向き合う程立であるが故に、銀閣もまた真面目な顔をする。

「旅は道連れ、世は情け。合縁奇縁で意気揚々ってな」

「……？」

「まぁ、焦ることもねぇ、これもそれも、何かの縁。だから、気にするな」

銀閣にそう促され、包みを程立と徐庶へと手渡す張勲は満面の笑みであった。そんなわけで、一行の南陽滞在は今暫く続きそうであった。時代の急変はすぐそこまで迫っているのだが、その時は誰もそのことに気付くことはできなかった。

「ふぁぁぁぁ～取り敢えず、俺はもう寝るからな。眠くてしかたがねぇや」

心底眠そうな銀閣の欠伸姿に、彼女たちは何を思ったのであろうか……。

37話（後書き）

・・・・・・・・・・・・・・

やっと投稿できました。
お待たせいたしました。
楽しんでいただけると、嬉しいです。

38話

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

日を追うごとに、復興が進み、活気づいていく南陽の街。袁家の財力が成せるワザなのか、政務を取り仕切る者達の尽力の結果なのか、とにかく荊州及び周辺地域において南陽の噂はどんどん伝播されていったようだ。その証拠に、元住民や、金の匂いに敏感な商人達が、南陽の街へとやってくる。急激な人口の増加は、需要と供給のバランスが不安定になる原因となるのだが、そこは上手くコントロールされているようである。しかし、単純に人が増えれば、不平不満、争い事、そして犯罪などが比例して増えていくものである。

「えぇ～なんやて！売り切れやなんてどういうことやねん！」

酒屋の店主が胸ぐらを掴まれ、凄い剣幕で怒鳴られていた。妙な方言で攻め寄る女性は、ゆっさゆっさと店主を揺さぶる。

「も、申し訳ございません！ですが、全て売り切ってしまいまして、現在…入荷待ちの状態なんですよ」

小太りの店主は、汗をかきかきしながら、懸命に説明するのだが、女性の切れ上がった眼光は和らぐ気配がない。

「なに言ってんねん！あんたの後ろにある瓶！あれは酒やろ！それを売ってくれ言うてんねん！」

彼女が目をやる店の奥には、確かに大きめの瓶があり、その蓋の上には杓子が乗っている。つまり、瓶のはまだ酒が入っており、いつでも取り出せる状態であることが伺えた。

「いえ、ですから、あれは既に売約済みになっておりまして、お売りするわけには……」

「ええやん、少しくらい分けてぇな！金ならちゃんと払う言うてるやろ！」

「と、とんでもない。あれは、姫様より仰せつかったものでございます。そんなことは出来ません」

懸命に説明するのであるが、どうにも納得してくれない客に心底困った店主であるが、それでも商人としての道理を曲げるつもりはないようだ。南陽の街に住まう者たちにとって、姫様……つまり袁術への感謝の意は、忠誠心や義理などという言葉では表せないほど深くなっており、現に店主も袁術から直接頼まれているこの酒の管理には人一倍気を使っているのだ。故に、「はいそうですか」と売るわけにはいかない。

「なんや！まったく。洛陽から早馬でやってきたウチに、少しくらい融通してもええやんか。いうたらなんやけど、ウチはこれでも洛陽におわす大将軍　何進様配下の将軍なんやで？」

言葉でたりなければ、金。金で足りなければ、権力。本当はそんなことをしたくはなかったのであるが、彼女としては、大好きな酒を飲みたい一心だったのだ。しかし、店主にしてみれば、堪ったものではない。かといって、庶人であり商人でしかない店主にそれをはねのけることは難しくなってきた。

そんな折り、街の巡回をしている袁術親衛隊が、店からの喧噪を聞きつけやってきたのだった。

「こら！何をやっているのだ！やめんか！」

胸ぐらを掴む手を取り、店主と女を離そうと力を込めるのだが……びくともしない。女の怪力に…ぐぐぐっ…と唸るが、それでも駄目のようだ。

「なんや自分、なにすんねん！」

パッと店主から手を離すと、店主は勢い余って後ろに転げるが、なんとか無事のようだ。女と親衛隊員が睨み合うその後ろで、自らの無事を確認した店主は、ハッと閃き、急ぎ店から走り出す。そう、こんなところで暴れられては、店は勿論、酒も瓶も無事では済むま

い。急ぎ、なんとかしなければ……。

「で、嬢ちゃんはこれからどうすんだい？」

とある四つ辻角にある甘味屋で、ほんわか甘い栗のお菓子をお茶請けにしながら、銀閣達は休憩していた。詳しくいうと、程立と徐庶の休憩に銀閣と鳳統が付き合わされている……そんな感じである。先般の契約により、客将として南陽及び荊州北部の政務の一翼を担うこととなった程立と徐庶。めまぐるしく動き回るが、そこは乙女……お茶の時間はキチンと取っているようだ。どこぞの腐海に埋もれていた某将軍とは、できが違うようである。

そんな彼女達とお茶をすすっている銀閣はというと、決まった仕事や職務などはない。いうなればヒモ？遊び人？まぁ、ぶっちゃけそんな感じである。今、もっとも必要な人材は政務官であったこともあるが、南陽の警護や守備は、紀霊率いる親衛隊が担っているため銀閣に出番はない。素より単騎での戦いを基礎としている銀閣にとって、集団での連携戦や教導などは無理なのだ。というか、やる気もなかったりしたのだが。

そんなワケで、放っておくと色々と面倒なことに巻き込まれたり、無意識に女の子に甘い銀閣を野放し……いや、とにかく、目を離す

わけにはいかない二人は、忙しいにもかかわらず、何かと理由をつけては銀閣を拘束……いや、束縛していた。

「あわわわ、どうしたらいいのでしょうか……」

突然質問されたことに驚いたのか、はたまた自分の中での答えが見つからなかったのか、俯いてしまった。湯飲みの中で揺れる水面…それに映る自分。鳳統は思考の海へと漕ぎだしていく。

『朱里ちゃんに連れ出され……結果ここにいるけど……私は本当に、何をしたくて此処にいるのかな……』

襄陽に帰るか、朱里を追いかけて洛陽へ行くか、もしくは……だが、どれが自分にとっての正解なのかがわからなかった。誰かに流され、促され、押され、引っ張られ、そんな生き方だった。妄想に浸っているときに自分は、かなり積極的（艶本の影響）であるが、現実は、引っ込み思案で…人見知りで…恥ずかしがり屋。艶本世界で生きられたら……なんて現実逃避する日々を謳歌していた自分は、この先何を考え、何を成すべきなのか。

「私は、朱里ちゃんと諸侯の元で、知識や知恵を活かしたいと、活かせるとばかり思っていました。でも、雫（しずく）姉様に言われて思い至りました。私のような無名の士が、いきなり諸侯の元に行ったとて、召し抱えられるはずもないでしゅ……よね」

思い至ったことに対してか、噛んだ事に対してか、ショボ～ンと俯いたままだ。

「どうしたらいいのか……どうしたらいいと思いますか？」

その言葉に、一行は無言で鳳統を見つめるしかなかった。そして、沈黙の風は通り、暫く一同は身動きすらせずに、鳳統の言葉を待っていたのだが……彼女が答えを出すには、助けが必要のようであった。

「誰かに言われて、成し得る事に価値はねぇよ。自分がやりたい……そう思ったことをやればいい。ただそれだけのことだろ？」

「で、でも、私、朱里ちゃんに連れてこられて、行き先も決まってないし、でも、この世の中が、あんな恐い思いしなくてもいいぐらい平和なればいいと思います、けど、何をしたらいいのか、何処へ行けばいいのか、どうすればいいのかわからないし、自信も無いし、人見知りだし、男の人は恐いし、今更…襄陽に帰れないし、笑われたくないし、それに…1人でなんて無理ですよぉ……」

目に涙をうっすらと滲ませながら、顔を上げた鳳統であるが、発した言葉は整然とせず、ただただ思ったことを口走る。端から見れば、銀閣が……いじめているようにしか見えなくもない。しかし、そんなことは気にせず、というか気にもしないほどの怒気が店内にこだ

ました。

「言い訳しながら生きてんじゃねえよ！てめえの生き方決めんのは、てめえ自身だろがぁ！」

ビリビリッとした空気と怒号が、その場にいた、その店にいた、その声を聞いた者の心に突き刺さった。

悪いことがあれば、嫌なことが有れば、誰かの所為にし、責任を転嫁し、自分は悪くない、周りが悪いんだ……そんな生き方のほうが簡単で、楽だ。しかし、そんな生き方で、つかみ取れるモノなどたかが知れている。

それ故に、銀閣は……三国志の歴史上…優秀な戦術家として名を残す（予定）鳳統の余りにも後ろ向きな姿勢に腹が立ったのだ。何もしていないくせに、足を踏み出してもいないのに、出来ない、自信がないだの笑止。

「剣士が、剣士たる神髄は、いかに素早く、正確に人を斬れるかどうかだ。だが、誰だって最初から斬れるわけじゃねぇ、恐ぇし、覚悟もいる。なんたって命の取り合い、奪い合いだ、どちらかが死に、どちらかが生きる。そんな世界に足を踏み入れる奴でもよ、いいか？最初は木刀を握り、それを降るところから始めんだ……」

怖々としながら、聞く銀閣の言葉は、素直に胸の内へ入ってくる…

…そんな気がする。そして、『そうか！』と閃くのだった。

「そうですよね。私に足りないものがわりました。ご主人様、ありがとうございましゅ……あぅ噛んじゃった……」

「「！」」

目を輝かせながら、さしずめ開眼した…とでもいうのか、キラキラした笑顔で銀閣を見つめる鳳統へ、ギギギ……と、顔を向ける程立と徐庶もまた、にこやかだった。ただ、目は笑ってなかったが…。

「雛里ちゃん？」

「雛里？どういうことですの？」

声質にやや冷たさを孕んだ二人に当てられたのか、『あわわわわ……』と身を縮こまらせた。

「あの、私には経験というものが全くないので……それをまずを……」

「そうではなくて！」

「今～銀閣君のこと、“ご主人様”って……どういうことなのでしょうか～」

極寒の冷却的な風をその身に感じながら、突如降臨した般若……いえ、女神に怯える雛鳥が1羽。

「あわわわ……あの、銀閣様は、雫(しずく)姉様のご主人様なんですよね？だから、私もそうお呼びした方が良いと思って……」

般若が如来になった瞬間を見た……後日そう語る銀閣は決して大げさではなかった。事実、徐庶は、瞬間移動したかのような素早い動きで、鳳統を優しく抱きすくめ、その言葉を全て言わせなかった。

「雛里。その通りです。よく言えましたね。銀閣様は、私の“ご主人様”です。ふふふ、ご主人様ご主人様……」

ご主人様を連呼しながら、嬉しそうに銀閣を見、ニヤリっと程立を見る。ちょっと悔しそうな程立に首を傾かせながらも、抱きつかれて、モゴモゴしている鳳統が窒息していないかが気になった。

「雛里ちゃん……天然なのか、策士なのか……侮れませんね」

そんな異様空間に、店の店員から声がかかったのはそんな時であった。

「旦那ぁ～！旦那ぁ～！宇練の旦那ぁ～！いやせんかぁ～！旦那ぁ～！」

ありったけの大声を絞りだしながら、酒屋の店主は路上で叫び声を張り上げる。少し走っては叫び、また少し走っては叫び、そんな中、声を聞いた誰かが、また誰かに、探し求める人物へと伝播させる。

「なんでぇ、オヤジ。そんな声を張り上げねぇでも聞こえるぞ」

馴染みの酒屋の店主が捜している……そう聞いた銀閣は、眠そうな顔をしながら甘味屋から声を掛けた。

「ああ旦那！ここにいやしたか！大変なんでさ、いいから早く来て下さいよ！」

38話（後書き）

・・・・・・・・・・・・・・・

どんどん登場人物が増えていく……当たり前ですけど。

オリジナル要素を多く含む作品ですので、そこは、広い心と、暖かい眼差しでお許し下さい。

楽しんで頂けたなら、嬉しいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4608q/

真・恋姫†無双～外史～異国の剣士

2011年12月17日06時47分発行